651-23-(11)
1200501569882
25
O
複
写

3Q-61

顧問
井上通泰先生
山田孝雄先生
新村出先生

正宗敦夫 編纂 校訂

東海道分間繪圖

東海道分間繪圖

合資會社 日本古典全集刊行會壽梓

昭和九年 帝國圖書館藏

651-23

東海道分間繪圖解題

東海道分間繪圖　元祿三年庚午孟春吉旦刊行せられたもので有る。作者は遠近道印、繪師は菱川吉兵衛、新和泉町板木屋七郎兵衛板と云ふ事は奥書で明かであるが、其遠近道印に就ては研究を要すべき問題があつて隨分さま〴〵に考へられて來た。最近高木利太氏が家藏日本地誌目錄に

遠近道印作　菱川師宣畫

元祿十六年　江戸　萬屋清兵衛板

日本橋から京都二條城までの驛路山川を、箱庭の如く畫き連ね宿驛、城邑の名を記す、作者の口述には長三分を一町とすとあり、街道の一里塚を畫き、或は榎或は松何本とかきたるは實際のことであらう、此圖作者名あれど假托にて實は師宣の分見（〇間カ）圖とて世に知られて居る。

と解說せられた。作者　遠近道印は假托と斷じてゐられる。遠近道印は假托としても、其が菱川師宣（繪の事は後に云ふ）であると云はれるのか、其とも誰かの假托名であつて、繪は師宣であると云はれるのか、少し分明で無い。遠近道印と云ふ實姓、實名の人が有りとは誰しも思はぬ事では有るが、菱川吉兵衛は圖を畫いた人で、其圖の一町を三分に縮めて測量して地圖を作つたのは誰か外にあるべき筈である。此遠近道印が著はした地圖は外にも有つて江戸圖寛文五枚圖が最初とせられてゐる。遠近道印の地圖は一分五間とか、一

分十間とか其測量の根本が示してある。さて其の遠近道印と云ふ人の本名は誰で有らうかと云ふ問題で有るが、本年一月の今昔と云ふ雜誌に三田村鳶魚氏が此遠近道印の事を書かれた、其はかなり長い論文であり、全部轉載するのも私の交の無い人で有るから遠慮せねばならぬから其大略を摘記すると、

江戸繪圖に遠近道印と標せられたのは寛文五枚圖が最初で此板元は經師屋加兵衛であつて、此經師屋が有名な出版屋の鱗形屋である、元祿四年板屋彌兵衛板の改選江戸大繪圖の終に「元祿四年六月吉日　遠近道印作　板屋彌兵衛板」とある。さて製圖者、寛文のには遠近道印久晉とあつて同一な花押である。遠近道印と、遠近道印久晉と同一な花押である。元祿のには遠近道印作久晉　大門通田所町　久晉花押　圖工　遠近道印　補者　兒玉壽昌　執筆　加藤諒友と連署してあつて、本來遠近道印久晉人らしく思はれる。元祿八年刊の大繪圖を見ると「爰に武陽江城の下、久遠近道印といふ人、若歳より自然と圖法を好み、晝夜工夫して後、或は山海の高廣、或は道法順路の曲直遠近をも、纒の紙中にあらわし分間のつもりて、道を圖するに方角順道道法等、毛頭無相違樣に工事明細にして、此道の圖翁となれり、然るに道印先歳寛文の頃、初而江府の圖、一分五間の積にして出し……重て改板せしむべく候。此圖御覽の御方は磁石次第に此を直し、方角にあて御覽可被遊候、毛頭相違無御座候。元祿八年乙亥初夏圖翁」遠近道印花押　堺町通新和泉町　板木七郎右衛門板と云つてゐる。寛永五年松葉貞知板の江戸分間之圖には、圖工　遠近道印　補者　兒玉壽昌　執筆　加藤諒友と連署してあつて、本來遠近道印久晉人らしいとは製圖の法式であるのを爰では立派に作者の名として了つた。…板元も屢替り、幾度も改刻されたが、寛文の傳統を擧揚することは決して忘れない。それには是非とも遠近道印を標示して來た、是が遂に板株になるまで繼續したのである。測地丈量については但だ伊能忠敬をのみ知つて、早く其の術に堪能であつた北條安房守正房及び福島傳兵衛のあることは知つてゐない。只だ江戸書林の間に遠近道印圖の板株が殘つたのは、宛ら福島傳兵衛の頌功標のやうに眺められる。…大道寺友山の落穗集の中に「江戸大繪圖の事」と云ふ記事の内に「四代家綱の御代明暦三年大火後製圖した、大目付安房守正房仰を受けて久島傳兵衛（〇鳶魚氏は福島の誤とせられた）に代をさせて出來た、其下繪圖のうち御堀を限り、中を切りぬきて御老中へ申して板行した…書物屋方より人を廻し、手前見合に仕り、右の繪圖に書加へ候て以て、委細を不存る者は始終道印か自作と取り沙汰仕るよしなり」と斯う書いてある。…友山は北條安房守正房が老中の允許を得て、自分の發意のまゝに、調製した下繪圖を書肆に與へて板行させたといふ、それは宜しいが、遠近道印を北條正房の作名のやうに書いて居るが、作名ではない、製圖法の標示である、けれども後來誰かの作名の如くに此の四字を扱ひもした。暫く作名と見るならば誰の作名として好いか、落穗集によれば正房は内堀までを鞅掌して、板行の分は福島傳兵衛が擔當した…福島傳兵衛國隆は正房の養子で絶家して居た親族の跡を立てさせた、正房が歿して氏平が相續する時、相續以前に受けて居た二百俵の祿を傳兵衛に讓り、福島家再興を完うした、傳兵衛は正房の軍學の高弟で、士鑑用法（正房の著）の鈔、易城註歩集、足輕百ヶ條、長柄百ヶ條等の著書もある。貞享二年九月十日、五十五歳で歿した。彼が北條正房の

荷擔として江戸市街を實測した明暦三年には三十六歳、大番組に列した延寶五年五月は四十八歳だ、さらすると元祿八年の圖翁は福島傳兵衛のことでもない、その圖には「久遠近道印といふ人」とあり、又は元祿四年のには遠近道印久字ともある、其の久の字は落穗集の久島傳兵衛の久字だとも思つたが、系譜に依つて福島なのが知れて見れば、何とも分らないことになつて了つた。」元來遠近道印圖で、實測に作つた正確な地圖だといふ標示としたのを何者かの作名とし、其人のあるが如くに裝つて板株を握るまでに漕ぎ附けたので其の擬人手段に引懸つて實在を考へるのは聰明であるまい

と斯く論ぜられた。久島、福島の事に就ては後に掲げた森君の文で自から明らかで有らう。鳶魚氏の說によれば遠近道印は福島傳兵衛の測量法に據つたと云ふ事から、もとを發した正確な地圖の看板で有るから、誰が遠近道印であると云ふのは當を得ぬと云ふのであるが、本分圖の跋に

依レ去所々に方角を左右に振分ケ彼を以て是に次第に合すれば宛も流水の如レ無レ障若有レ異かと御不審之御方は版本方へ預ニ光尋一者彼道印自筆之本書可レ入ニ覽一者也

と書いて有る。彼道印自筆之本書と書いた書きぶりは其測量法に據つたと云ふよりは、其測量法を用ゐて製圖した人即ち遠近道印と云ふ人が有つたと見える書き方と思はれる。福島傳兵衛が遠近道印と假託にしろ稱へてゐた、其が後々には商人に利用せられた形に成つたものか、何分一應は遠近道印は福島傳兵衛の事で有つて、後々には商人が勝手に標語のやうにあつかつたかも知れない。されば實在の人物と認めて研究を進める事はあながち暗愚でも有るまいかと思はれる。

さて此東海道分間圖は福島が著はしたか、其とも外の人が著して勝手に遠近道印と著者をしたかは判明ではないが、鳶魚氏の說に據り貞享二年に歿したとすると此書の發刊に先だつ六年に福島は歿したのであるから、今日の如く製板印刷の早く出來る時代ではなく、又地圖を大躰でも實測するとすれば相當の年月も要するし、かたゞ何とも云へぬ年代になるのである。其序文の書き方が少々曖昧な點があるが

遠近道印と云人江府の圖を始て一分五間の積りに五枚にあみたて書肆にあたへて世に流布せり…分厘のたがへなし、故に上一人、下万民に至迄一同の名譽を唱と勿論也依レ去予道印に因で東海道五十三次の道法分間に顯し而所々の景村付ケ馬次家並名所舊跡山川海道微細に考既令ニ板行一清書を畫師菱河氏請、時に彼師云…功筆を拔ず、凡此兩家は名譽を世に顯し、貴賤一同免所の名人たり…誠响蓋相應毛頭のたがへなきを以て板行令ニ流布一者也

と有るを讀んで見、又跋文をも併せ考ふるに、遠近道印自筆の測量圖を元として繪師に風景繪のやうに書かせて出板したと見るべきであらう。森銑三氏が編者に示された文は

東海道分間圖の外、寛文の五枚圖以下の江戸繪圖にもその名を書してゐる遠近道印については、古來諸說が紛紛としてゐて、今に歸着するところを知らないが、軍學者北條安房守正房の養子で、また高弟で、正房を輔けて江戸測量のことに當つた福島傳兵衛國隆を以てその人とするのが最も妥當の說であらうかと考

へられる。國隆の姓の福島は寛政重修諸家譜にはフクシマと振假名されてゐるが、正しくはクシマと讀む。重修譜以外に同じく幕府で作つた略譜にはクの部に入れてゐる上に、「功彰院樣御書寫之寫」と題する寫本に、「北條安房守軍法の傳を繼し人福島傳兵衛」として、分注に「世に福島をくしまと唱ふ、福島は北條左衛門大夫の姓なり」と斷つてゐる。これによつて、大道寺友山著、落穗集の「江戸大繪圖の事」の條に「久島傳兵衛」として記されてゐるのは、全く福島傳兵衛國隆を指してゐることが知られるのである。なほ遠近道印並びにその作製圖については、芦田伊人氏が夙に研究を續けられてをり、いづれその發表の期があるとであらうと思ふ。

と云はれた。何れ蘆田氏の研究の發表を俟つべきで有らう。其から繪師の事であるが、高木氏が師宣畫と云はれたが、本繪圖には菱川吉兵衛と書かれてある。吉兵衛は菱川氏で浮世繪師の初祖師宣も吉兵衛であり其子師房も又吉兵衛と稱したのであるから、其何れであると云ふ事も確實には云はれぬので有る。好古事彙に宮崎幸麿氏が風俗畫傳に云はるゝ處によると、「元祿三年印本東海道分間繪圖は師房のゑがく所といふ」と云はれた。父師宣は元祿七年に享年七十餘歳で歿したとの事は確であるから、元祿三年の繪が畫けぬ事は無いが、其繪から見て師房の作で有ると世人は云ふので有らう。此師房は同じ幸麿氏が

師宣の長男なり、通稱初め吉左衛門といひ、後に吉兵衛と改ゝ、父と同居し、初め畫師を業とせしが、父より劣れるを以てさのみ世に行はれず、後に畫を廢して紺屋を業とす、貞享元祿頃の人なり

麥畫百人一首（元祿八年板）　一册

としるされた。處で此分間圖が師房で有らうとは、幸麿氏の說である事は前に掲げた、自分は專門外の事で一向不明であるが元祿二巳年板江戸圖鑑に

浮世繪師　橘町　菱川吉兵衛師宣　同所　同吉左衛門師房

と斯く出てゐる。即ち本書出板の前年には「吉兵衛」の方は父師宣であるとすると此元祿三年にはまだ吉兵衛は或は父師宣であつたかも知れぬ。吉兵衛の名を繼いだのは多分父が晩年剃髮して友竹と號した時位からかと考へられるが何とも云へず又其年も不明である。何分、繪の實際の筆者は師房にしても師宣の名で出版したかも知れぬ。

本書は折本仕立であつて元祿三年が初板で其後しば〳〵刷られて奥附の年代も度々替つて居る。高木氏のも其他で見たのも元祿十六年癸未八月吉旦作者、繪師は同じくて出版屋の處が日本橋南詰　萬屋清兵衛重改となつてゐる。其はさて置き、此度出版した本も奥書は元祿三年版で初刷本のやうで有るが實はさうでは無いので、此初刷本は極めて珍本と見えてさま〴〵搜索したが見當らず、心當も無いからやむなく拙藏の此本を寫眞したのであるが、好古社發刊の蓬巖觀古圖錄によると松浦家には此初刷本が珍藏せられて有ると見える、其は其圖錄に

箱根へ四里、人足百四十七文　（卷二の初丁）

からしり百九十文
本だちん貳百九十□
問屋　次郎左工門
　　助左工門

とある、此駄賃が削られてある。小生が數種見た本は凡て此駄賃が無い。是れは發刊早々に何か理由が有つて削つたものと見える。此が有る本でなければ初刷でもなく、又甚だ必要な點でも有るが今さらどうにもならぬ次第である。後日幸に初刷本が見當つたら是を補ふであらう。

本書を縮少して刊行せるものが有る。

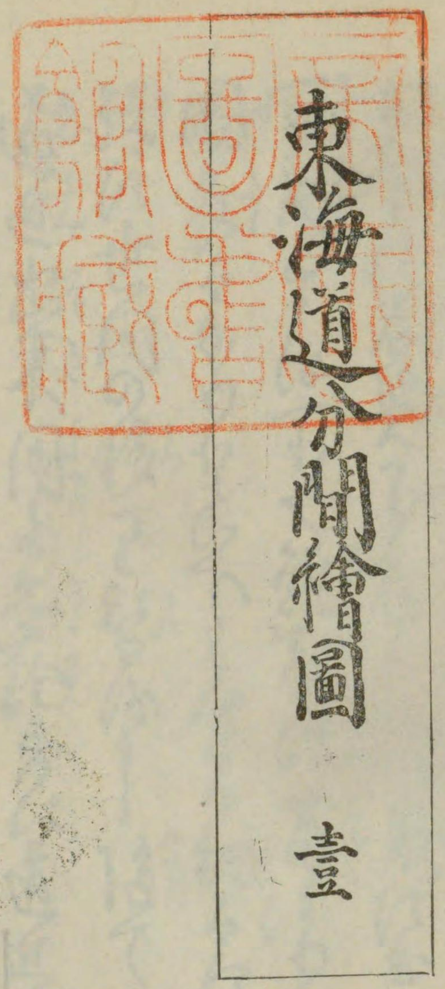
東海道分間繪圖　全　桑楊編刊

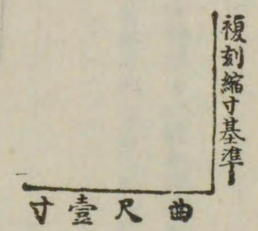
として「寶暦二年申九月吉日江府通本町三丁目　万屋清兵衛板」である。

此分は一分を一丁と即ち三分一に縮め、外一鎌倉、江の島道、大山道、熱海道、箱根溫泉道、身延道、秋葉道、風來寺道、本坂越道、伊勢參宮道、中仙道、

此分は分間にかゝわらず增益し廻路遊觀の便とす

としてある。「分間にかゝわらず」と云つた處を見ると昔の分が「分間」と云ふに重きを置き、世人も又其點を有難がつた事が知れる、然し測量をする事はとても出來ぬから正直に「分間にかゝわらず」とことわつた點が面白い。此分は繪も餘程劣つてゐる。





序

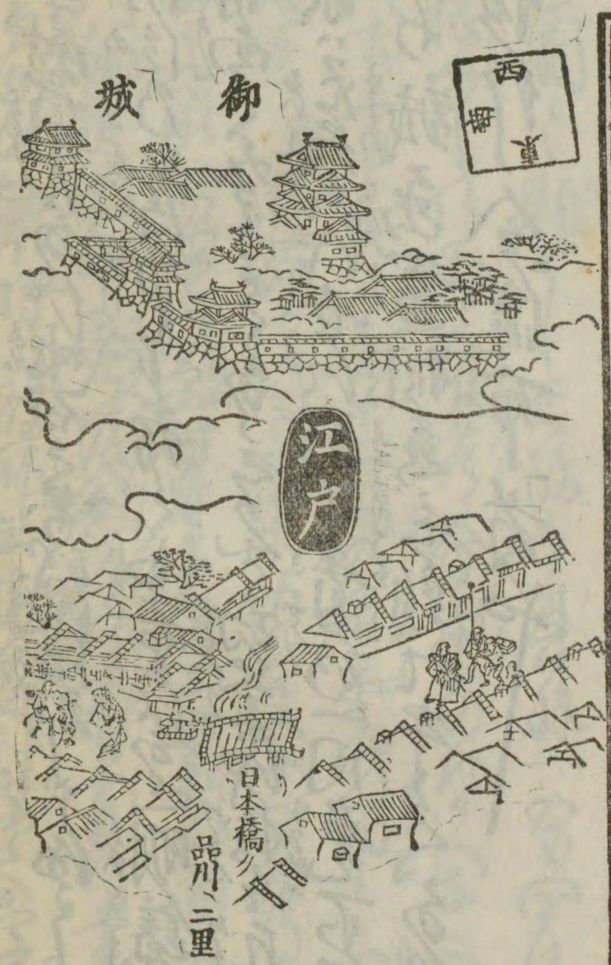
かれ圖に言語に表はし難き
所を文に事に寄りて具に
古今の若異を考へ複雜
一形圖に成て紙面狹窄
圖多くあるを細に分て
弾に世間の務を
遠近出業用に
人口為の易に始く一冊の書に

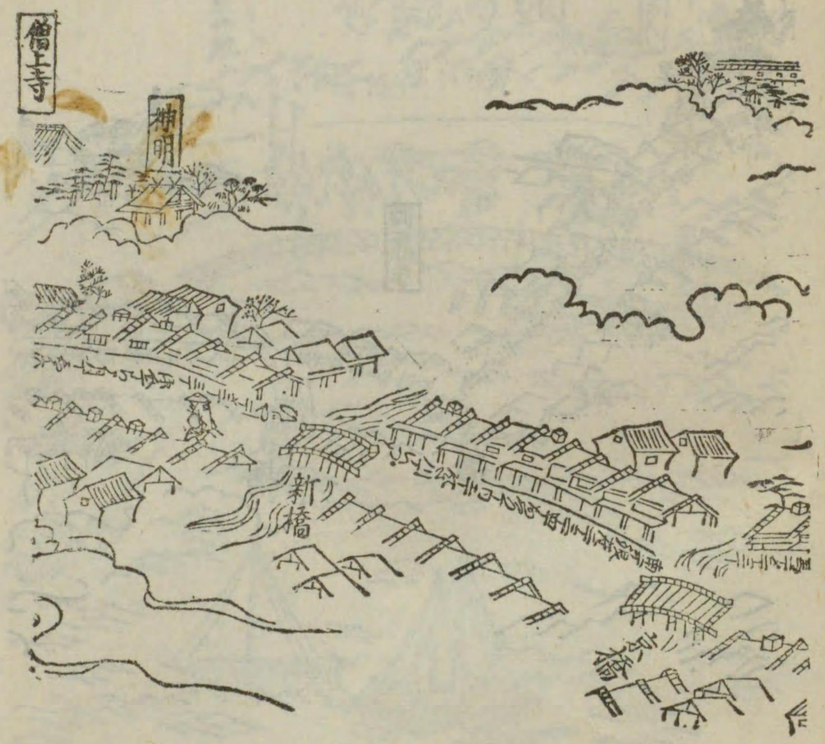
いあめ寺て書紀ゟ有之くせ伝布と
又玄奉一百拾五ゟ之間の間〳〵題し正海ゟ其外一百字拾ゟ
摂津国ゟ番雑考命名の分ゟ故ゟ一
人下百民に到ゟ二回乃若干ゟ間〳〵ゟ
伝云ゟ道印ゟ同ぐ東海ゟ十二ゟ道巡
ゟ所所所村村ゟ所所所所所
門海道図ゟ考源今抜伊清書ゟ書師
書河氏請時ゟ絵師云拾図計ゟ有之

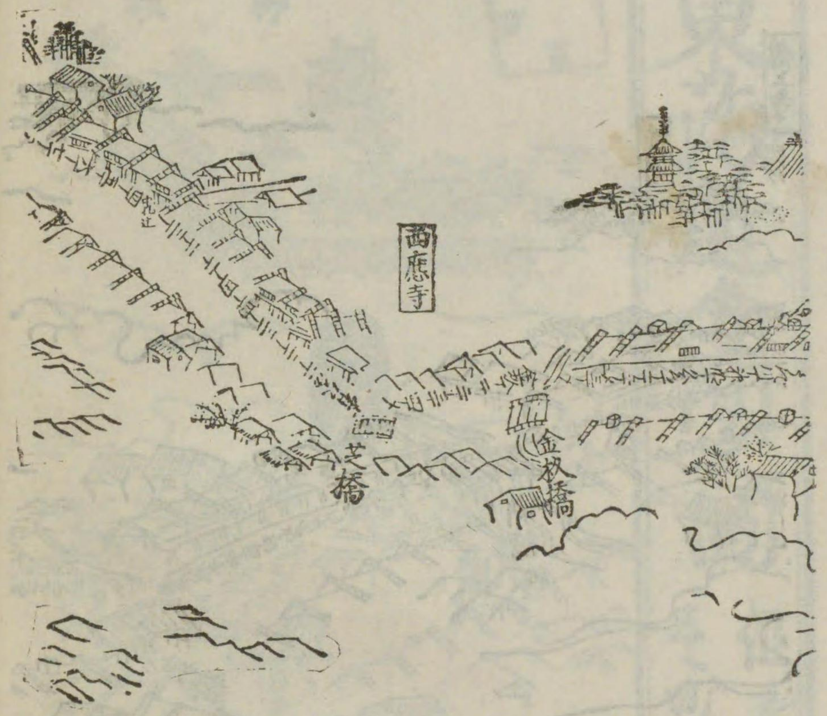
の歴用ゟ有ゟ此所ゟ高岡信部ゟ
高岡乃屋敷ゟ下者ゟ女言ゟ明鏡ゟ
射和ゟ〳〵ゟ〳〵ゟ功業沖ゟ元祥
家ゟ光ゟ代ゟ所ゟ所ゟ貴ゟ一回見ゟ光人
ゟ誠函書形ゟ毛頭ゟ出ゟ
抜行今流布一着ゟ

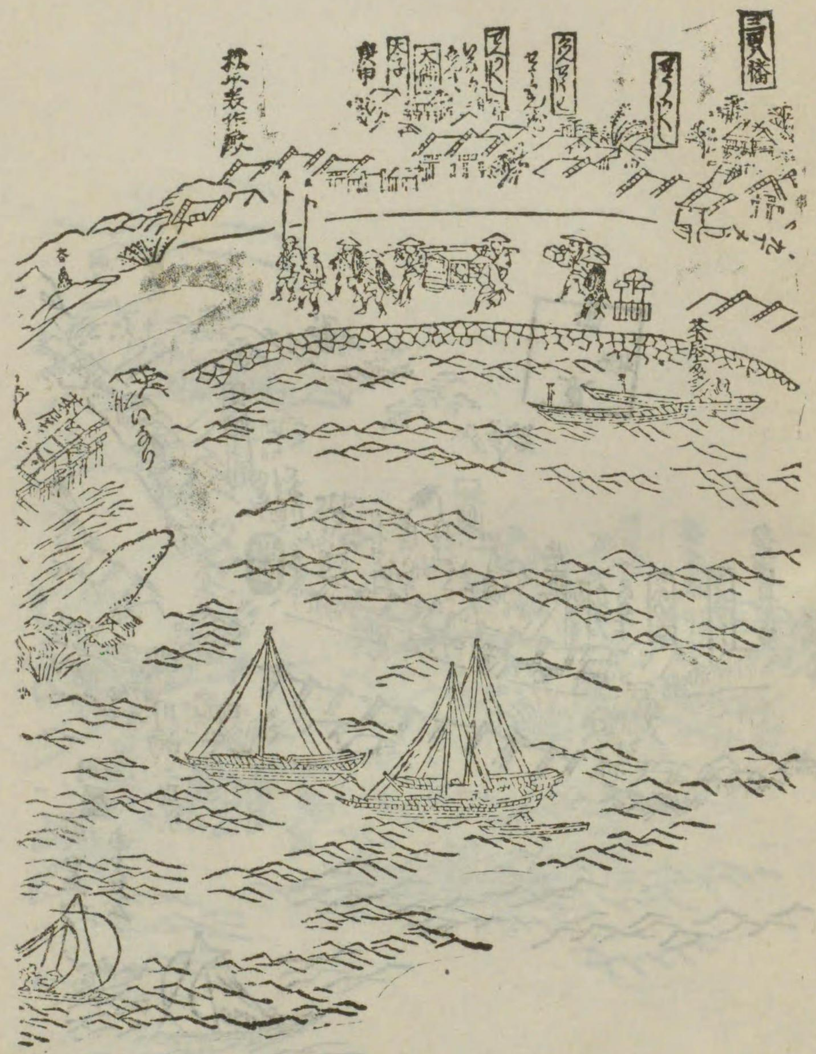
東海道分間之圖

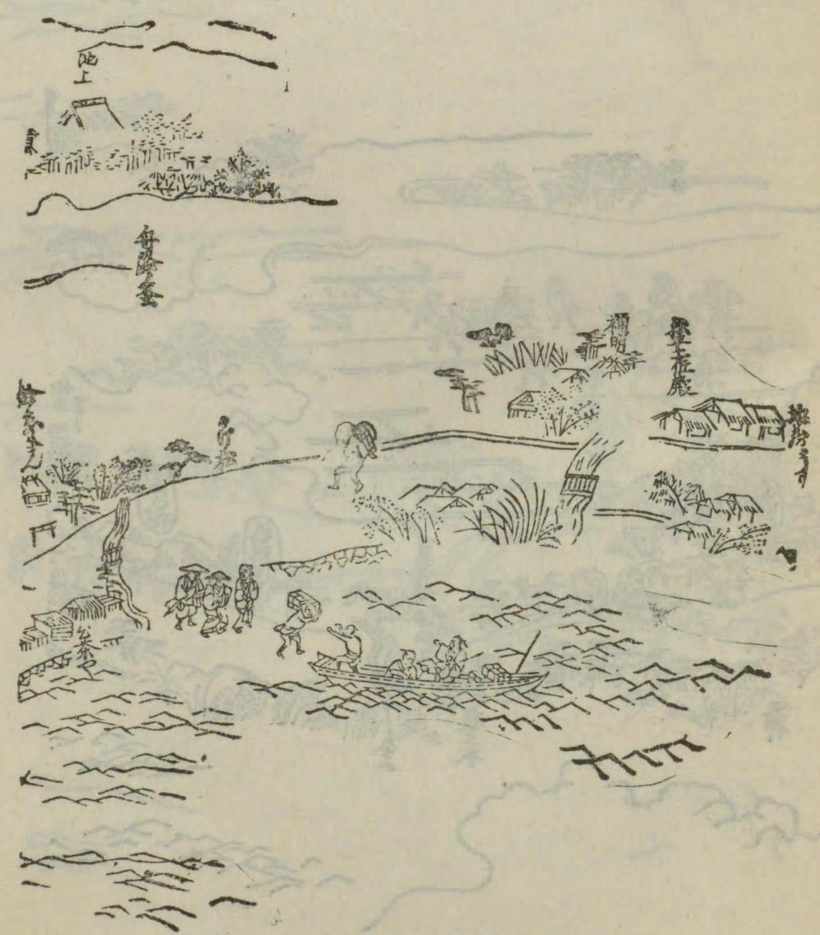
但シ二合ヲ町ヲ積リ

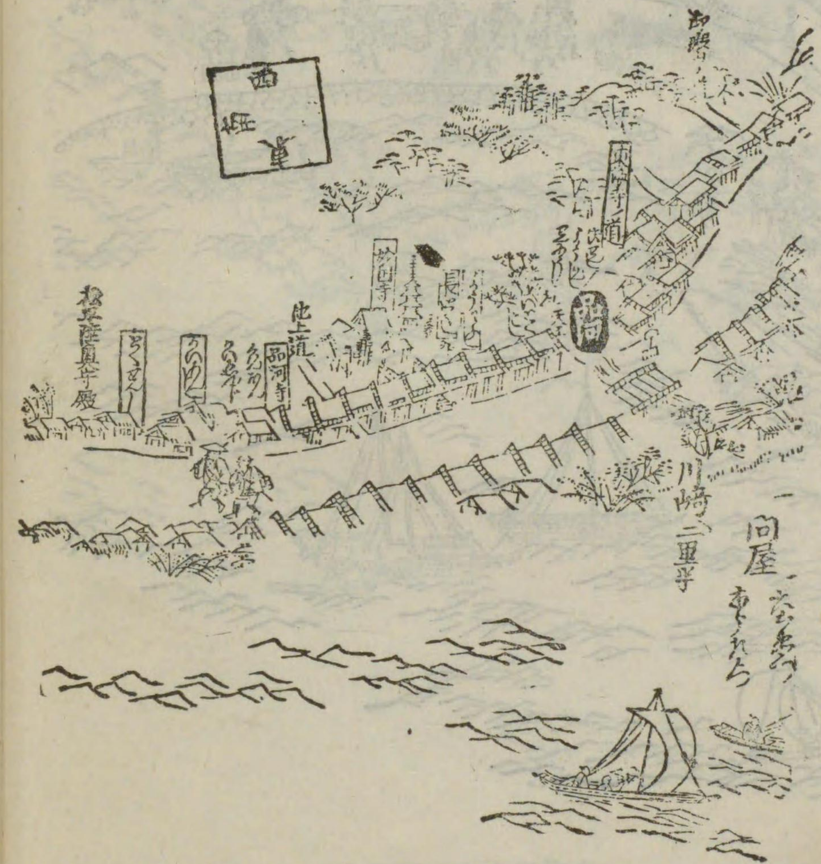


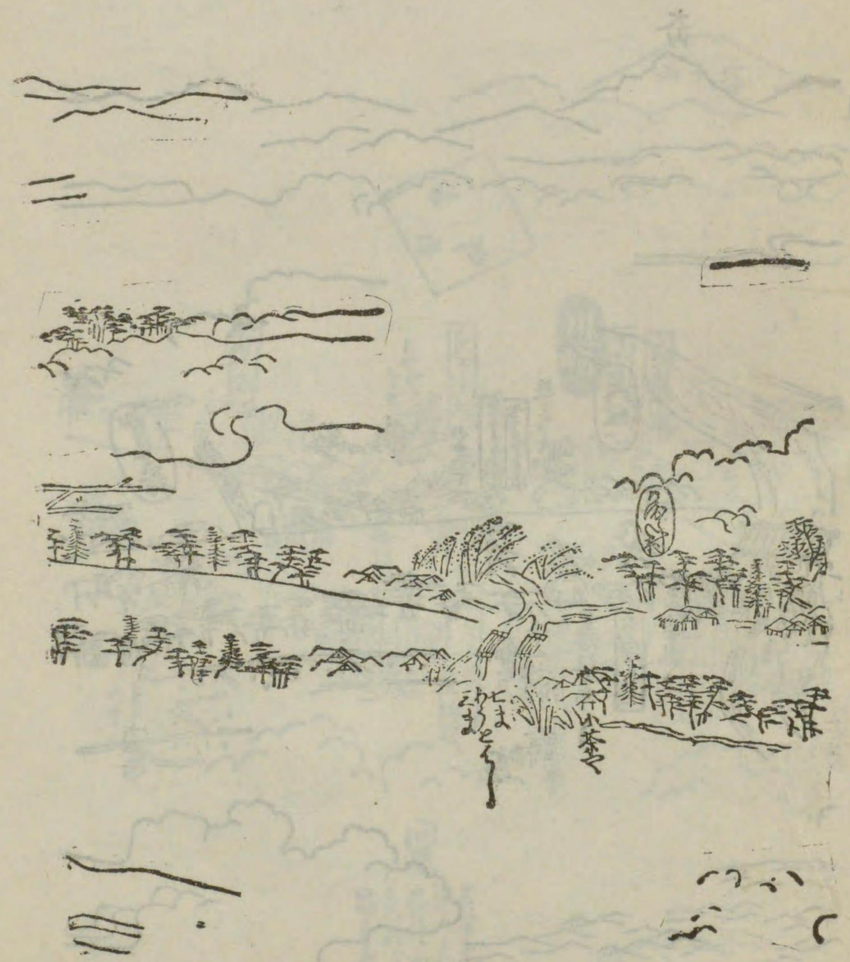


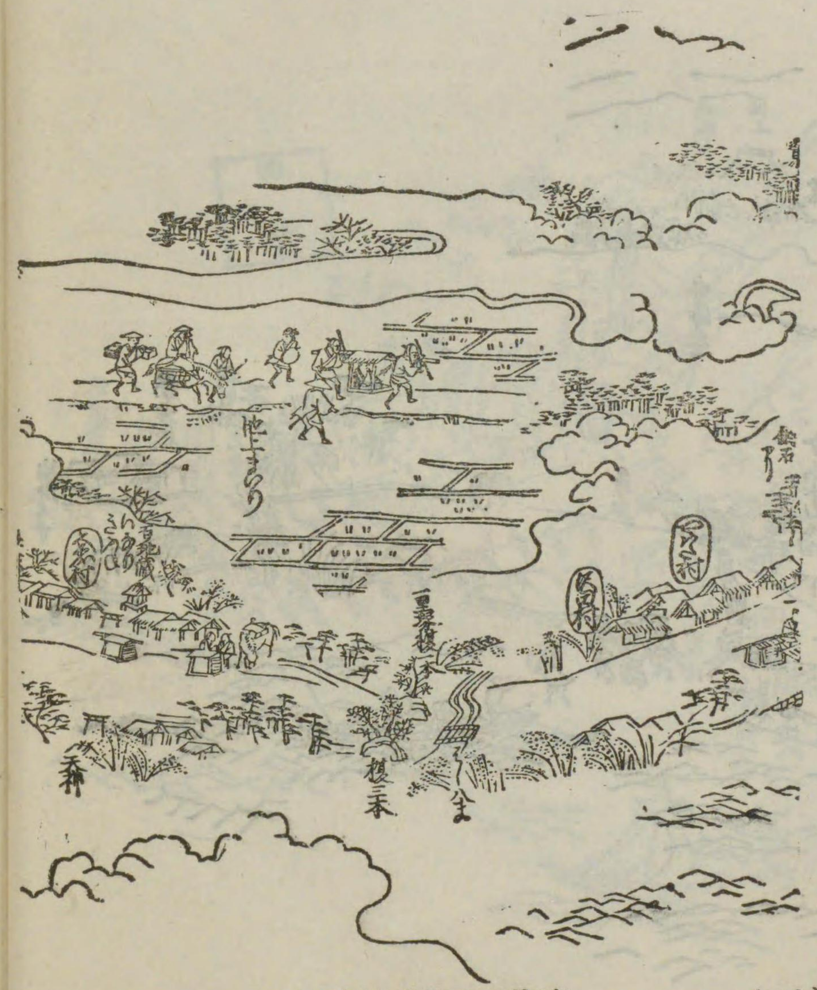

西應寺
芝橋
金杭橋

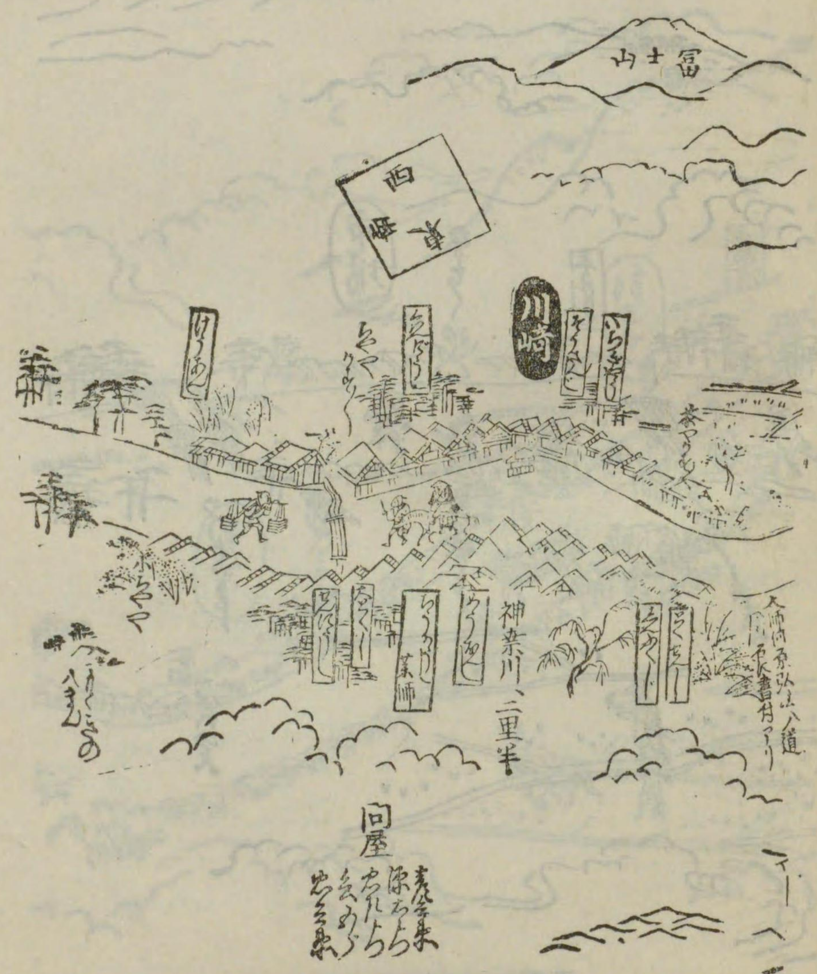

三貫橋

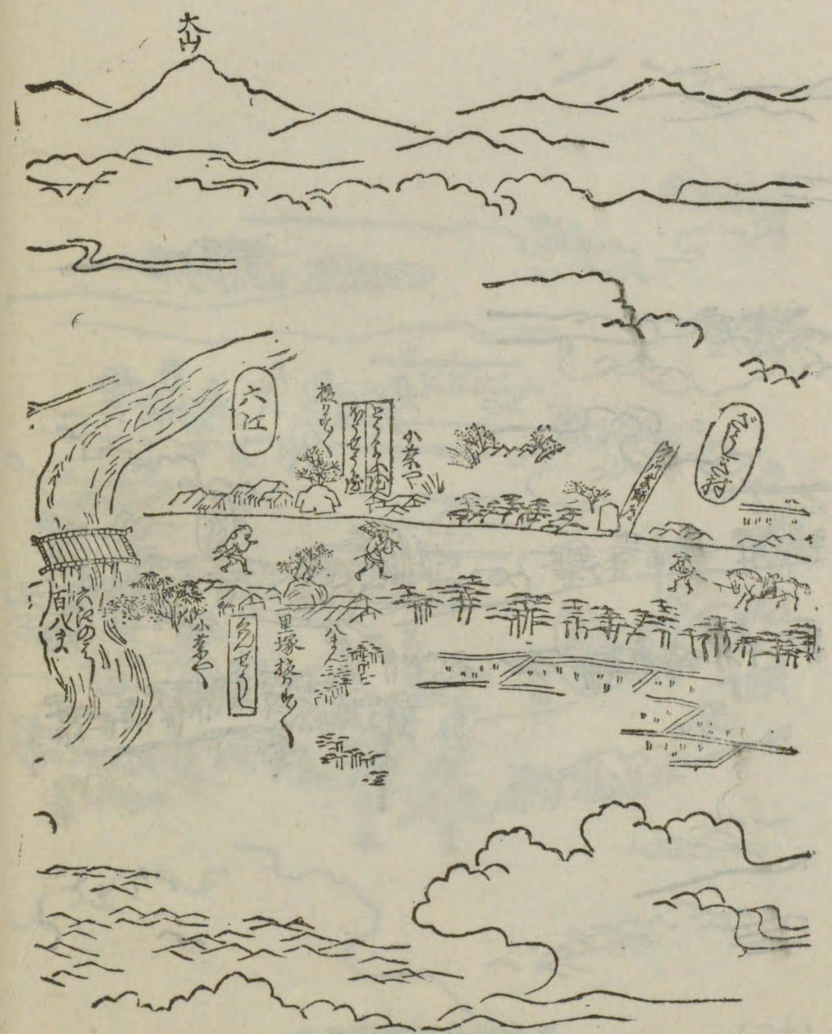


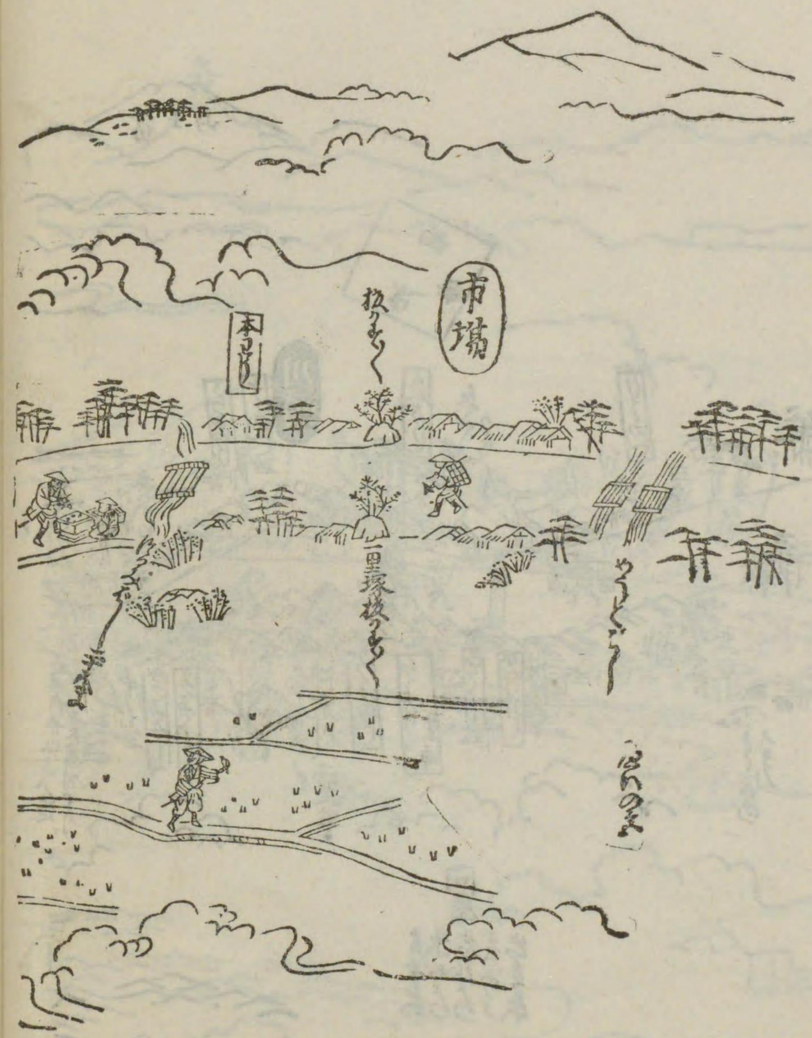


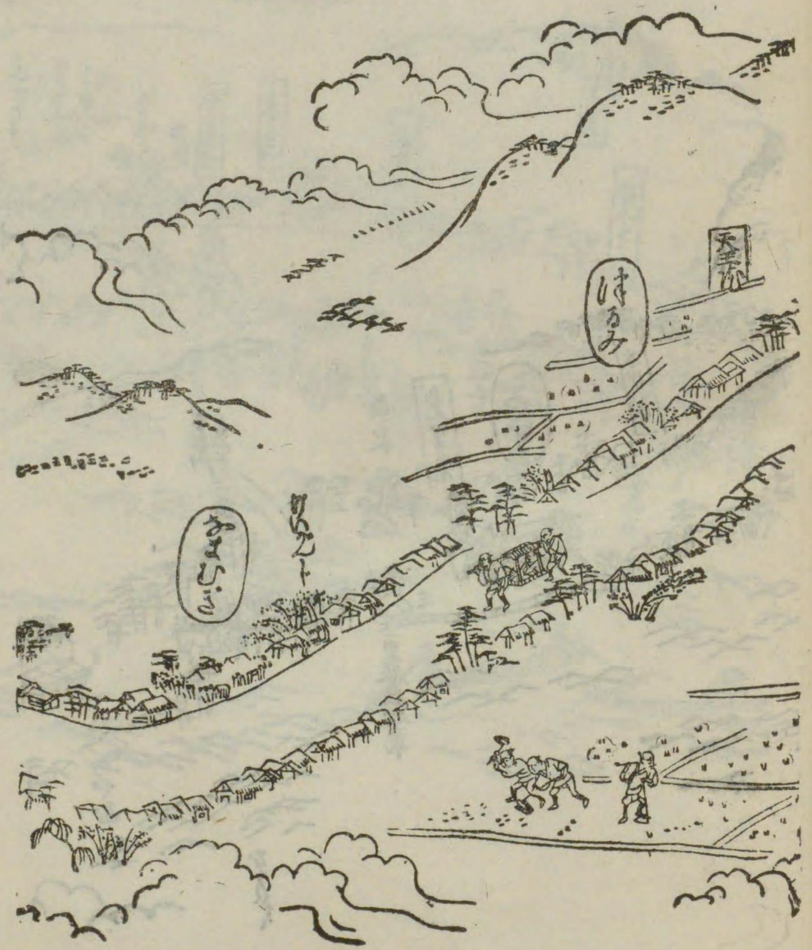


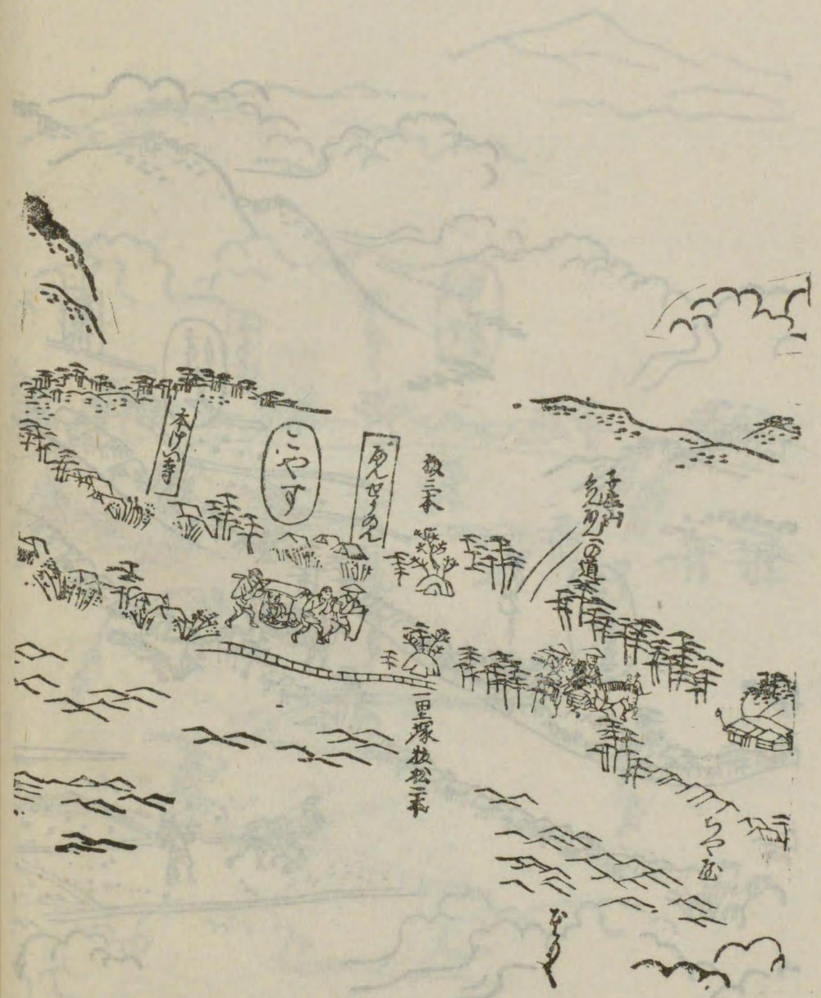


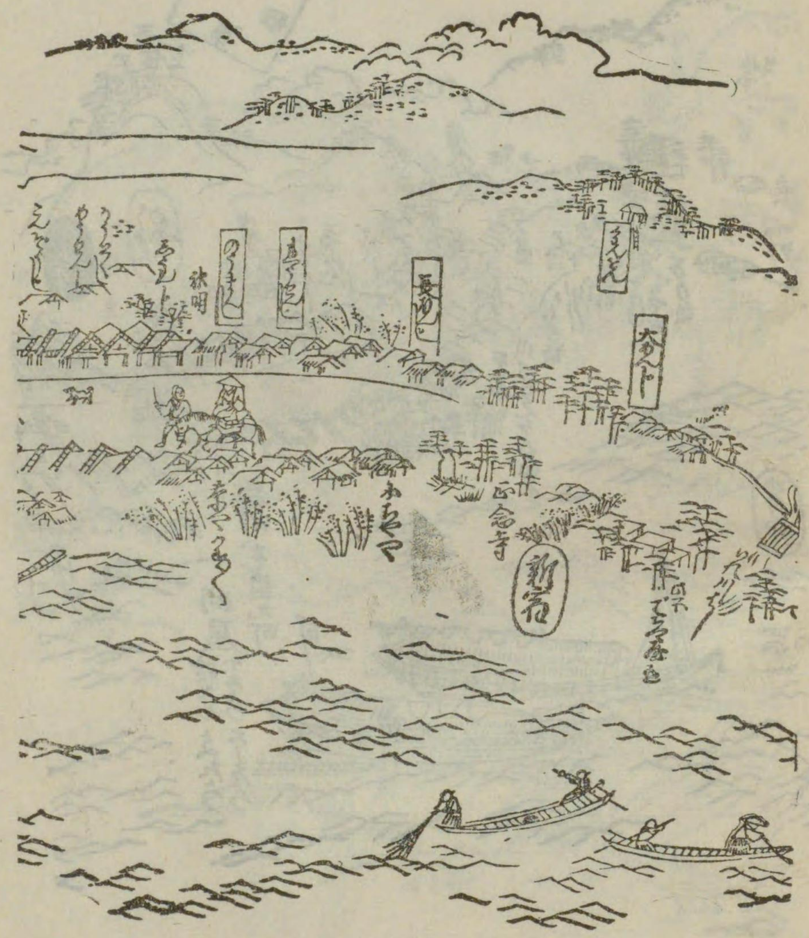

富士山
西
東海
川崎
神奈川、二里半
同屋

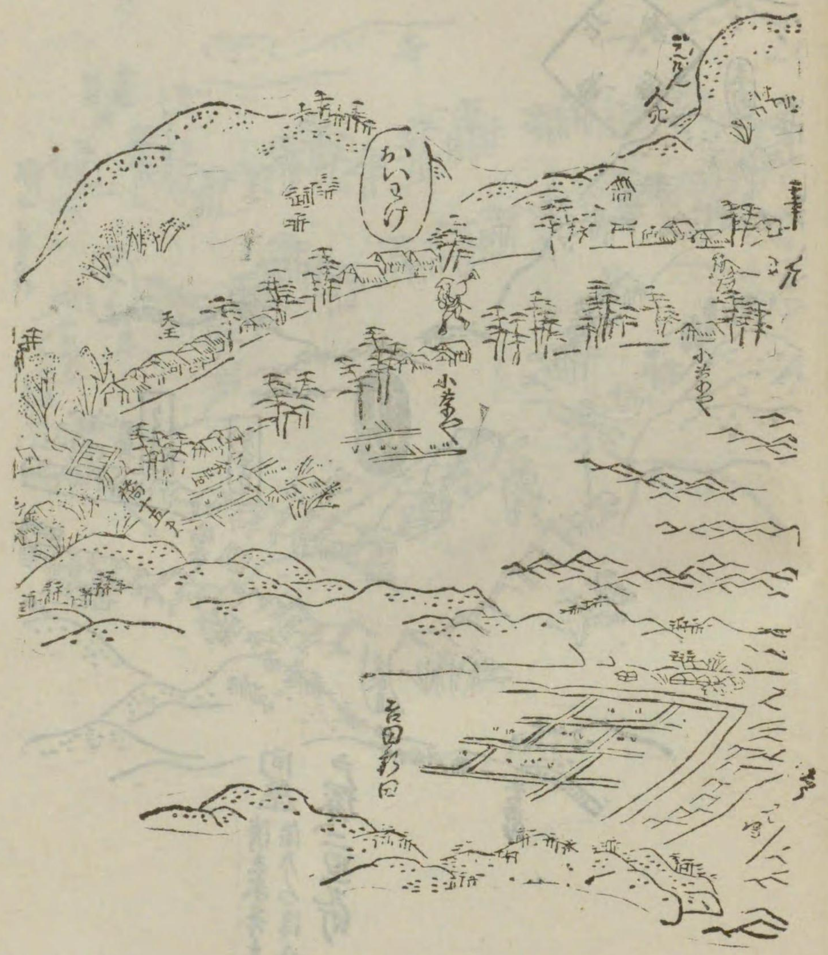

大山
六江
小茶屋
里塚場

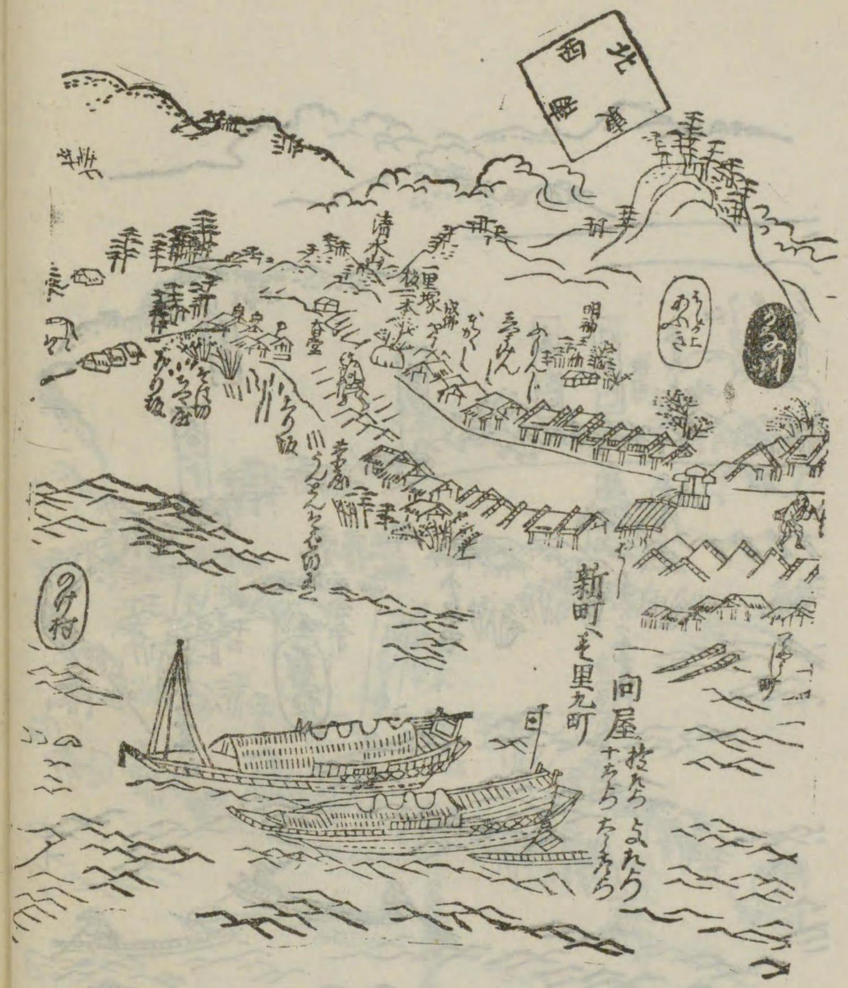

市場
本宮
豊塚坂のもと
うくいす

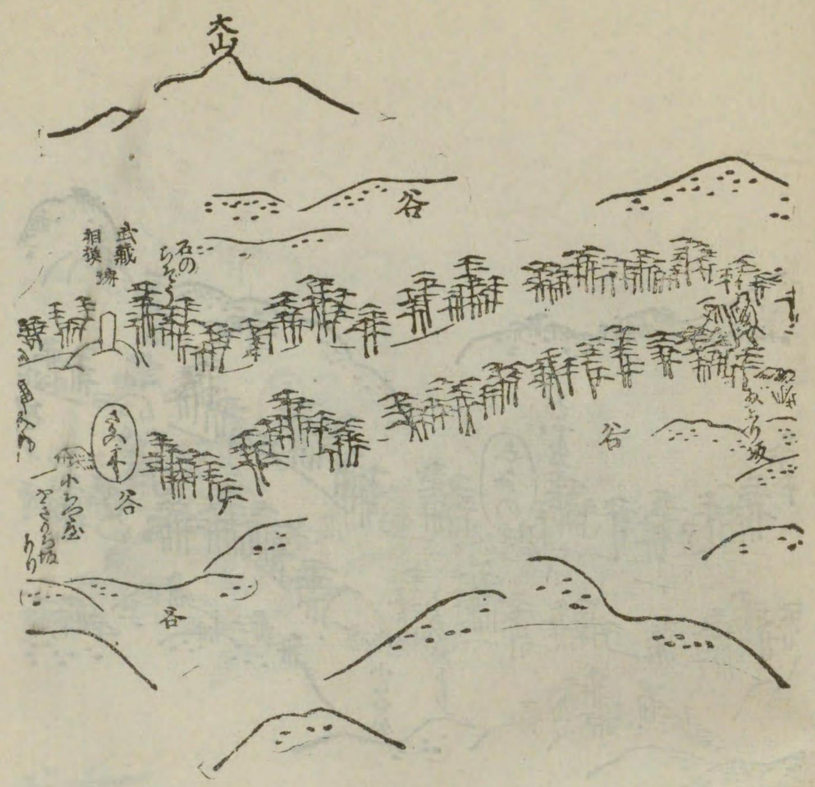

天王洲
はるみ
おそひ
りんのうと

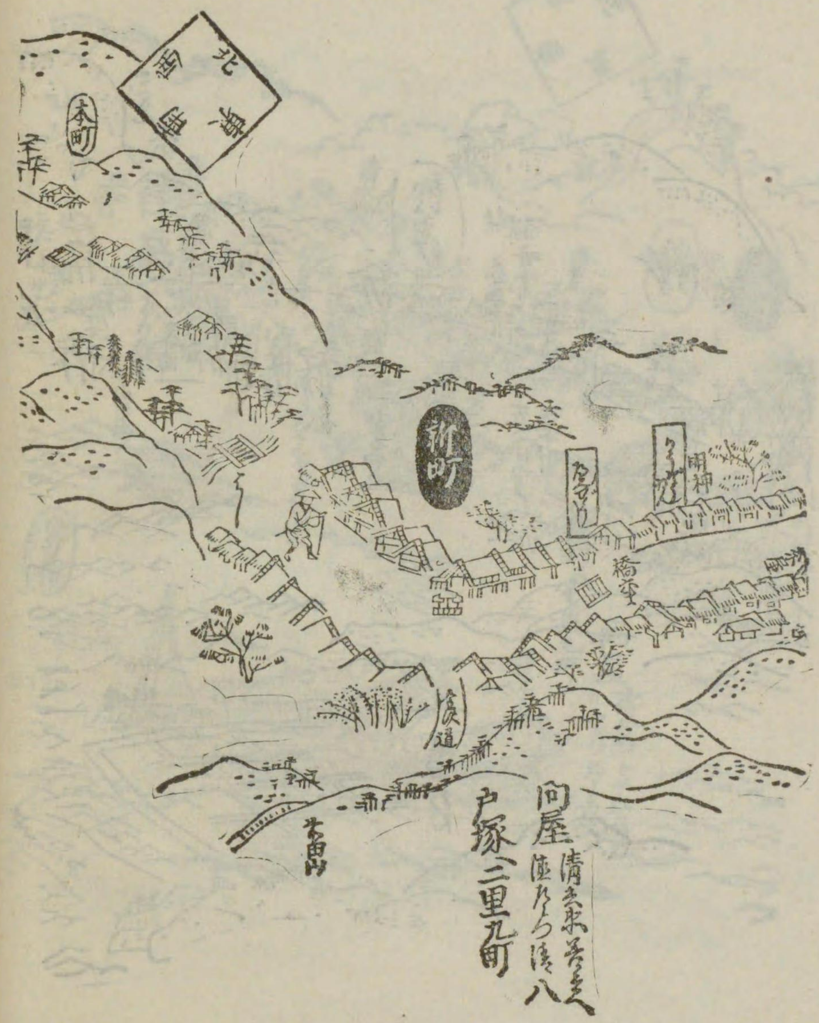

こやす
あんぜうあん
二里塚松並木

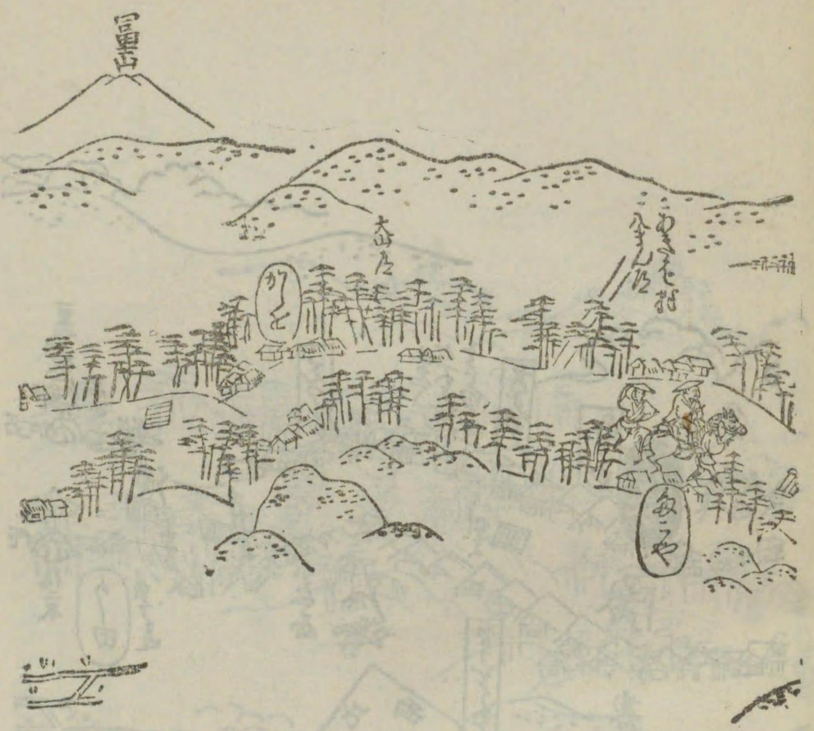

新宿

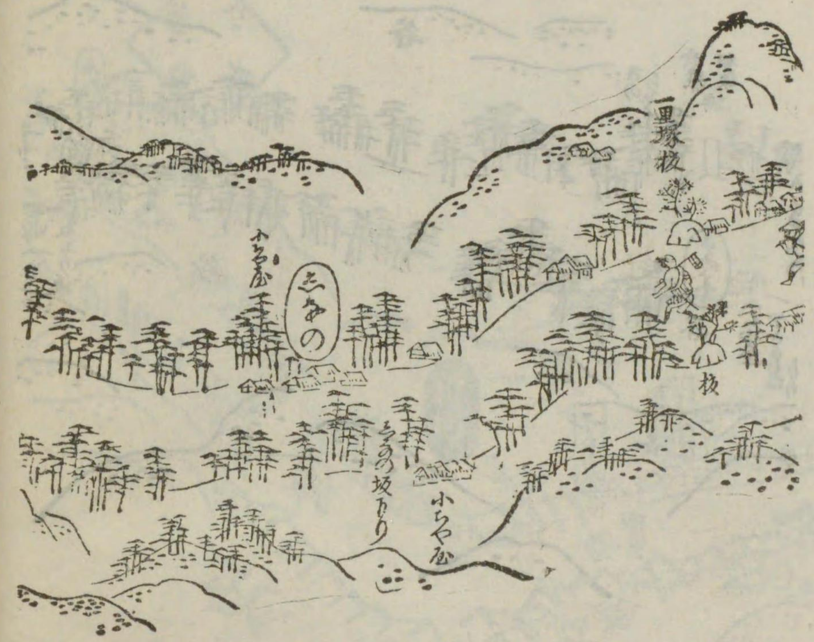

かいとけ
小茶屋
小茶屋
長田新田

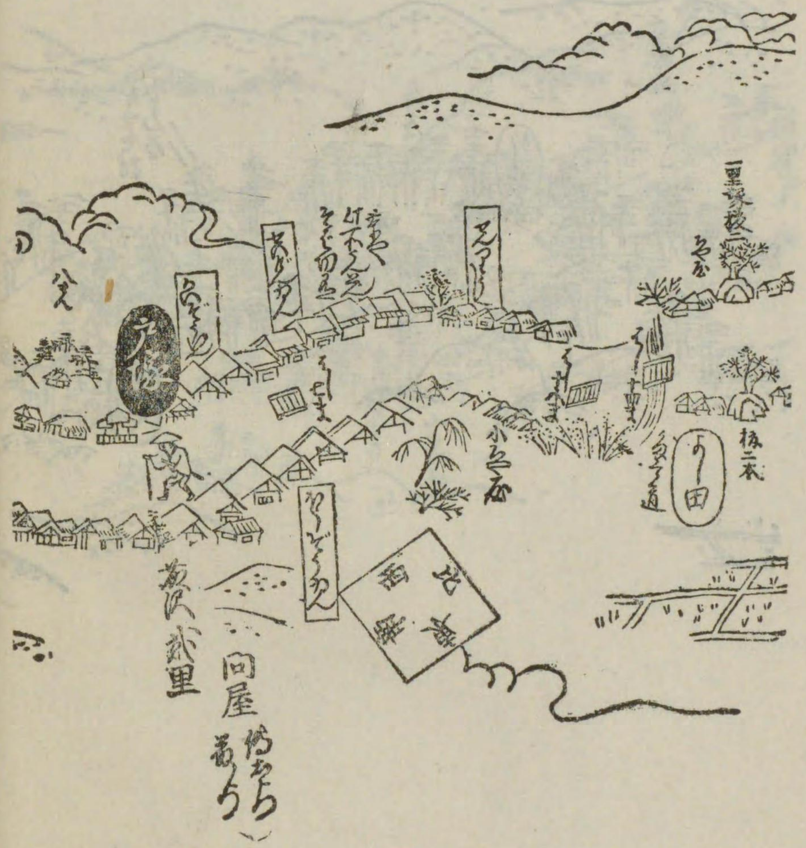

北西
清水
新町
一向屋
十ちゃう
たーちゃう
よたう
日

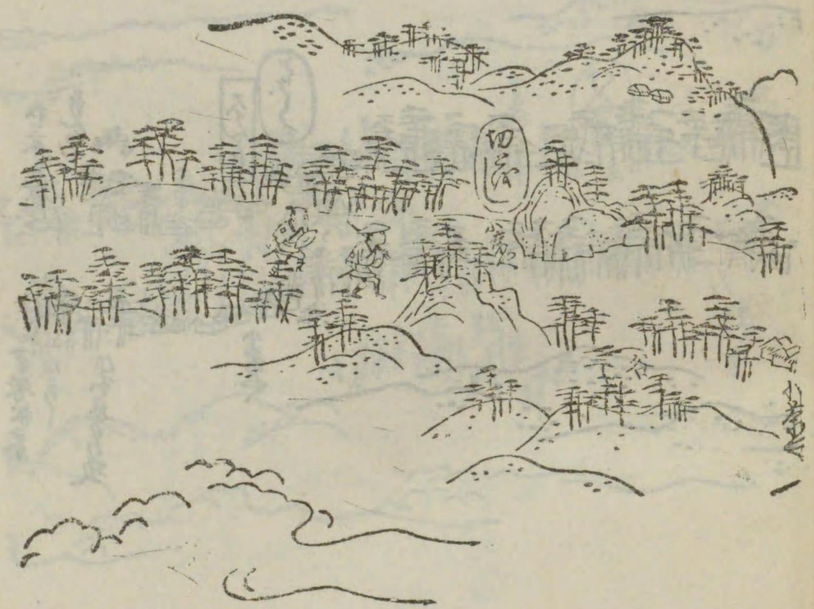

大山
谷
武蔵
相模境
谷
谷
谷

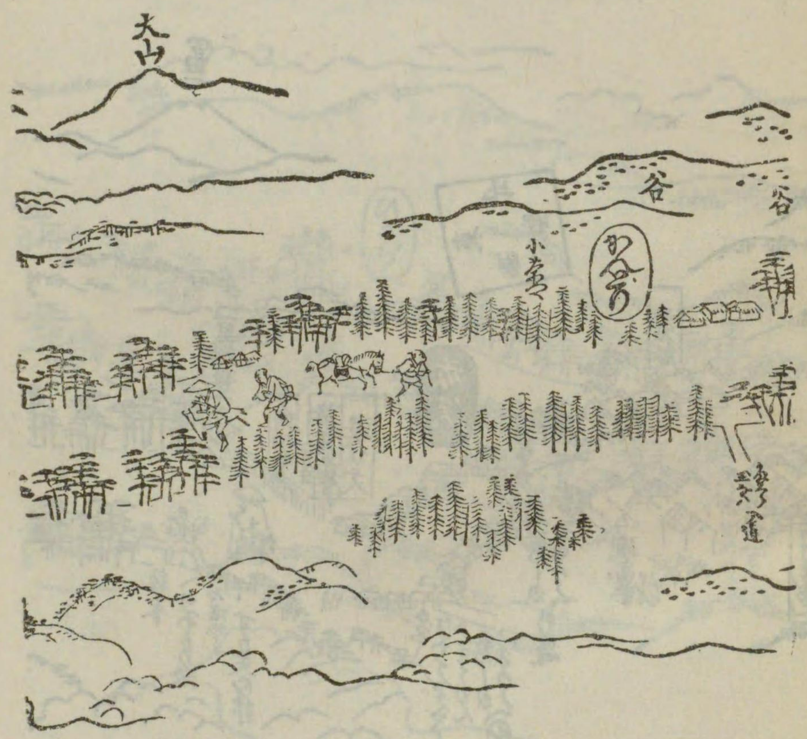

北
南
本町
新町
明神
橋本
大山
戸塚二里九町

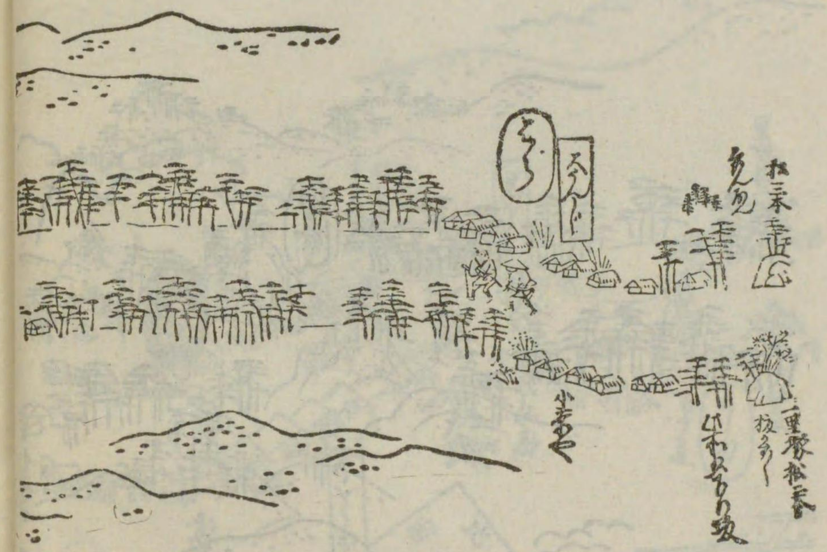

富士山

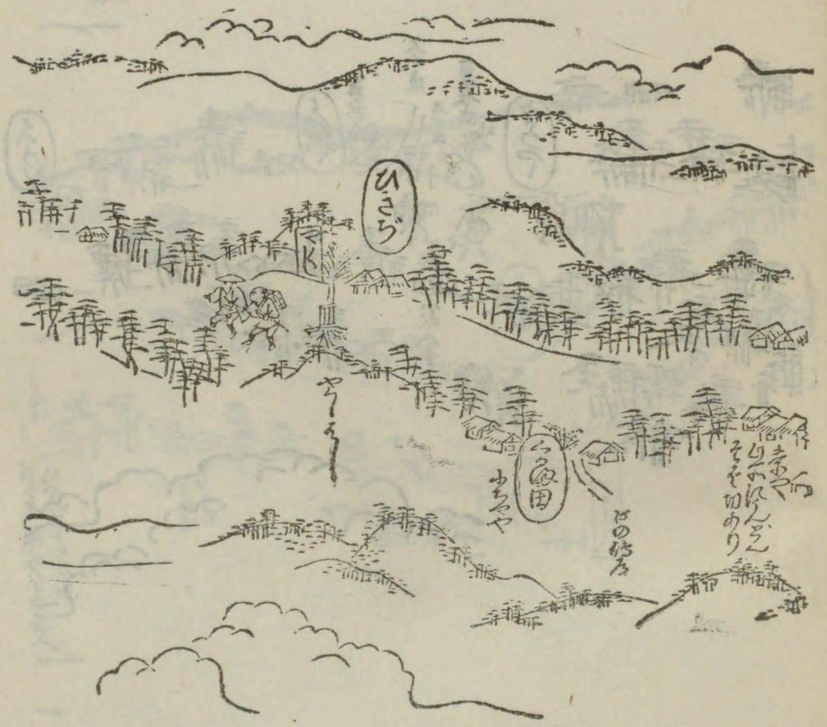

黒塚板
板

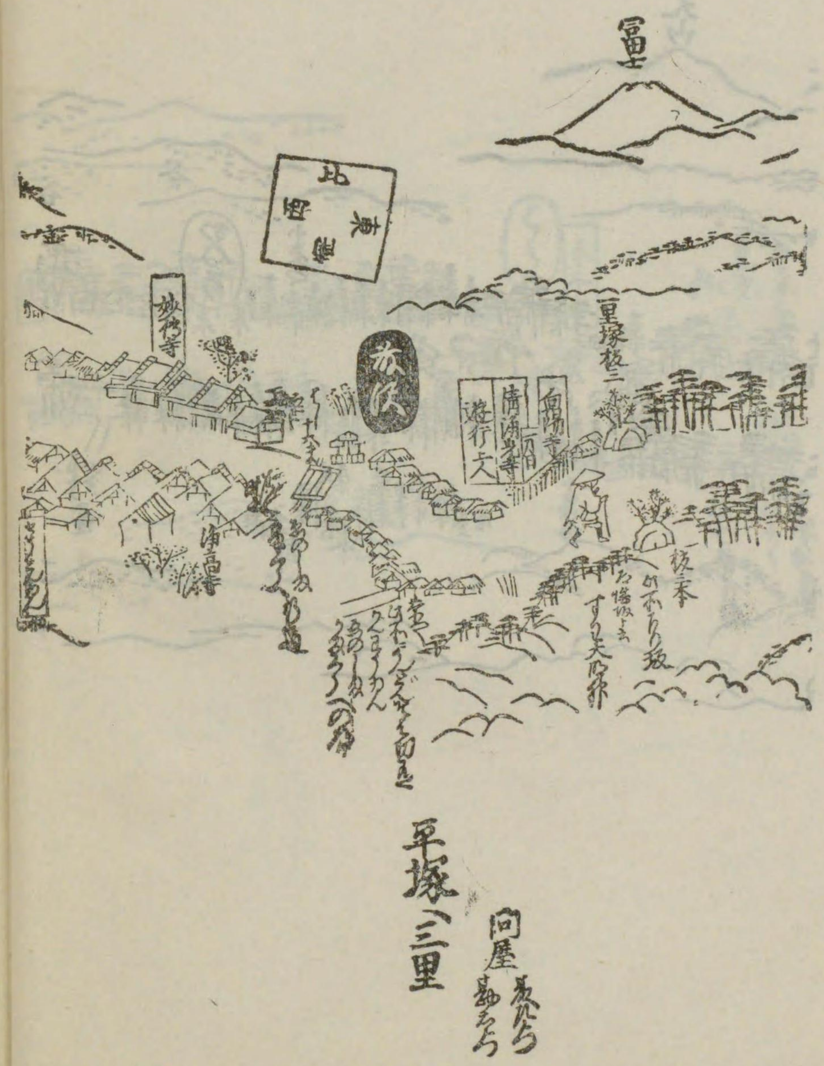

一里塚
松二本
小田原
箱根
三島
沼津
蒲原
由井
江尻
府中
藤枝
岡部
宿
日坂
掛川
袋井
見附
浜松
白須賀
二川
吉田
御油
赤坂
藤川
岡崎
池鯉鳥
鳴海
宮
桑名

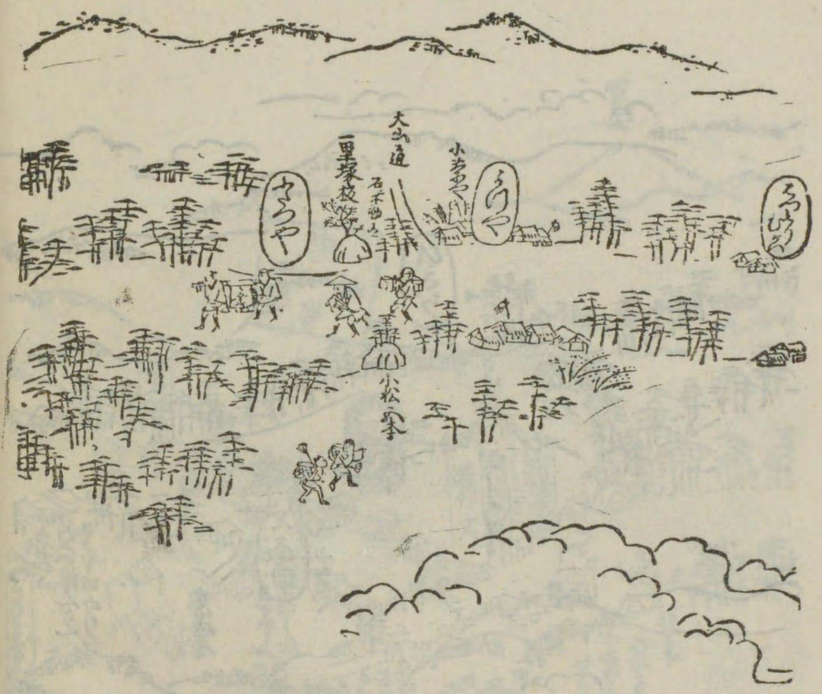

四日市
桑名

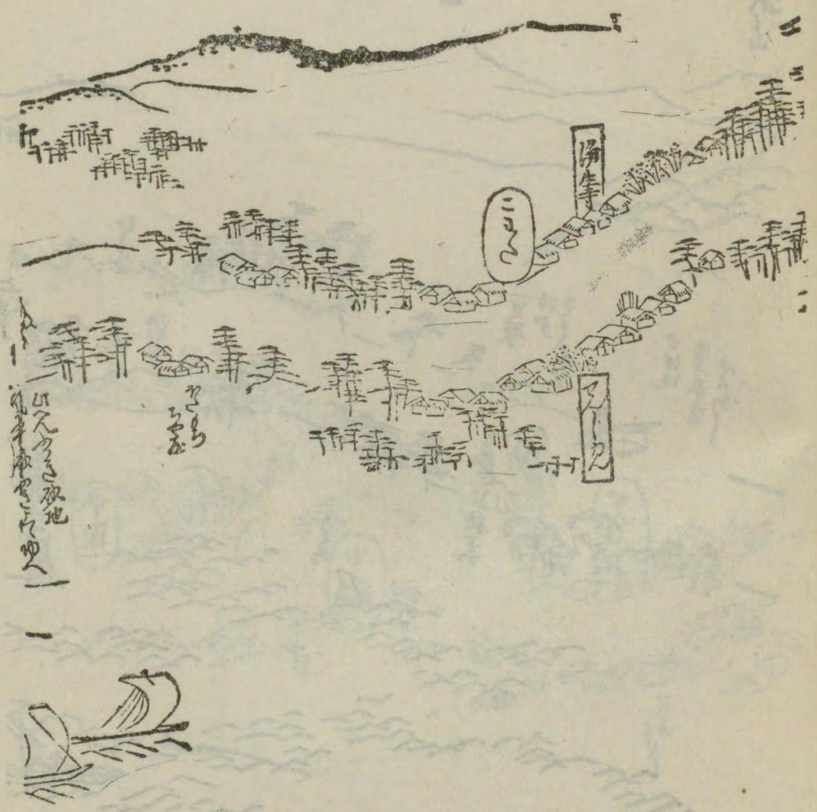

大山
谷
谷

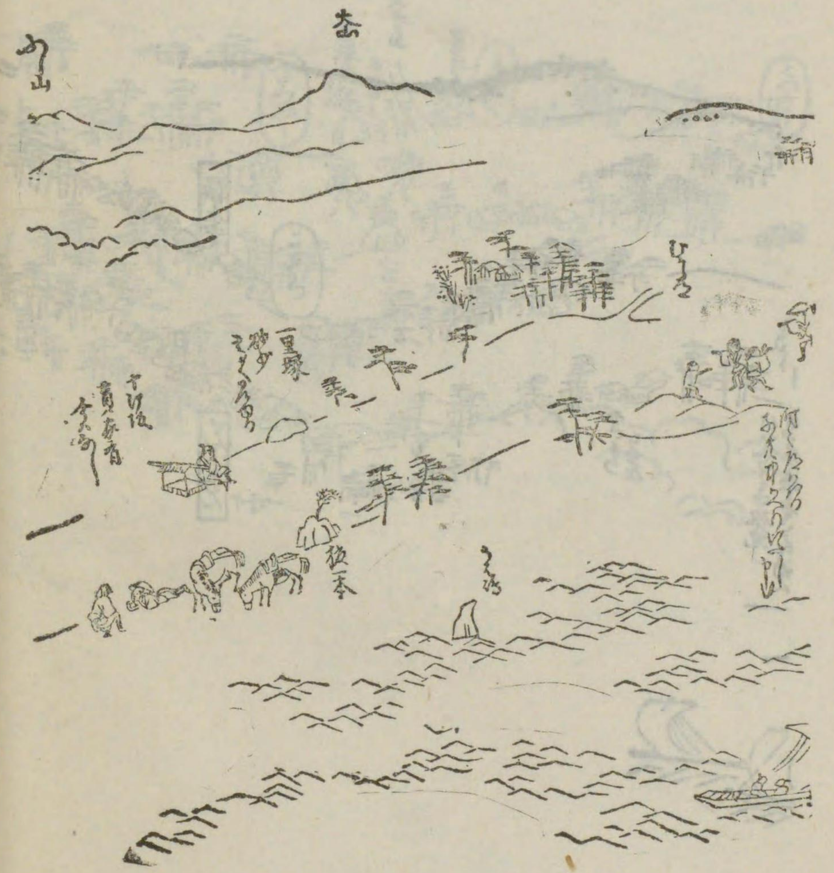


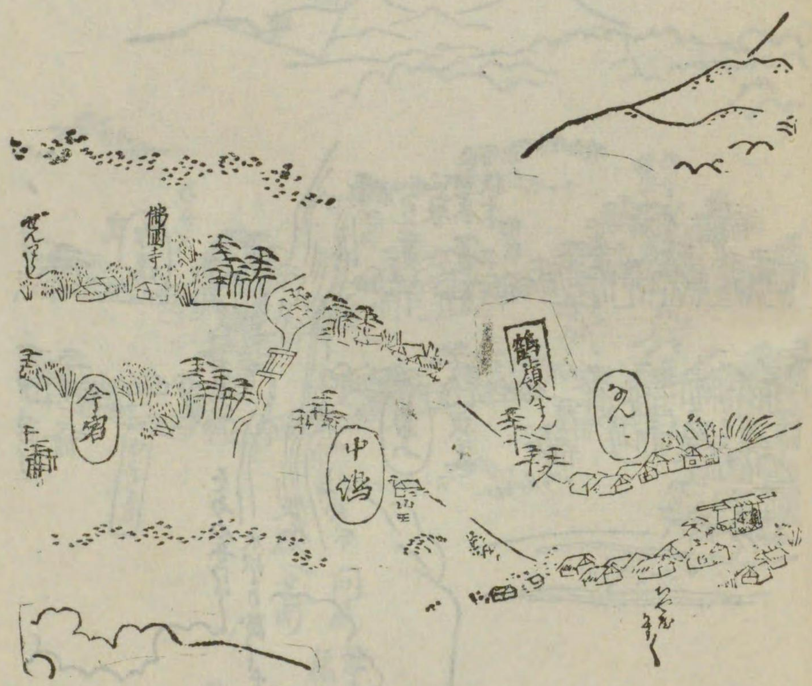

ひさご

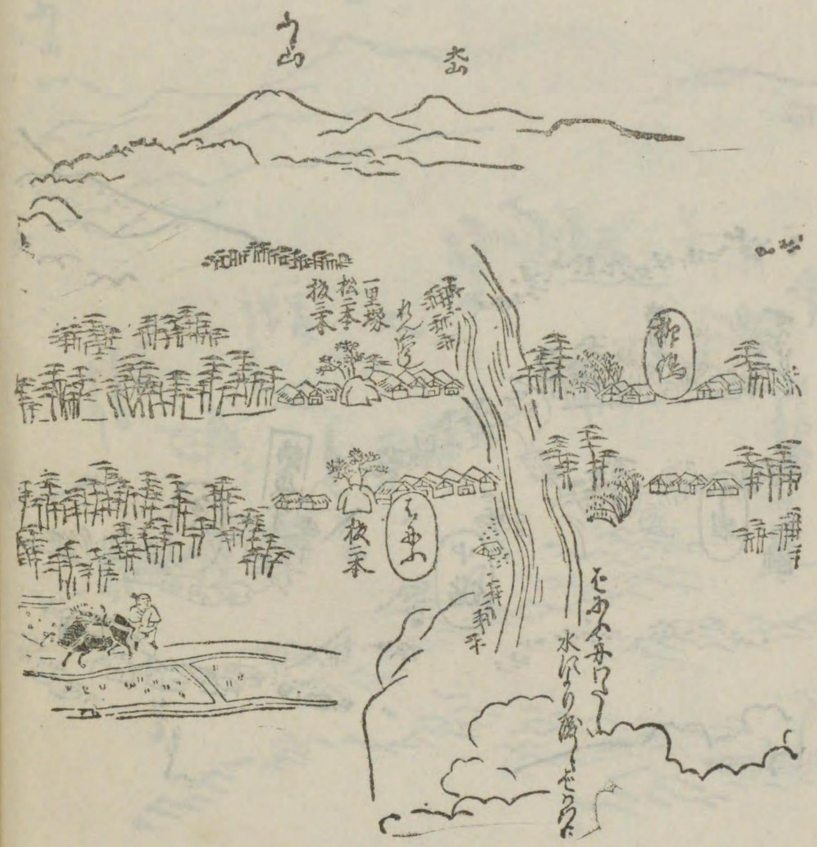

富士
妙法寺
一里塚松三
平塚
三里

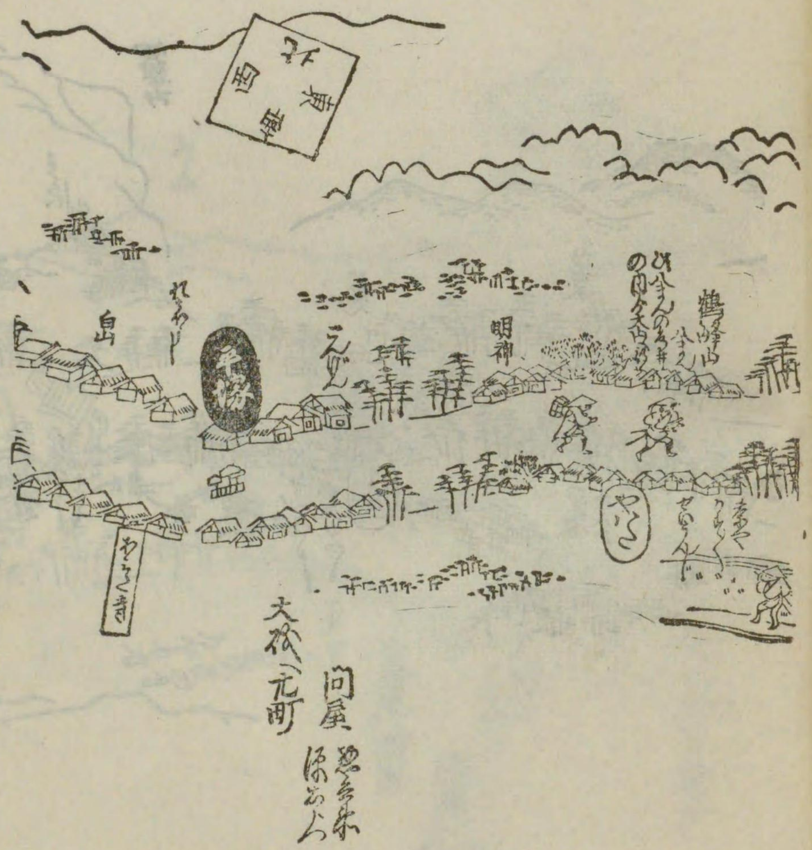

大山道
一里塚
小松
やさろや
うつ
ろひろ

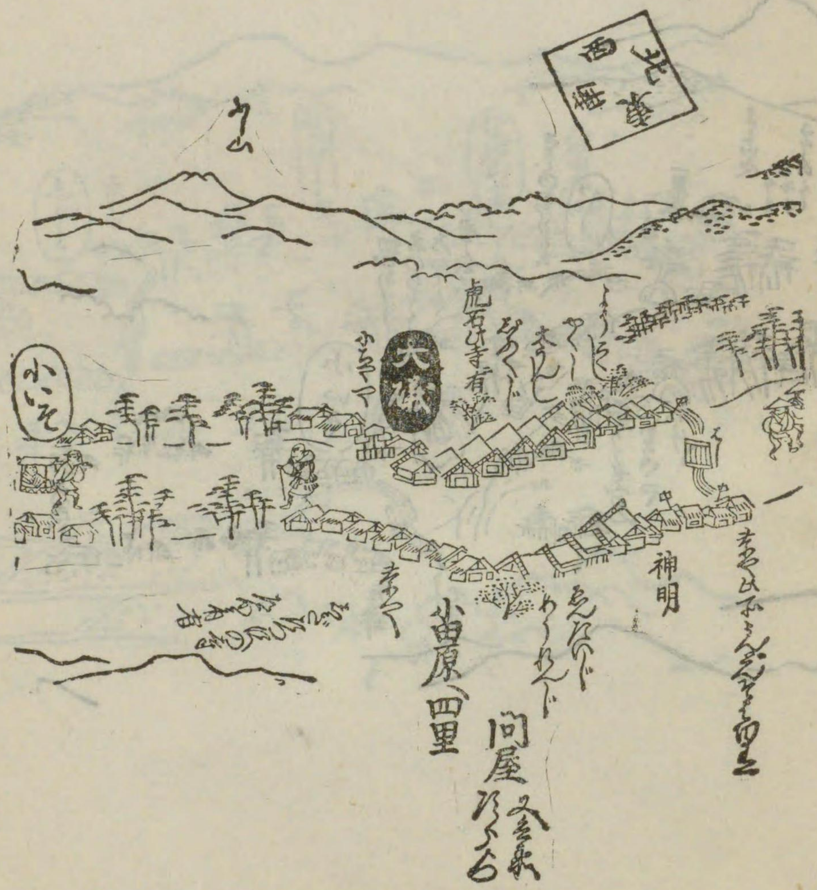

清生寺
こうろ

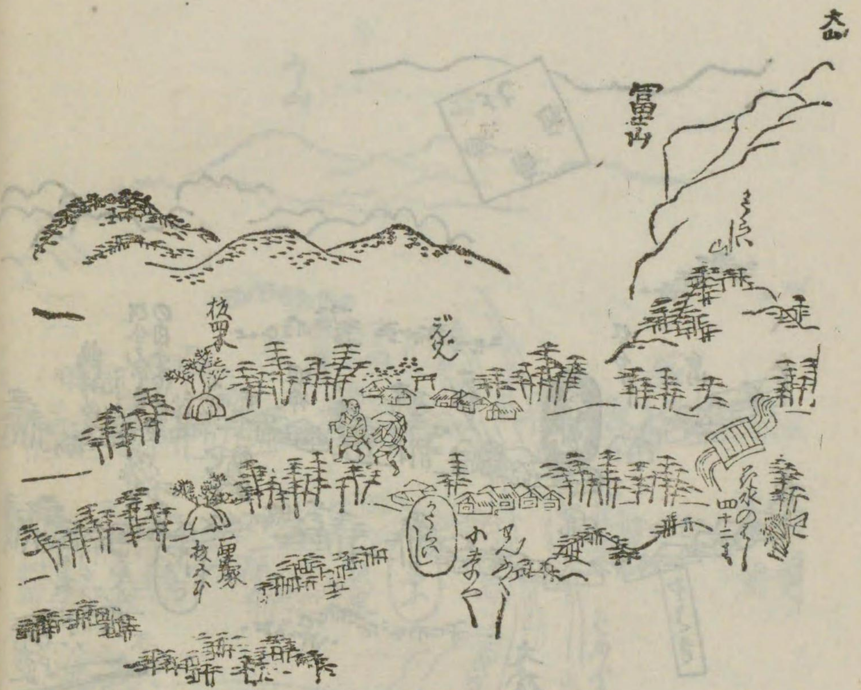

富士山
箱根
三島
沼津
吉原
蒲原
由比
江尻
府中
藤枝
島田
金谷
日坂
掛川
袋井
見附
浜松

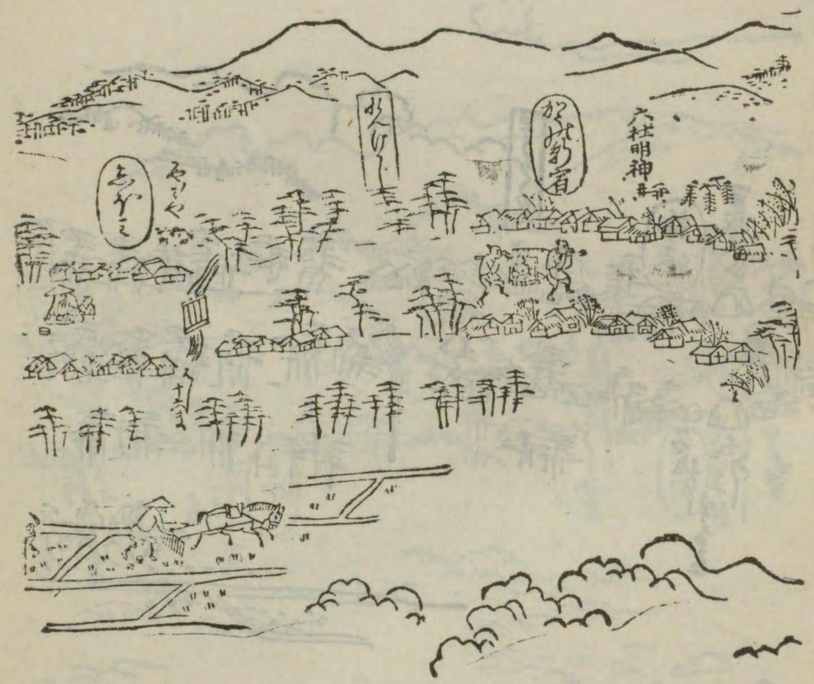

鶴瀬
宮
中嶋
今宿

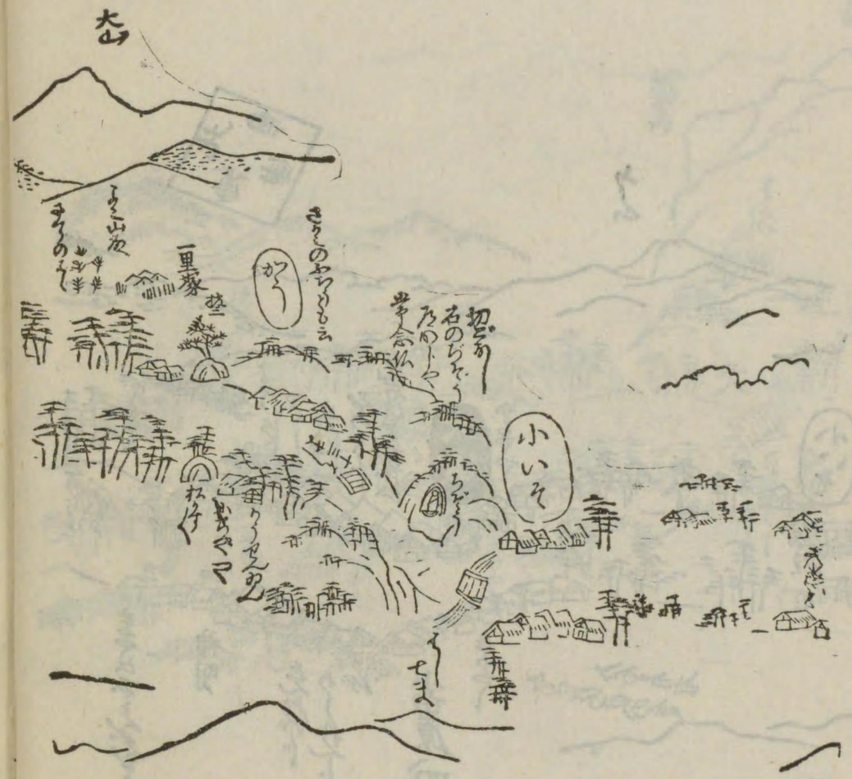

富士山
一里塚
松本
板橋
新潟

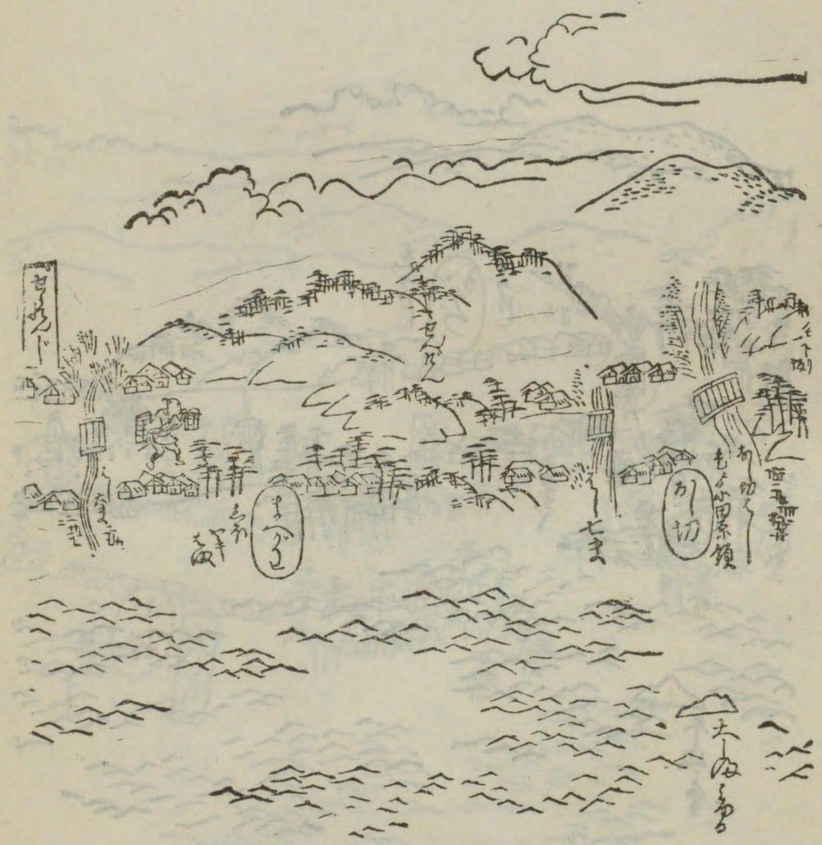

東海道
島
明神
やくし
やくし寺
大磯一元町
問屋

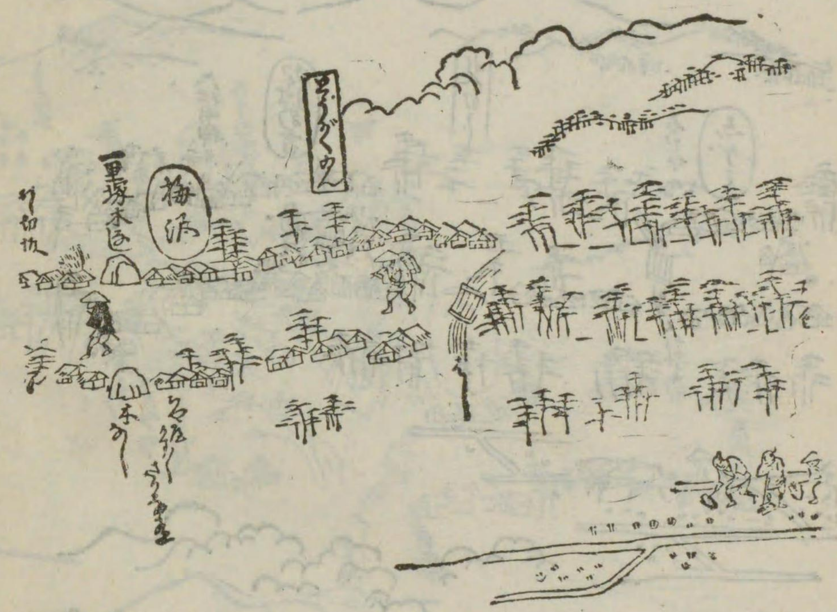

大山
大磯
神明
問屋
宿原四里

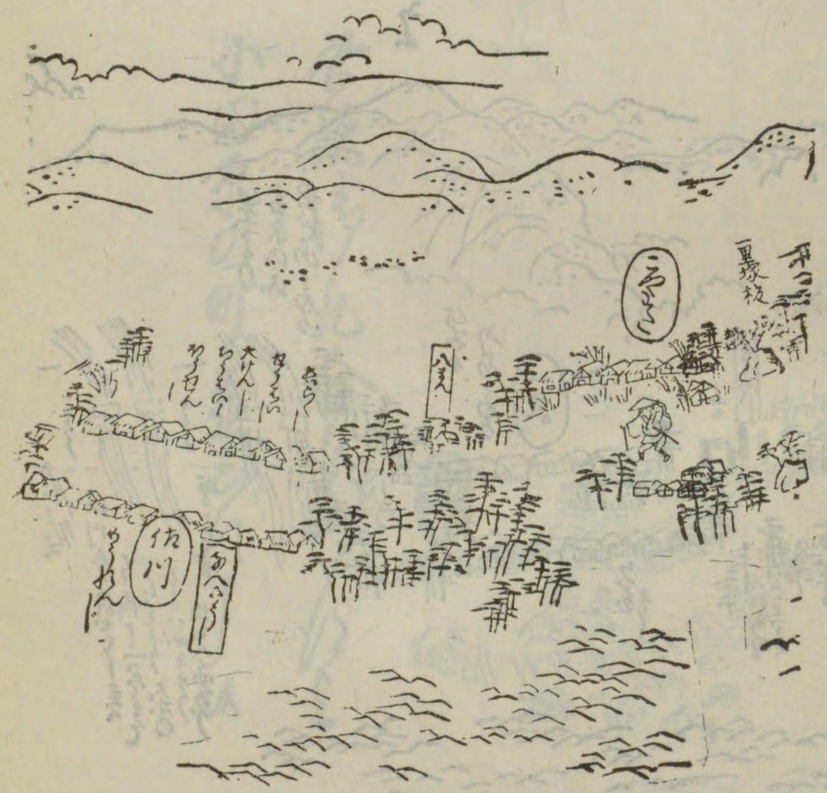

大山
富士山

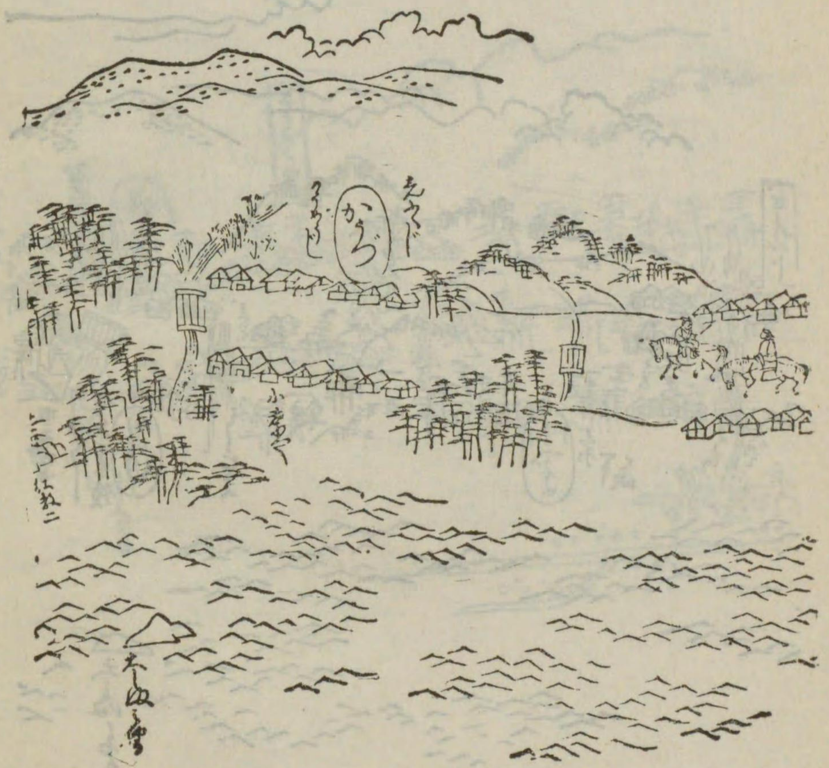

六社明神

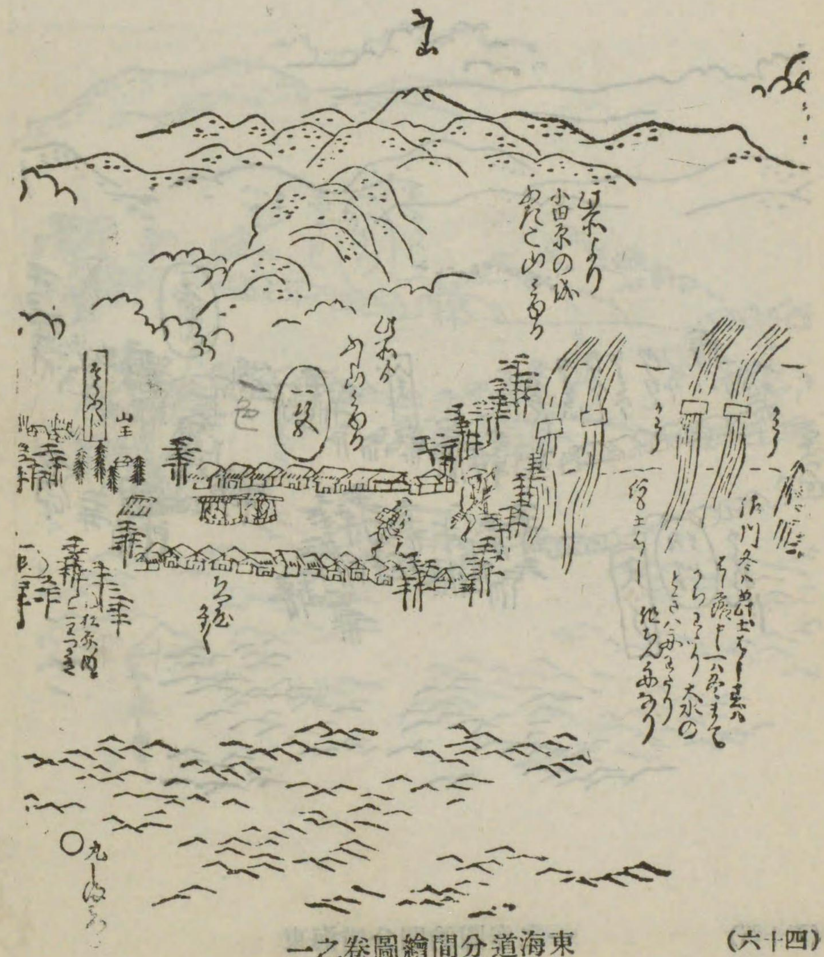

大山
小いそ




梅沢


佐川


かうづ

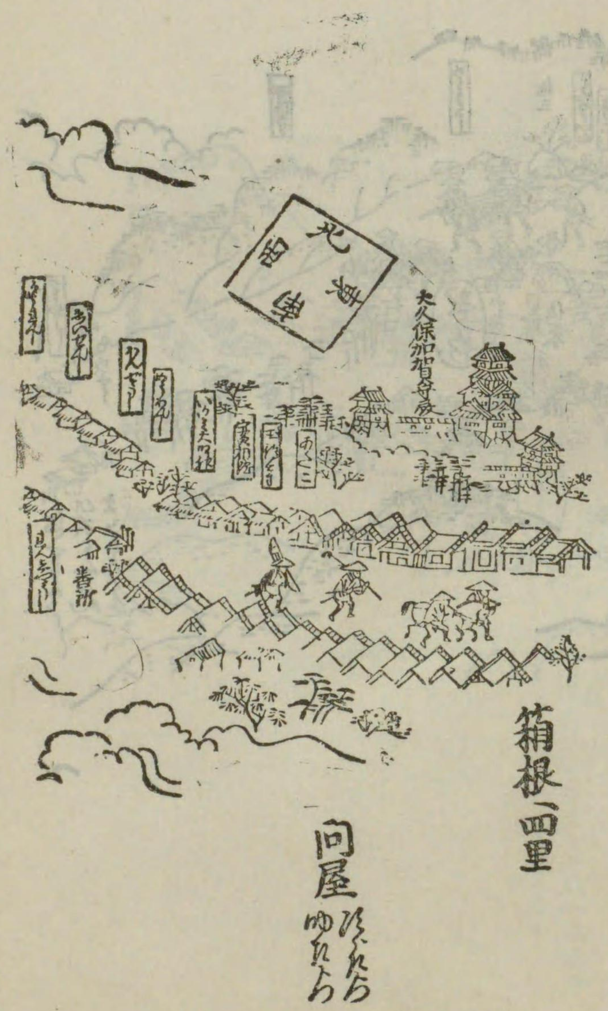


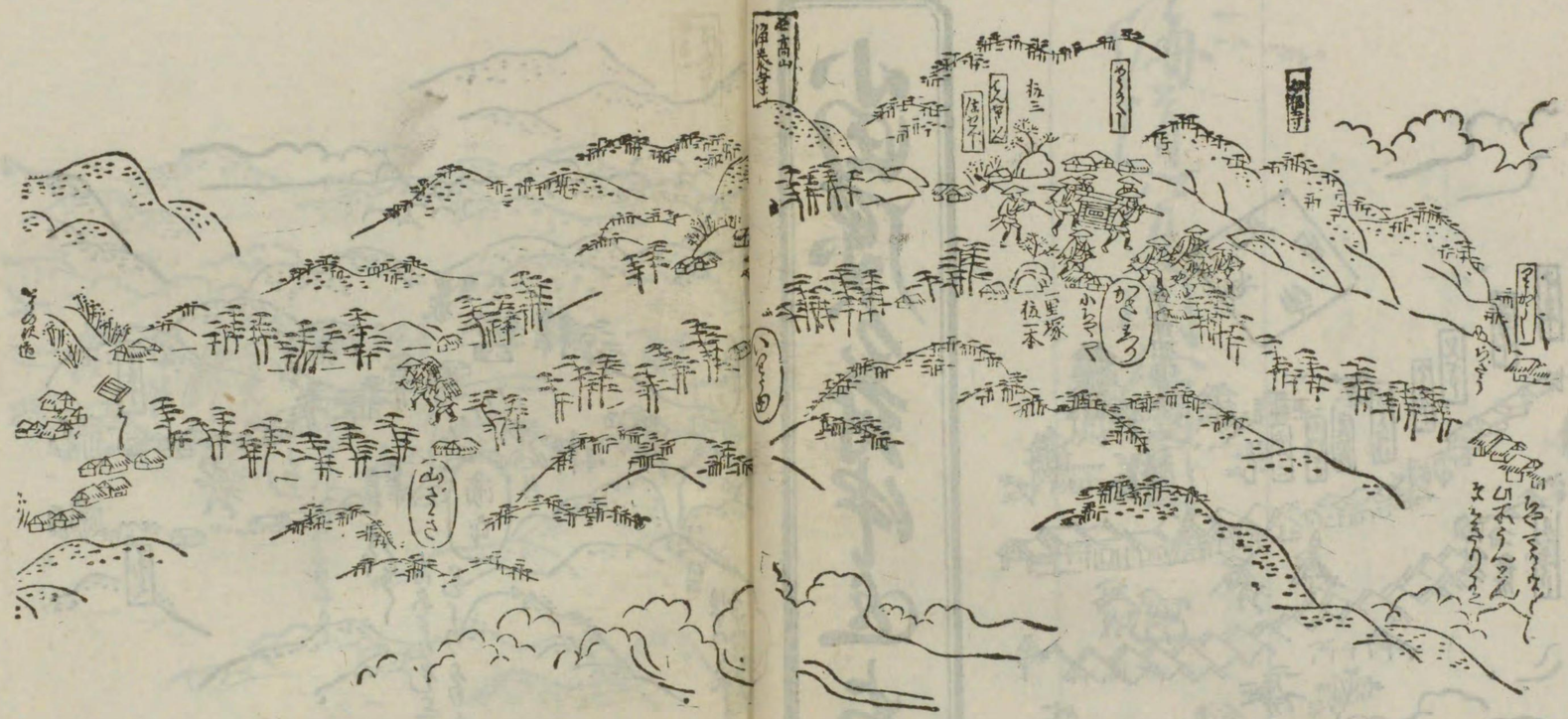
沼原

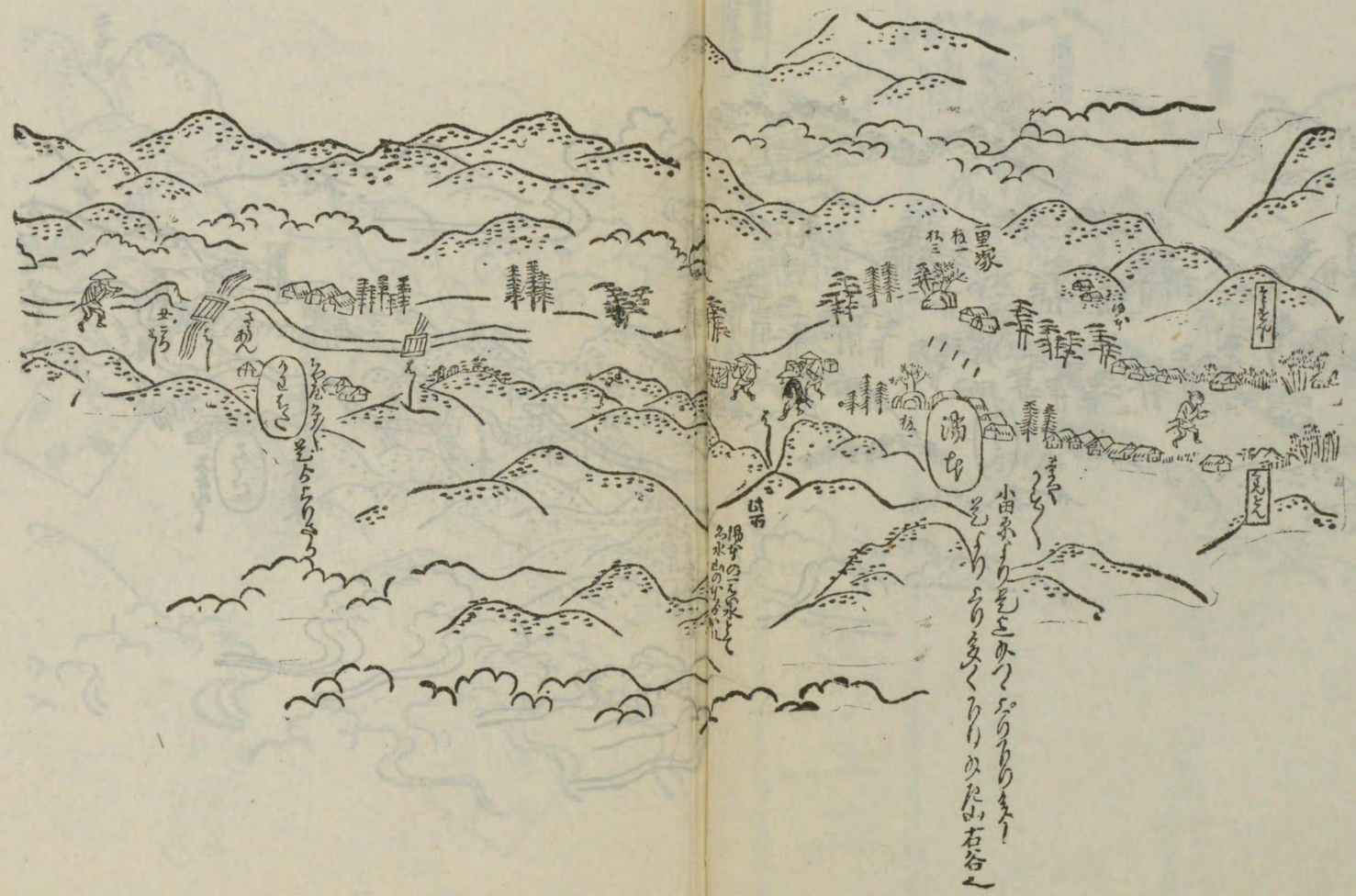
東海道分間繪圖

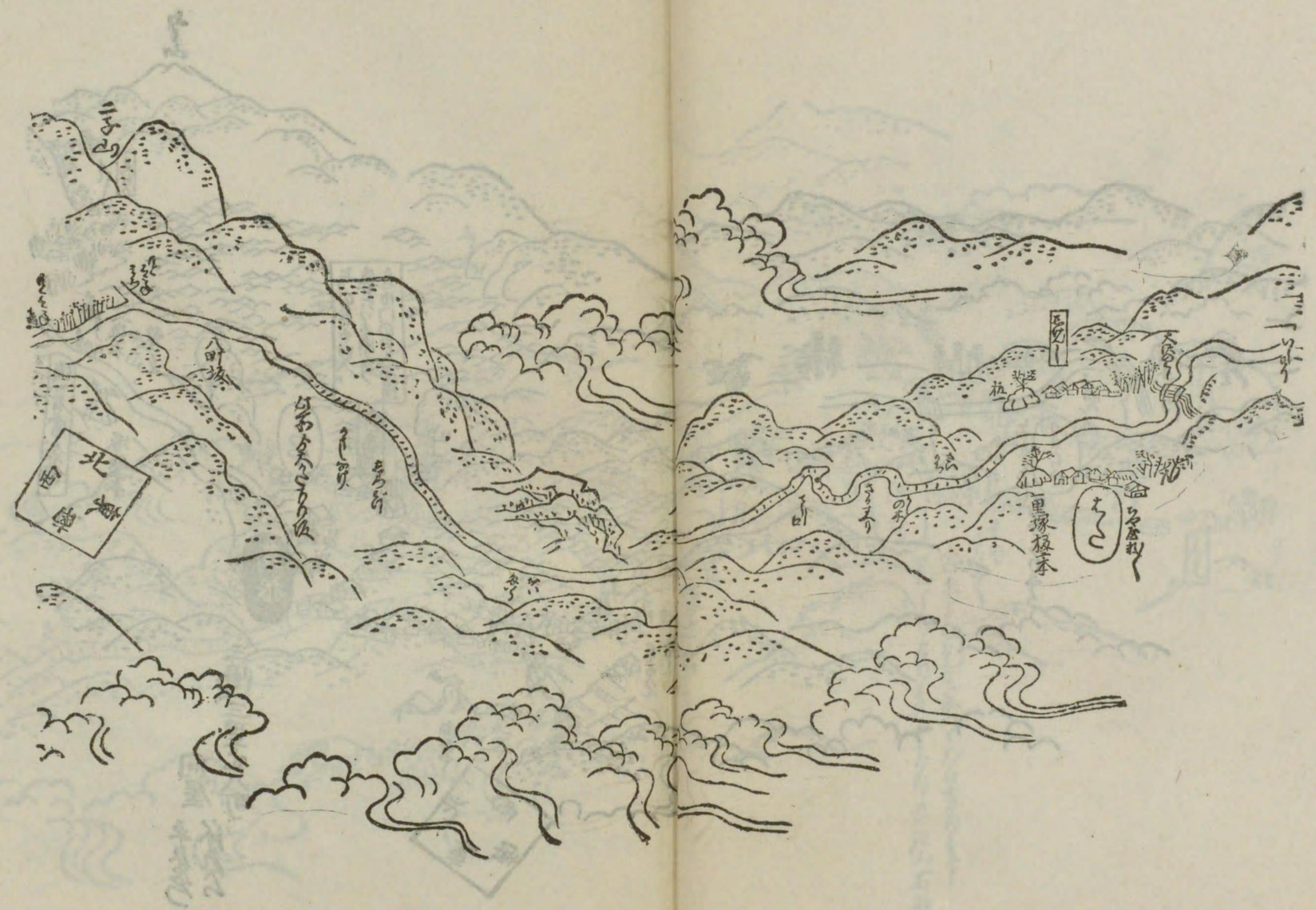
二

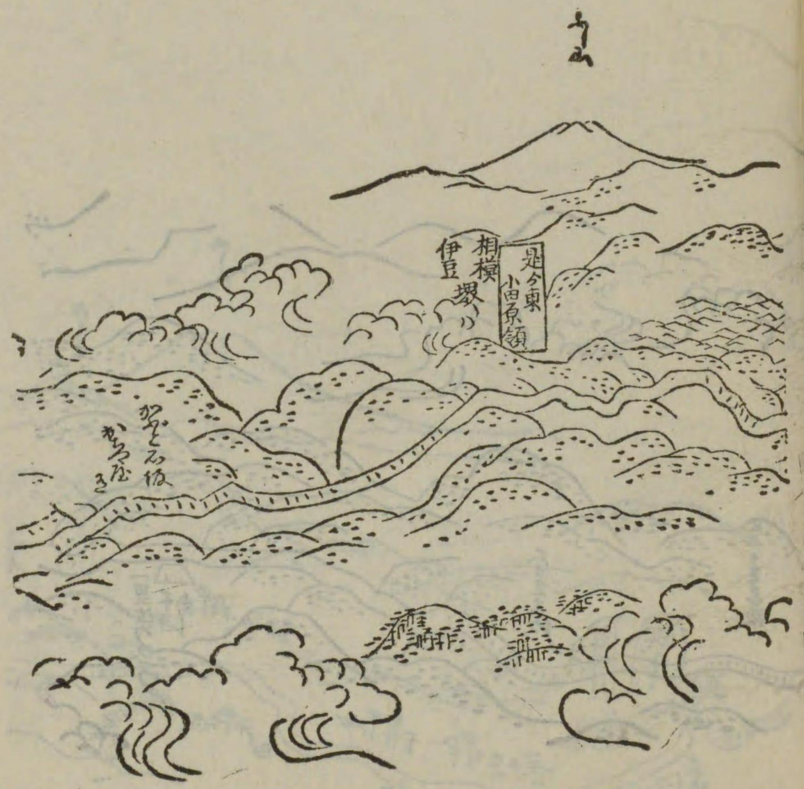
小田原分宿中途之二



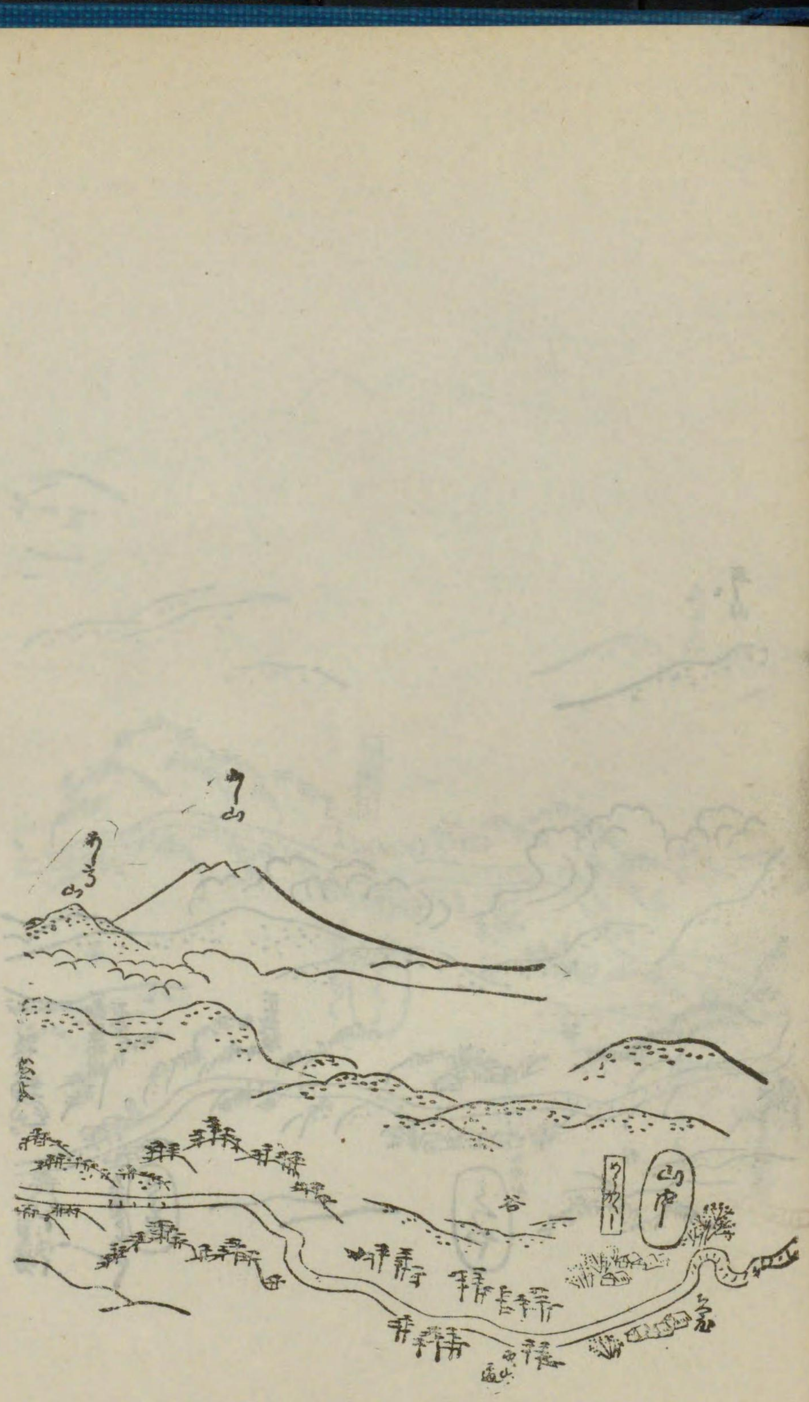

拔三
一里塚
拔一本

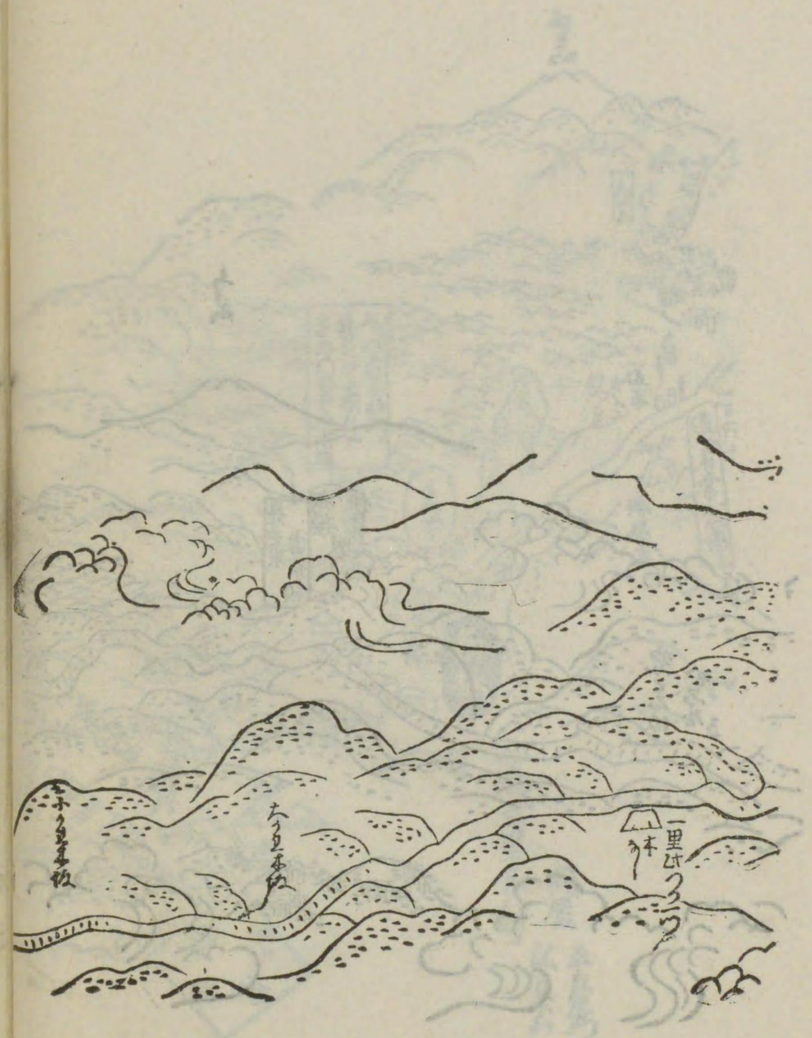

里塚
湯ヶ

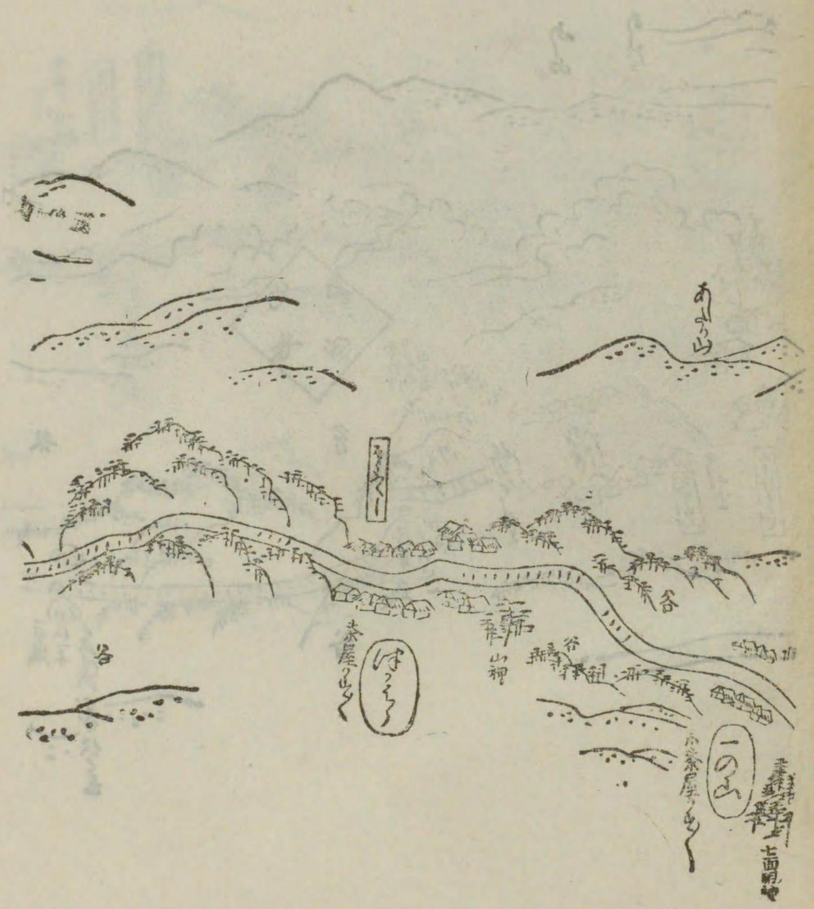

北海
西海
黒塚極本

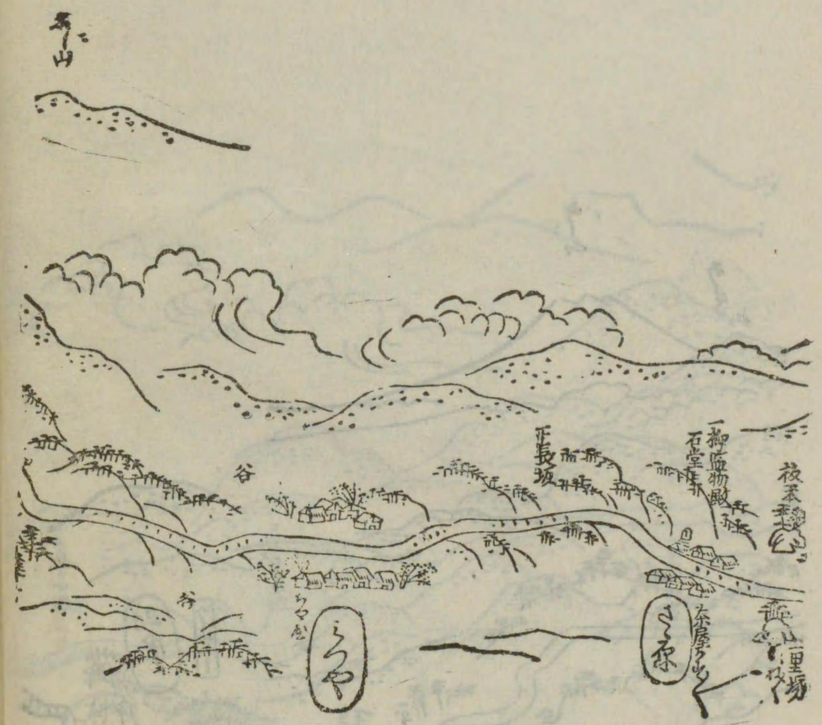

是ヨリ東
小田原領
相模
伊豆
堺ハ

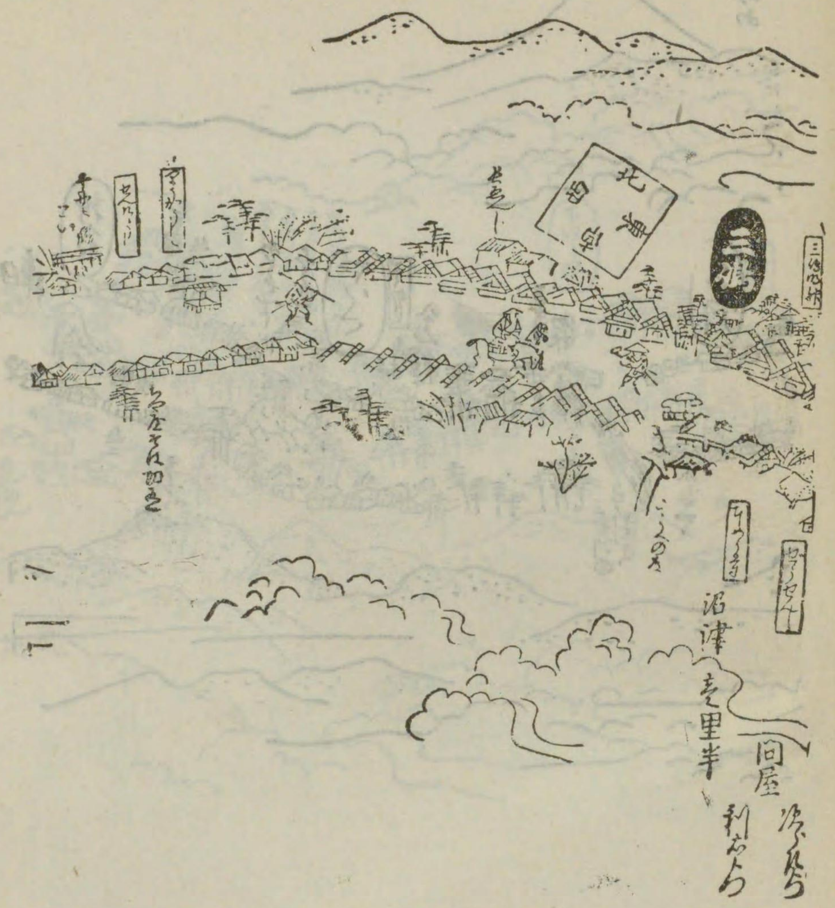
上リの者手形ハ
暮六ツ今朝六ツ
を限リの内ハ不通
御番所
えとや
箱根
道ハ者常念佛
塚原本
三嶋ヘ三里九八町
同屋
西
北
東
南

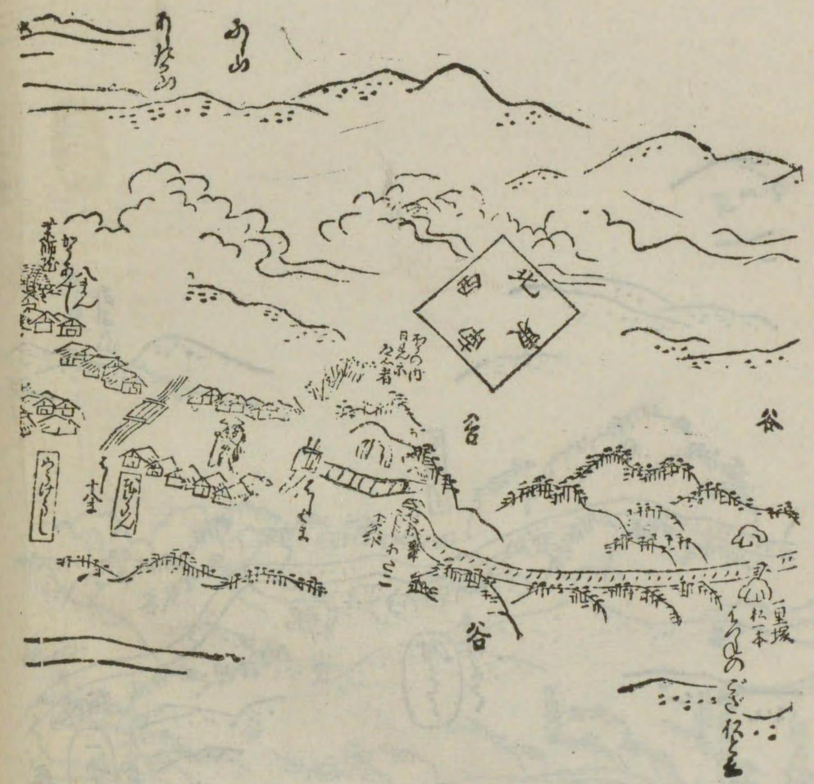

谷

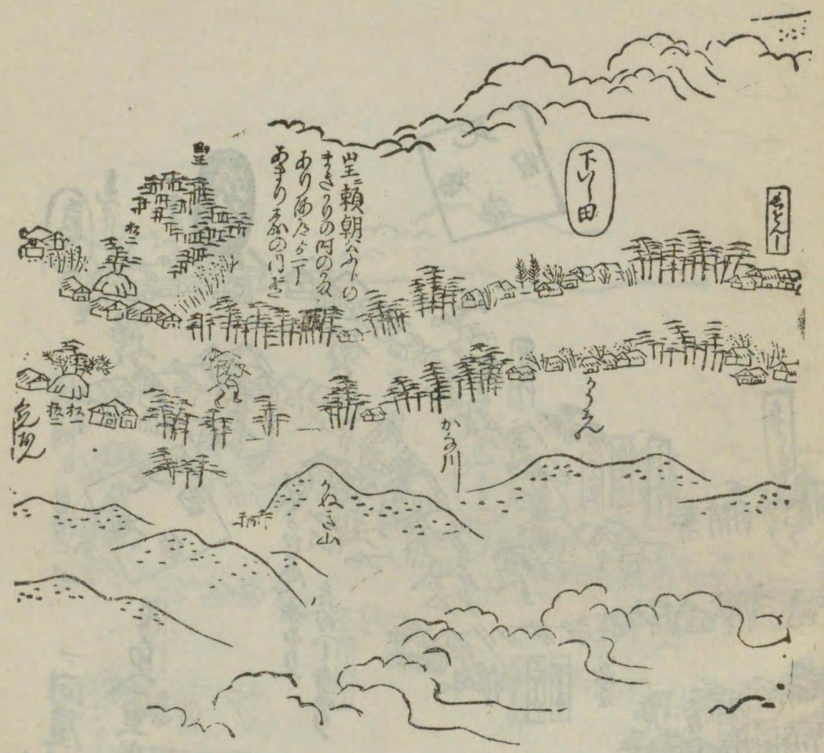


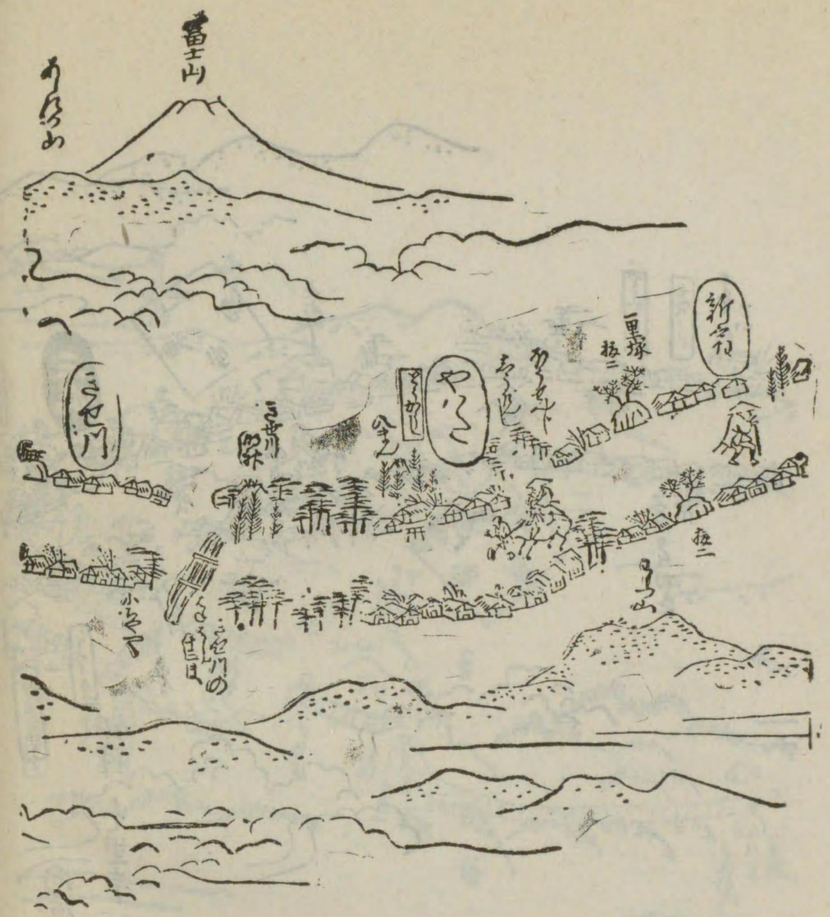

谷
茶屋
山神
谷
谷
茶屋
一の宮
上面間

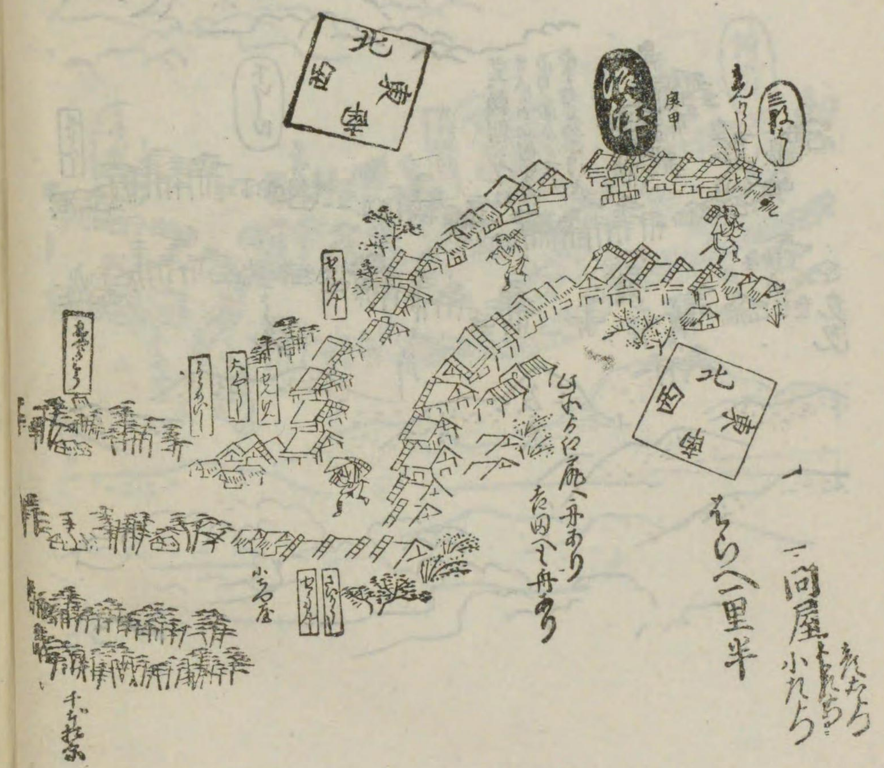

谷
長坂
御臨物殿
石堂
谷
茶屋
二里塚

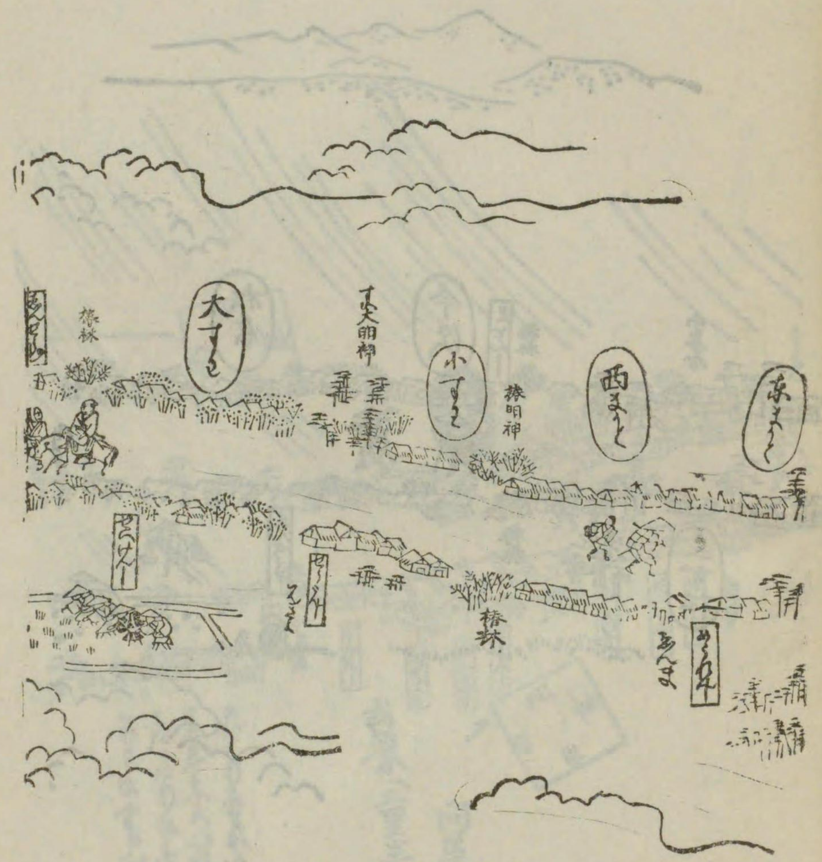

三嶋
沼津
壱里半
問屋

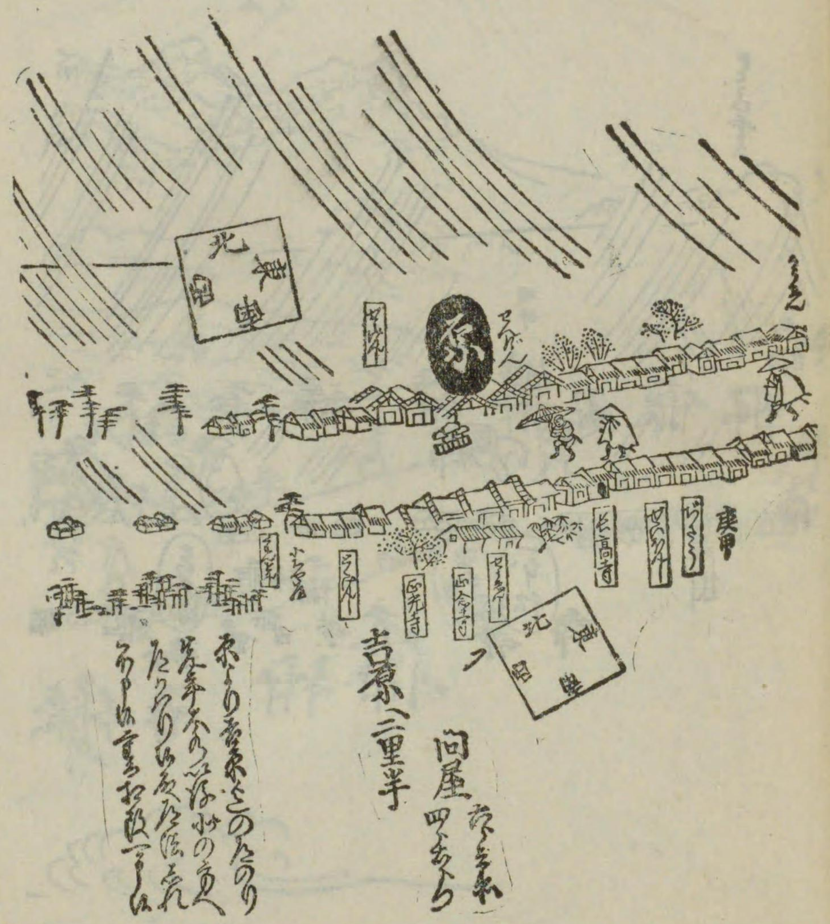

谷
谷
一里塚

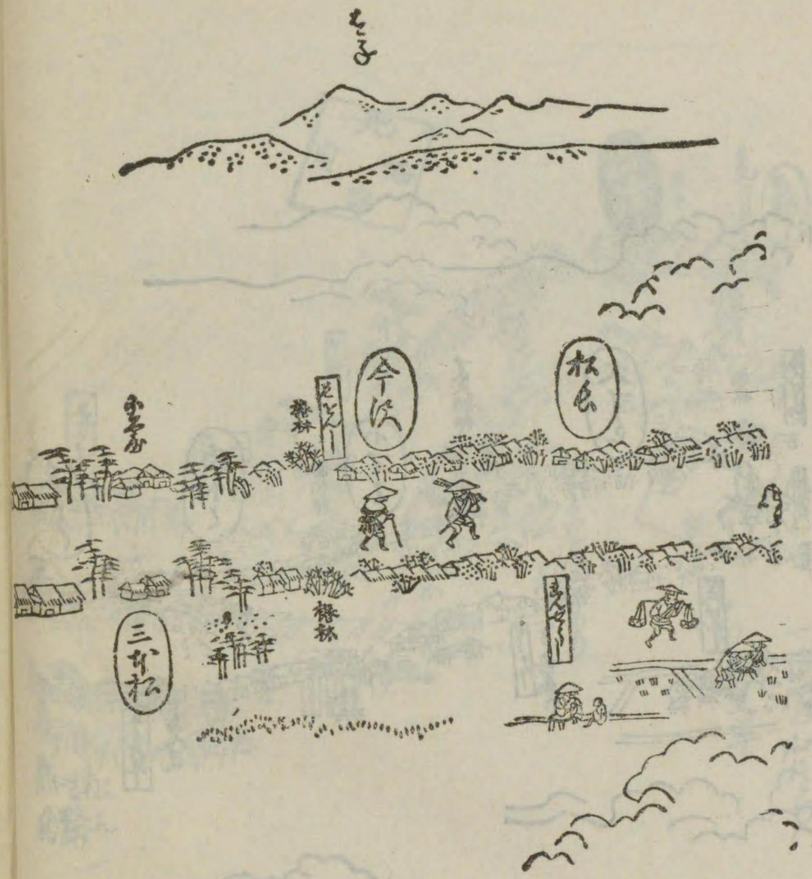

下り田
かう川

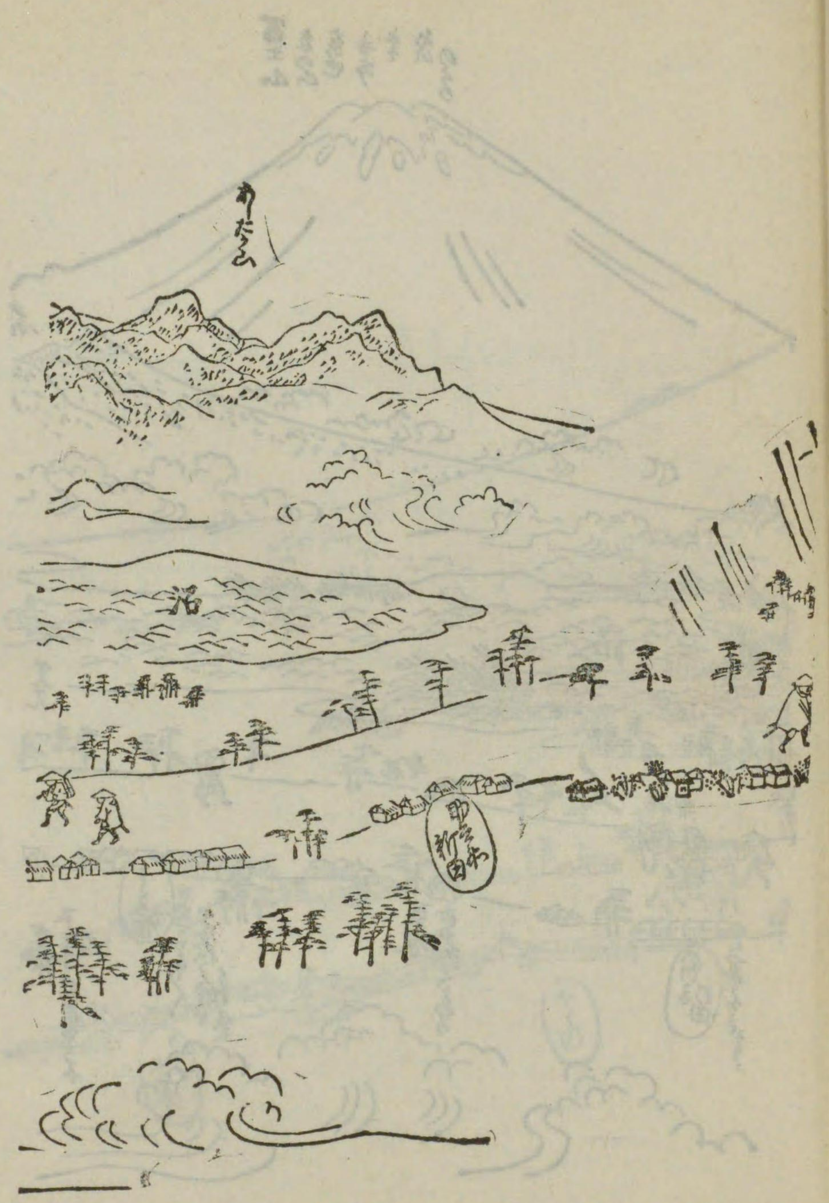

富士山
新宮
やくこ

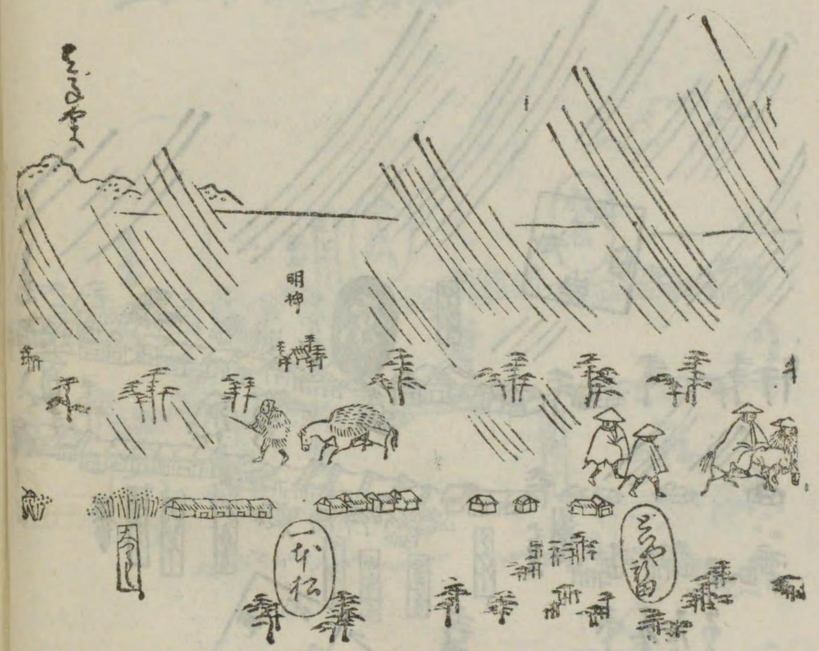

北海
西東
北海
西東
三島
沼津
奥甲
一向屋
小れう
こらへ一里半
舟あり
舟あり

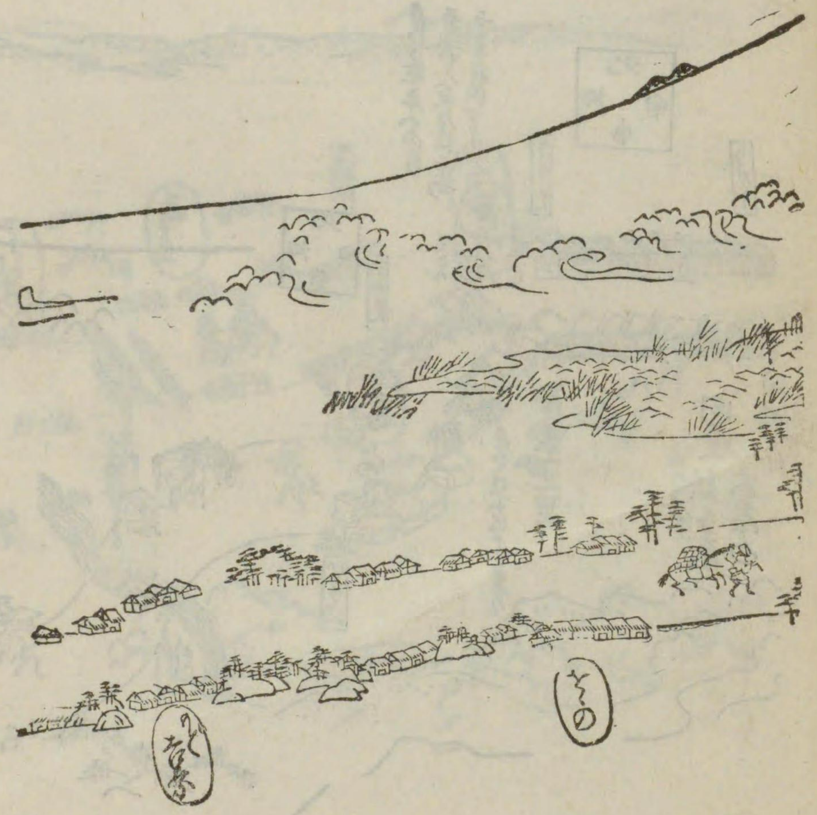

大すゝと
小すゝと
西すゝと
東すゝと
森
森

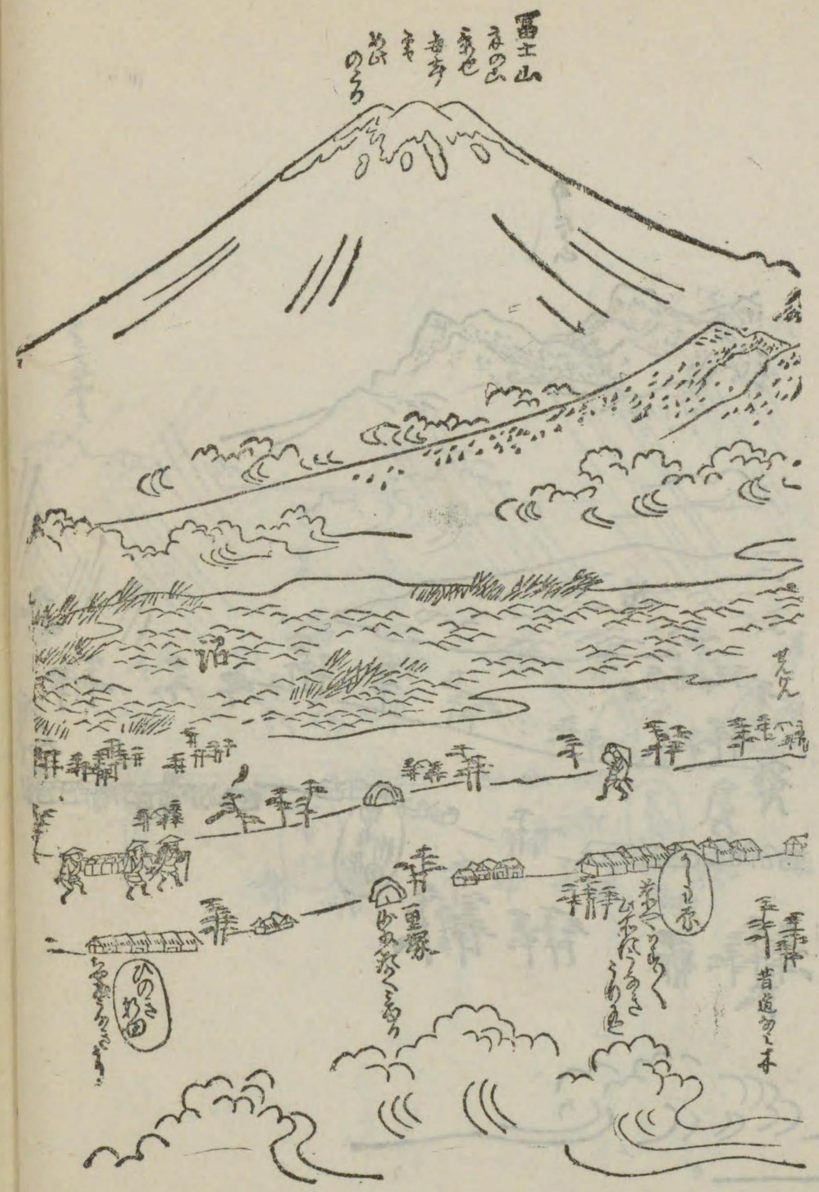

吉原二里半
問屋

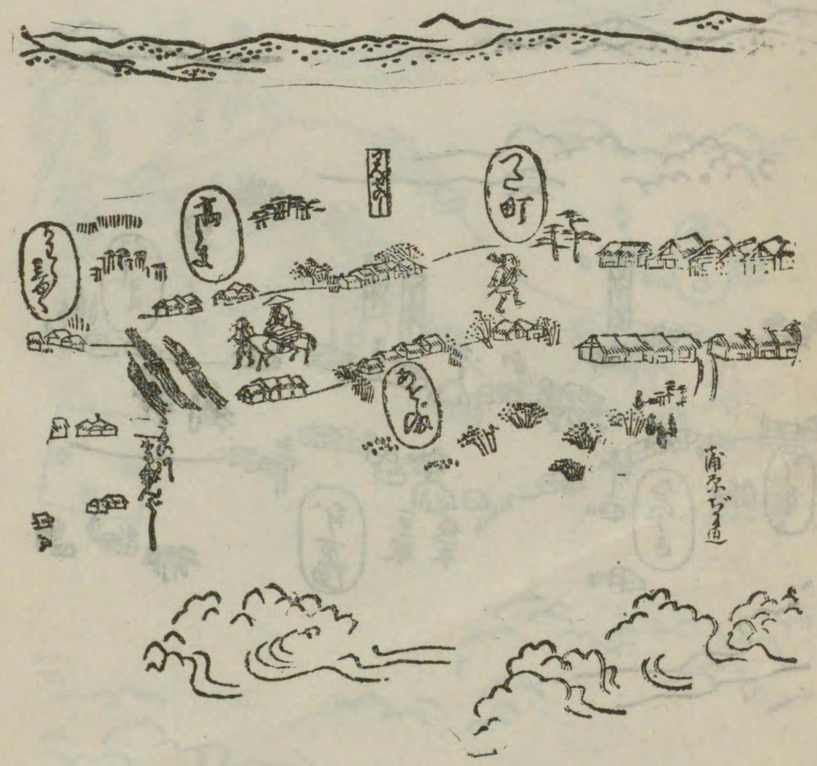

今沢
松原
三かま

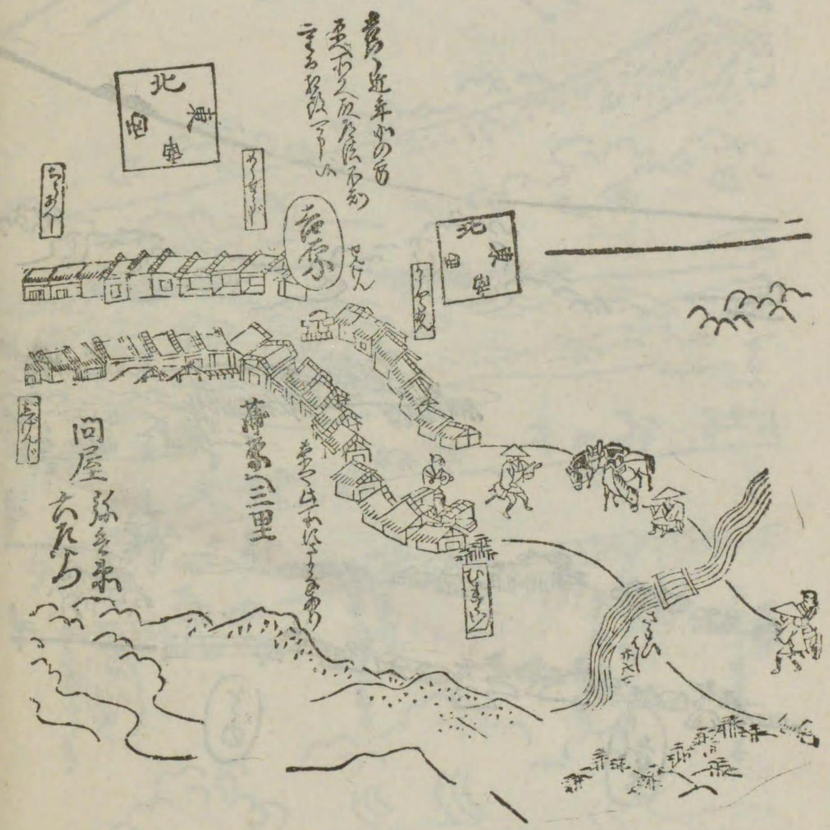

沼

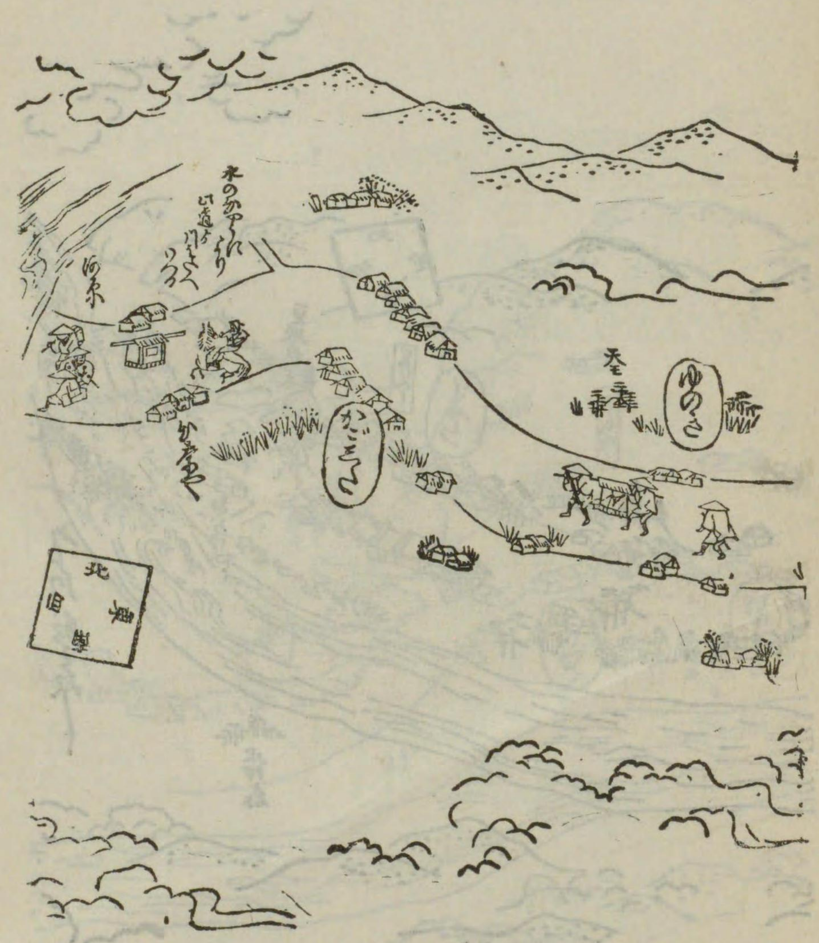

明神

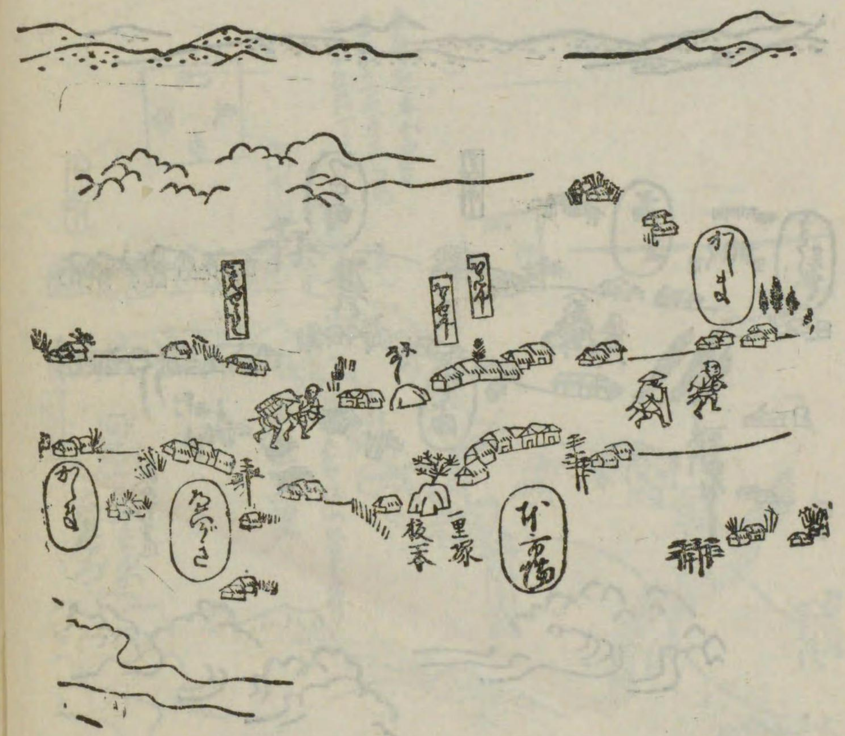


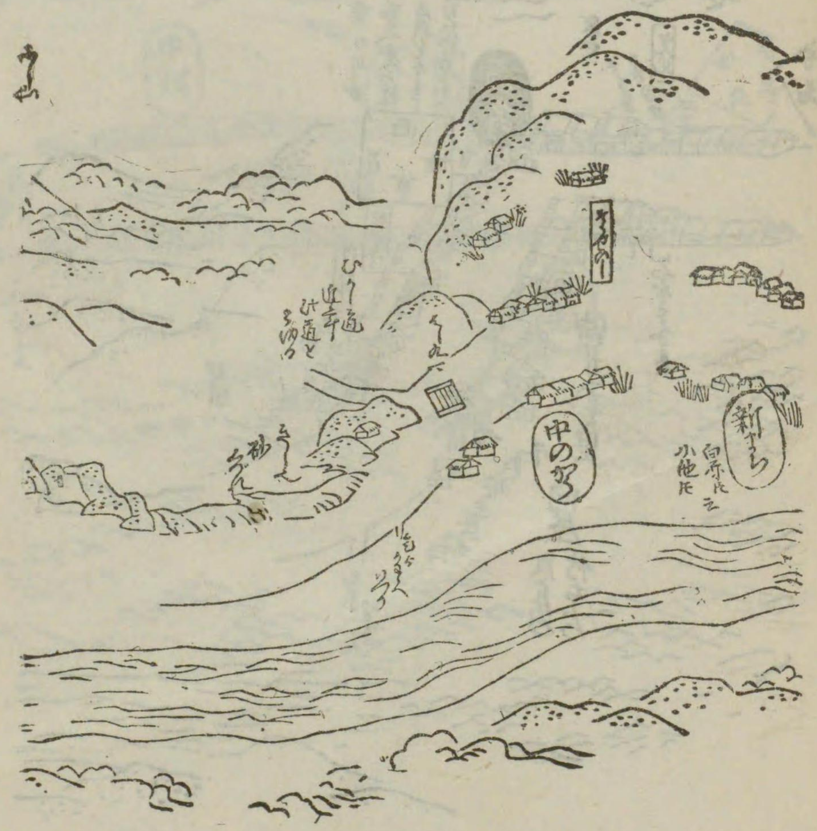


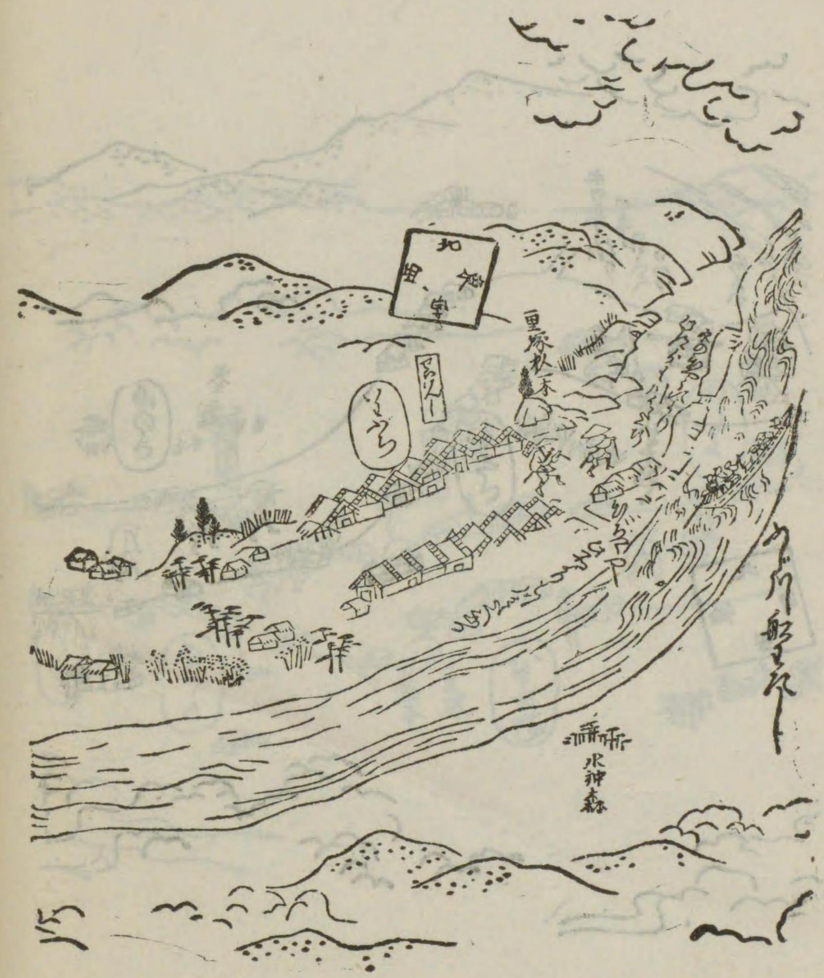


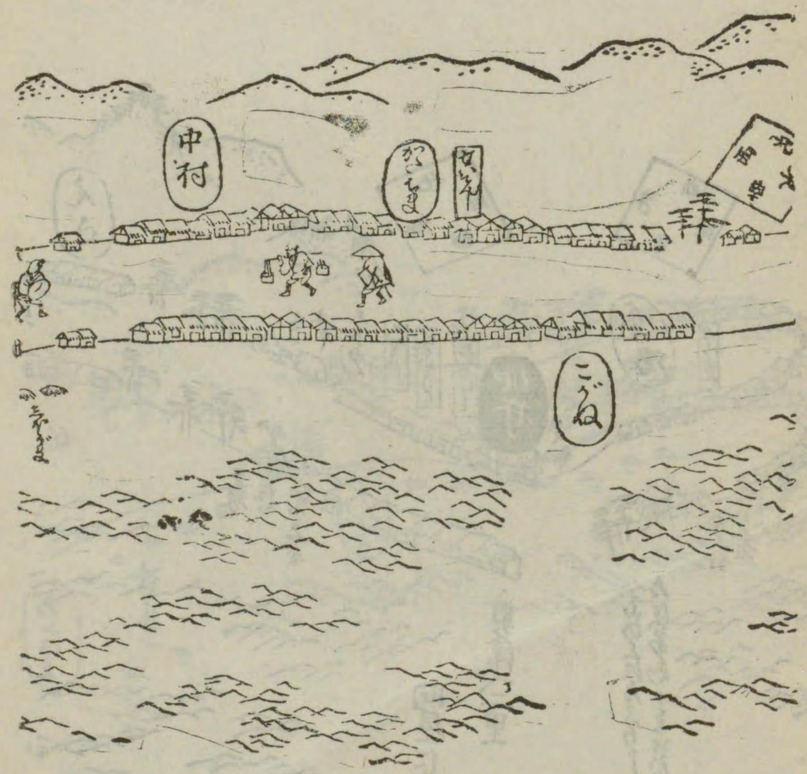




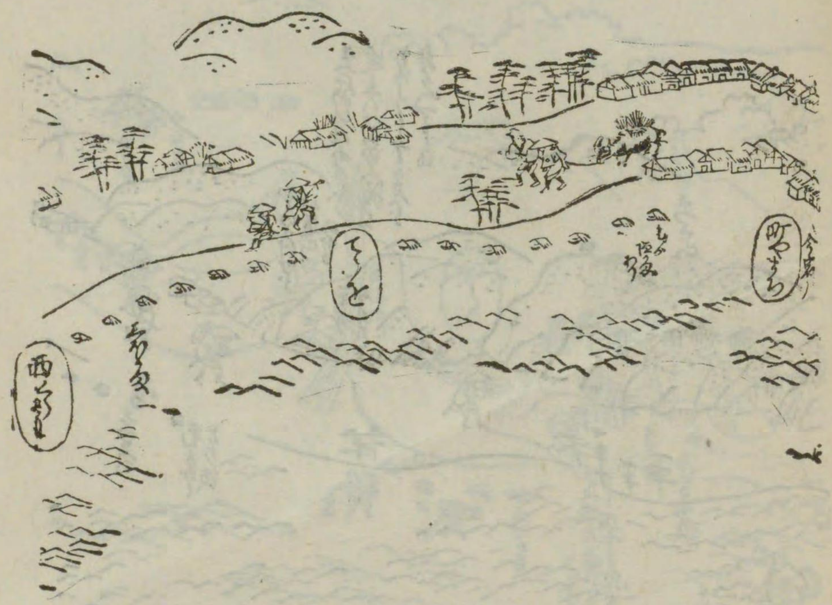


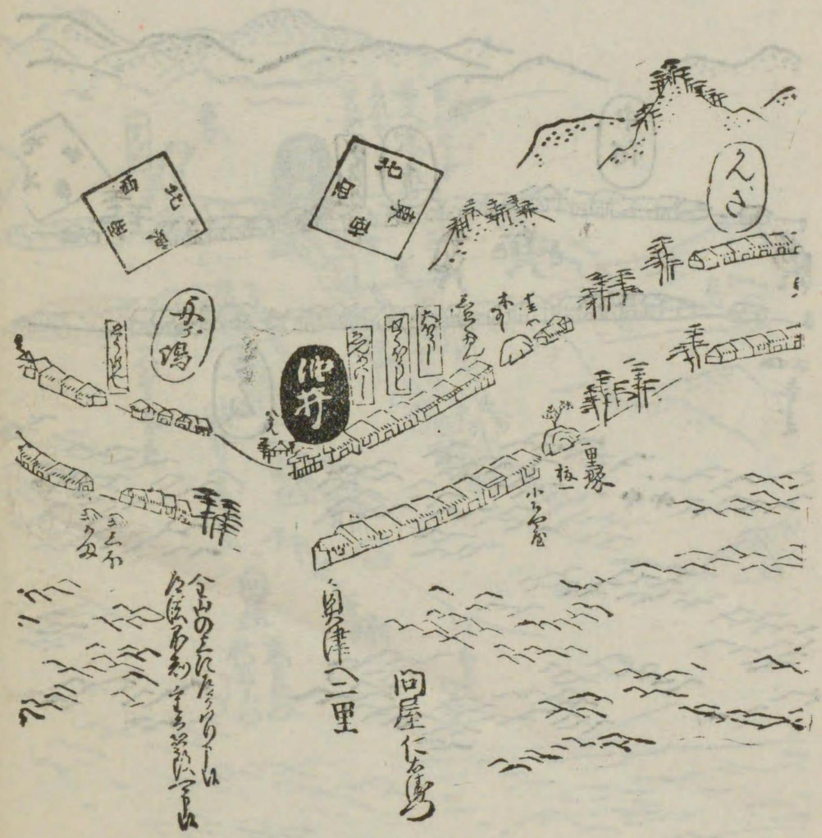

中の宿
新宿
白糸ノ滝
小佐地

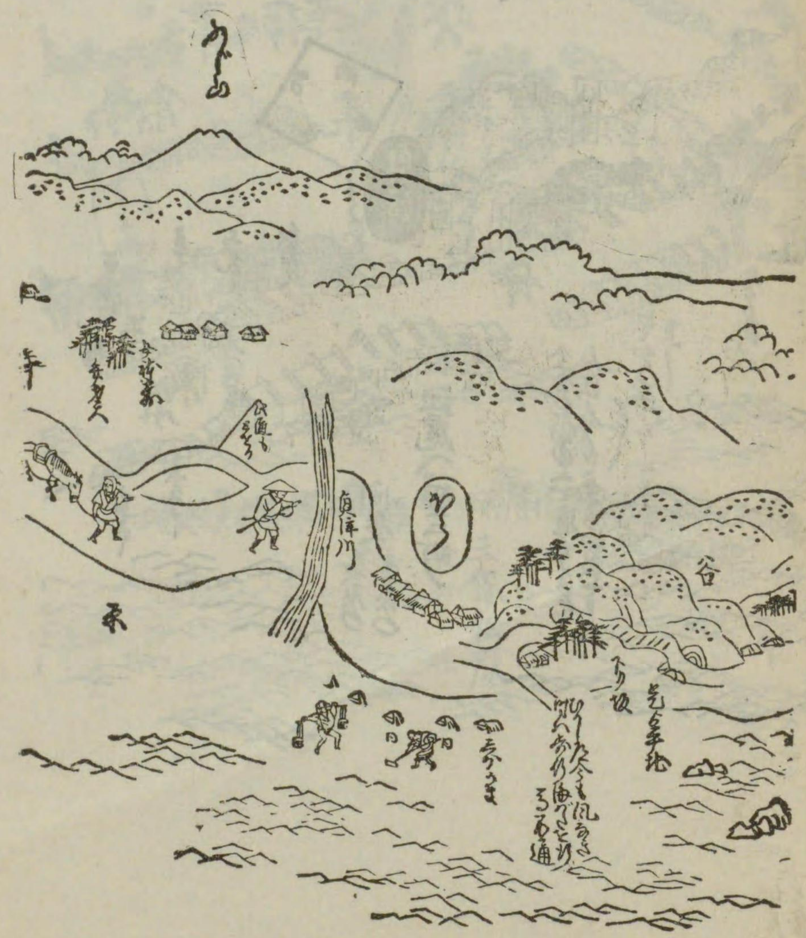

知恩寺
重塔松木
水神森

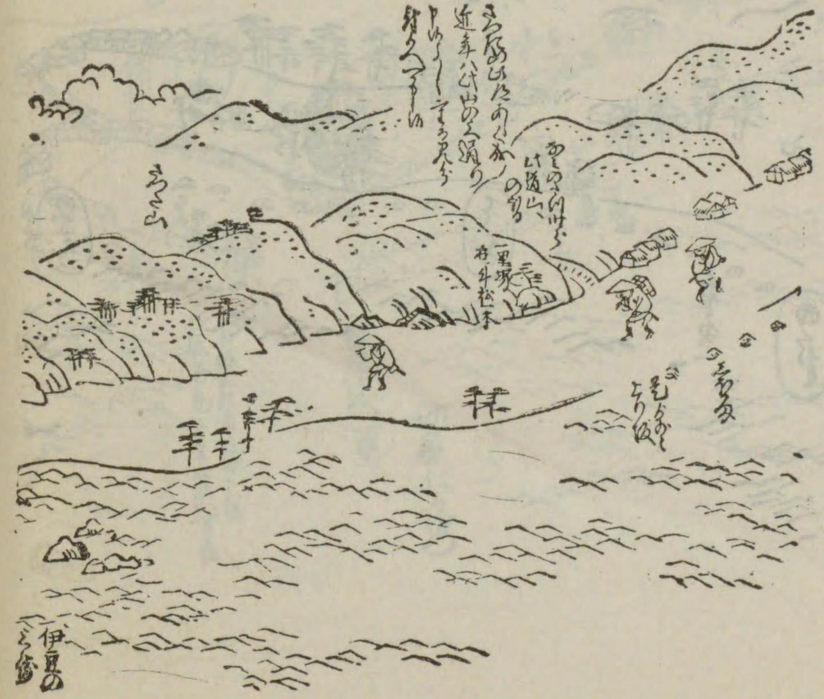

中村
こうね

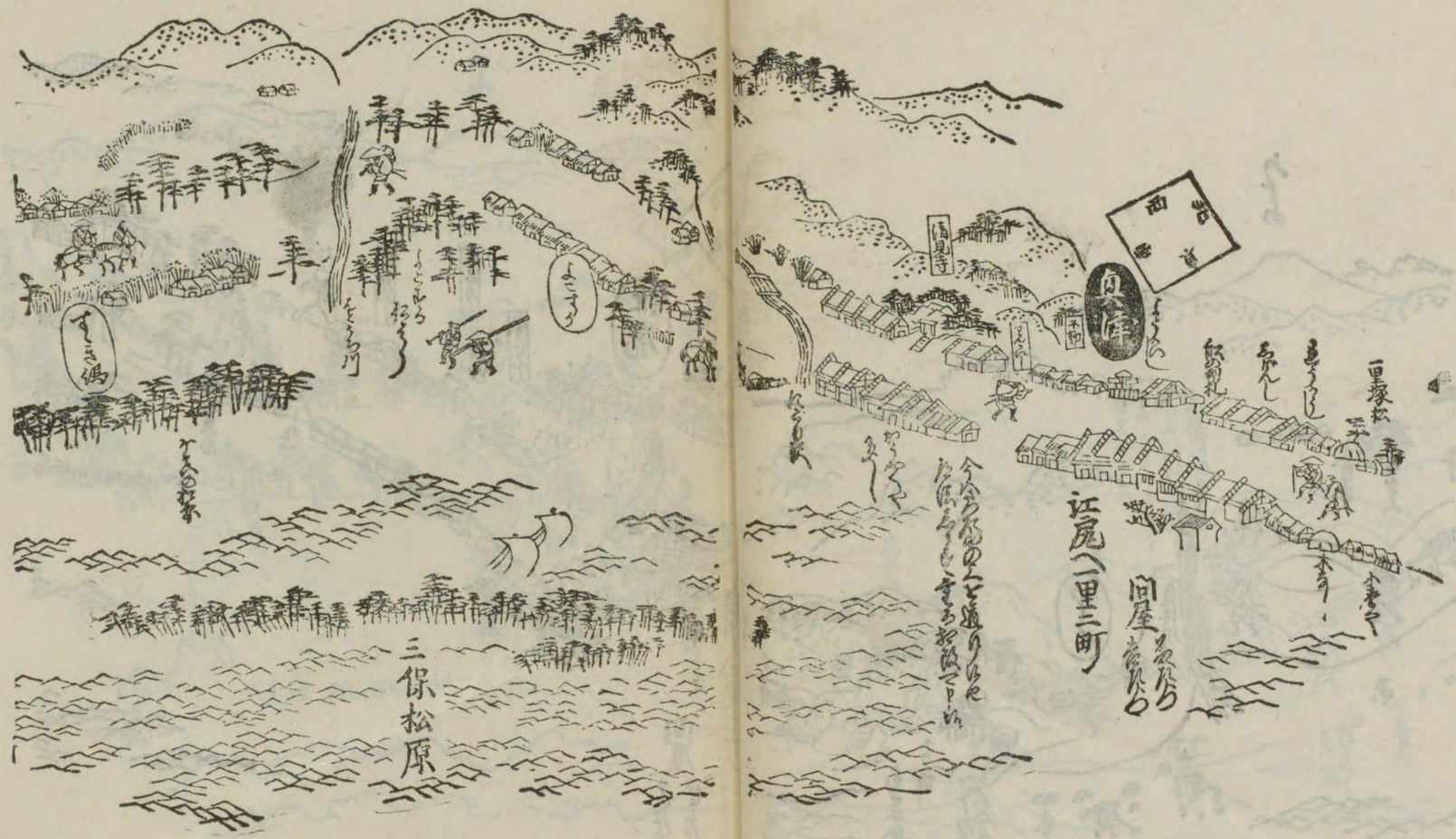
蒲郡
西浦
油井
白屋

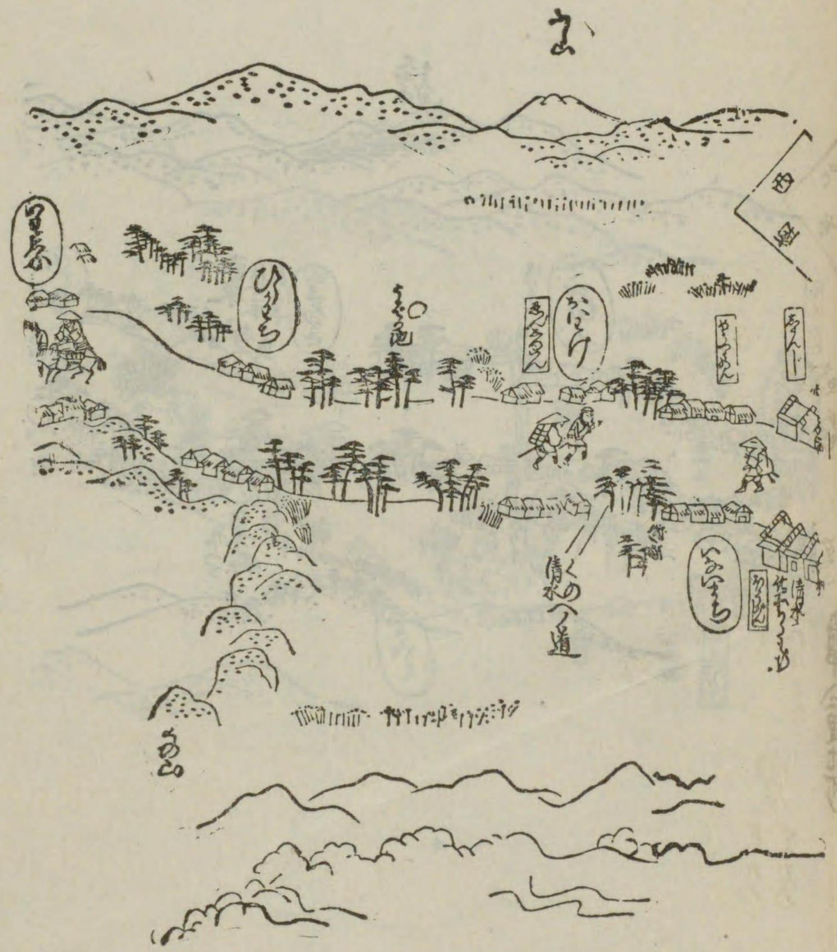


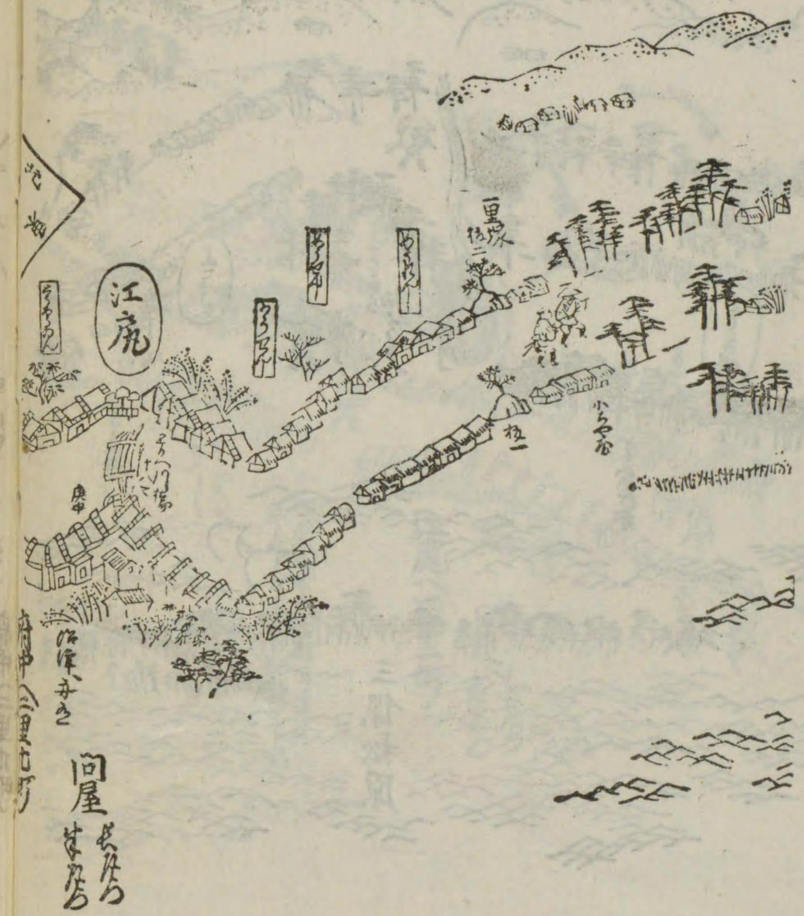


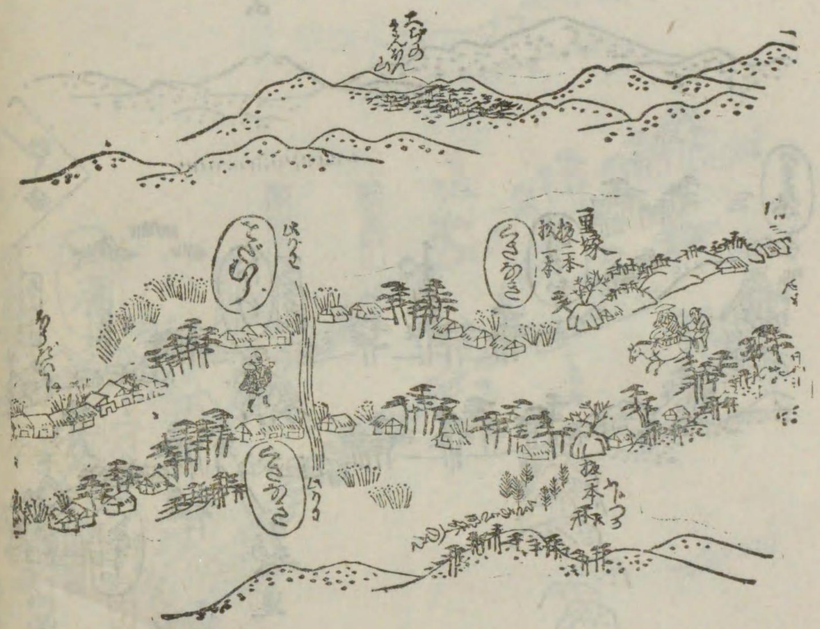


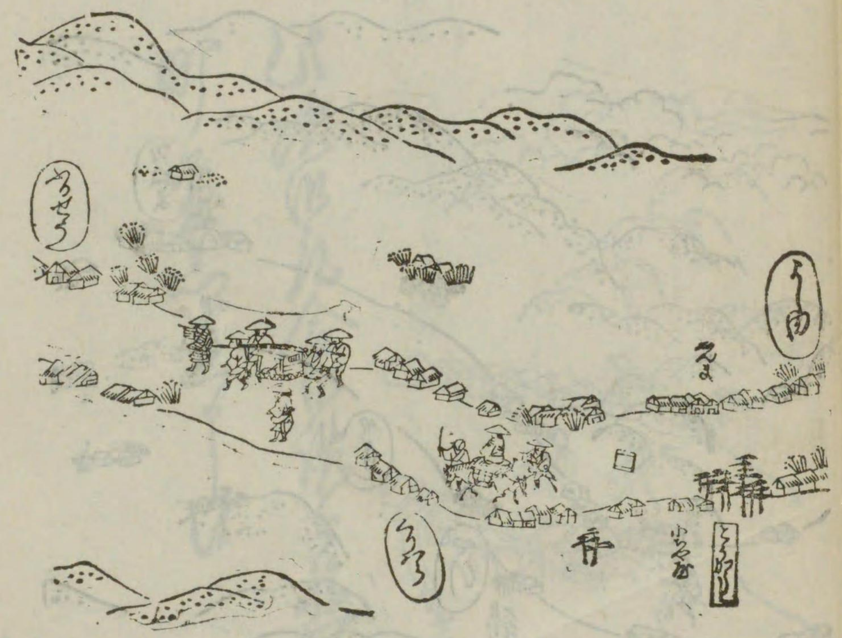


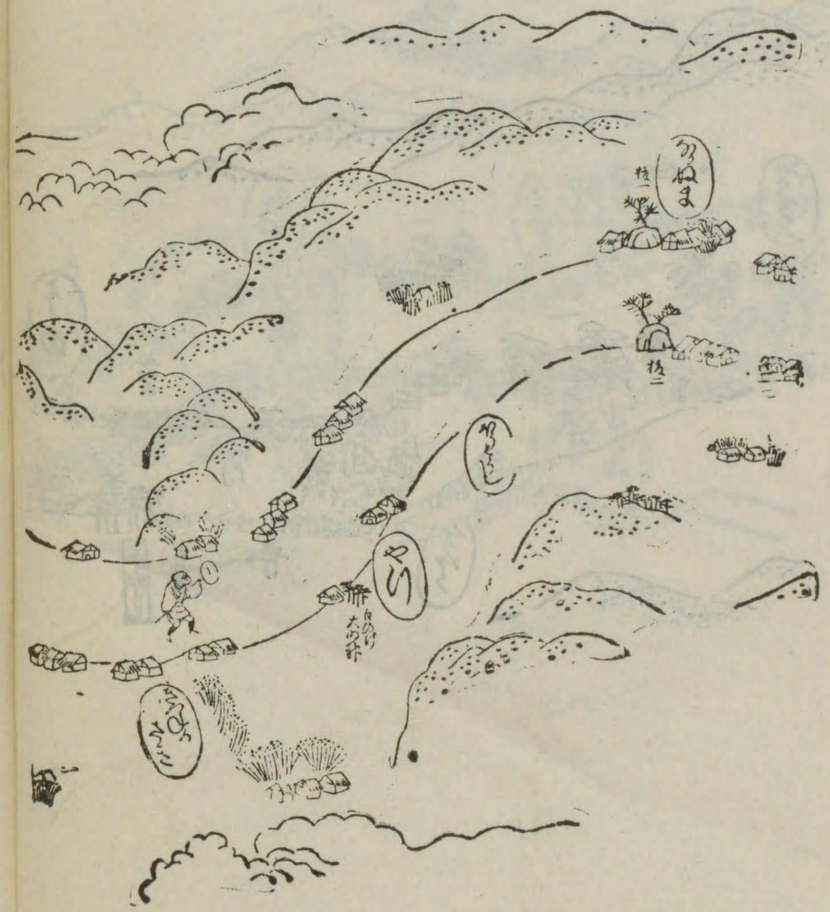

清見寺
西
貝津
一里塚松
江尻へ一里三町
三保松原



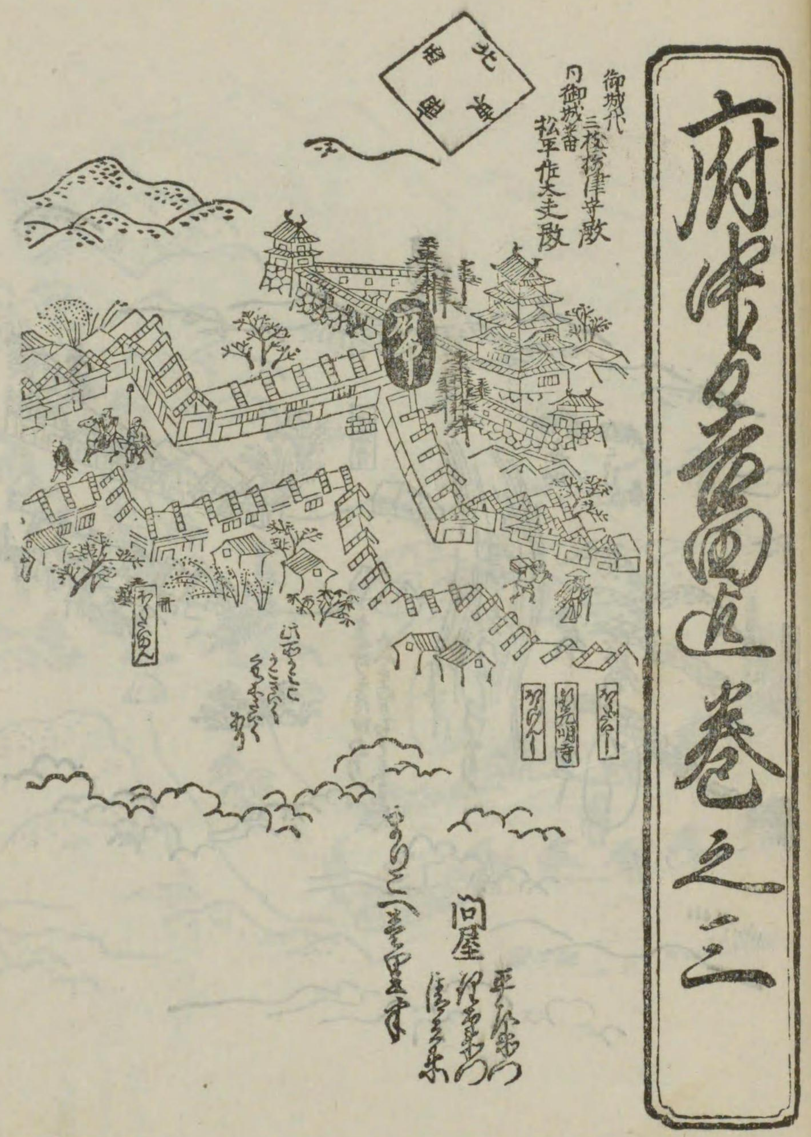


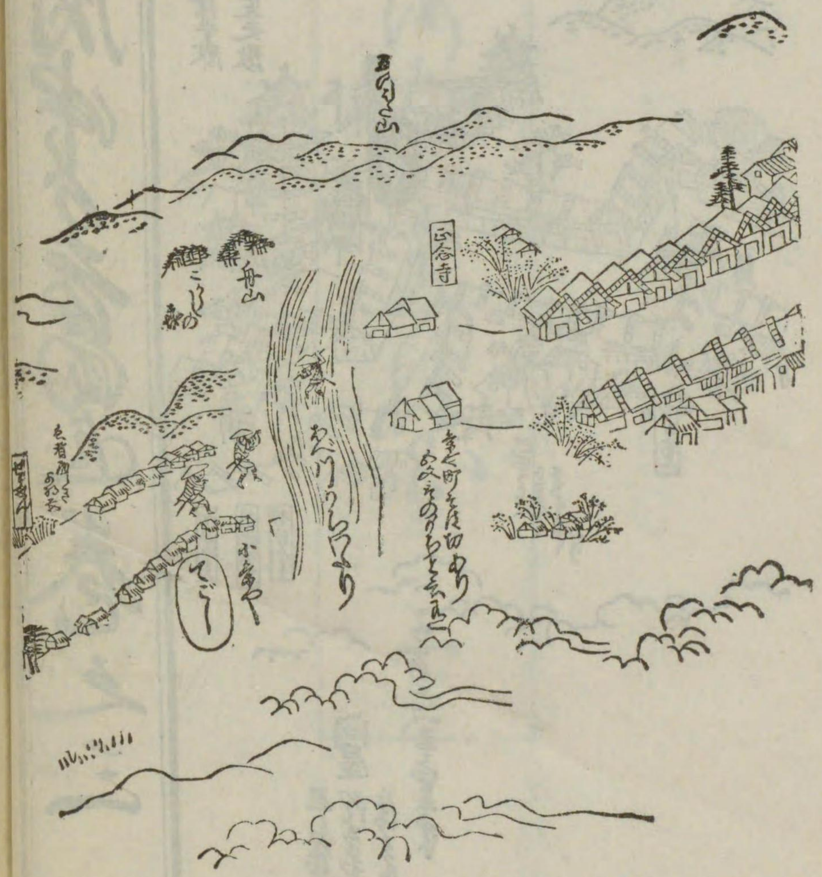




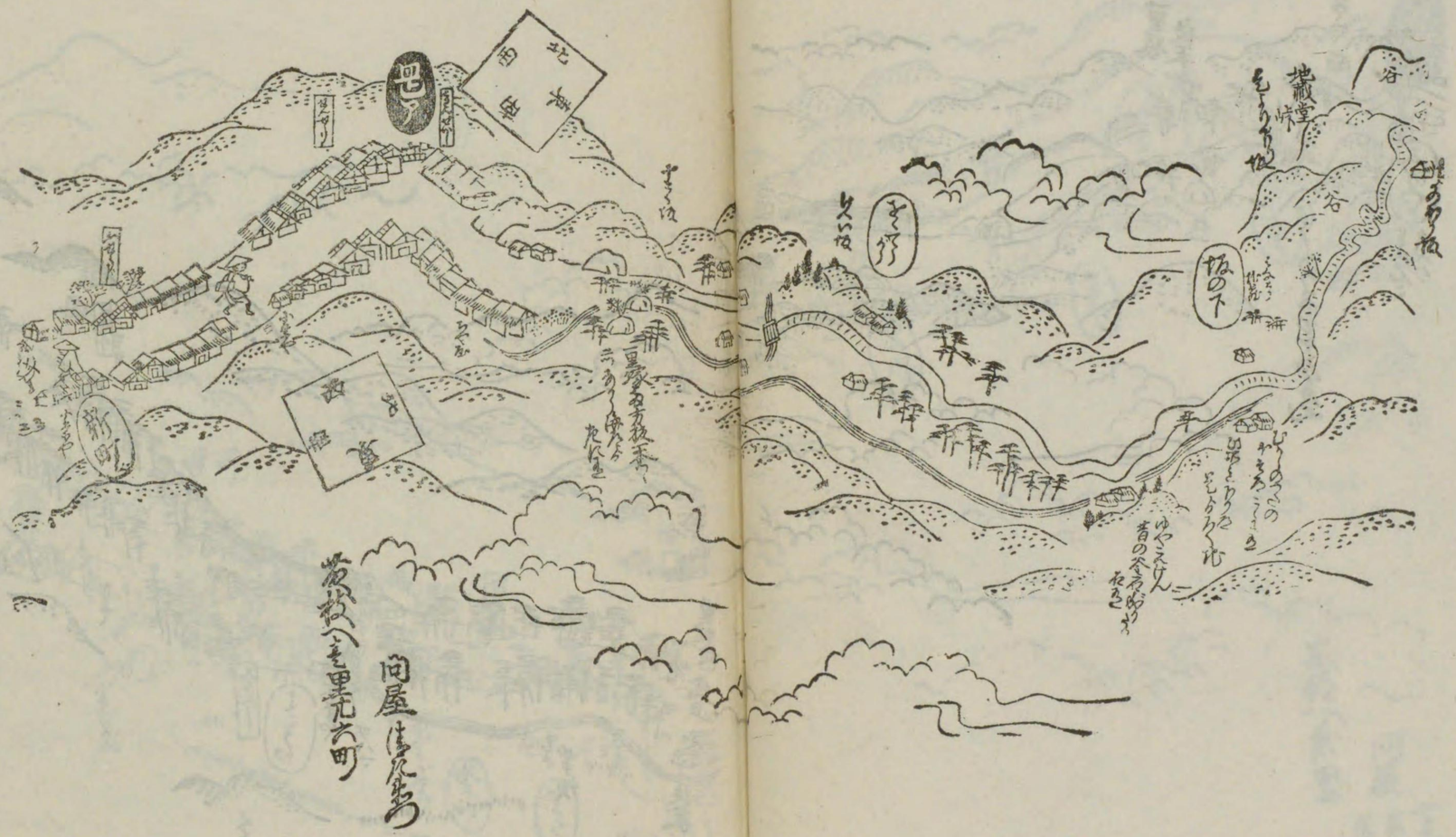


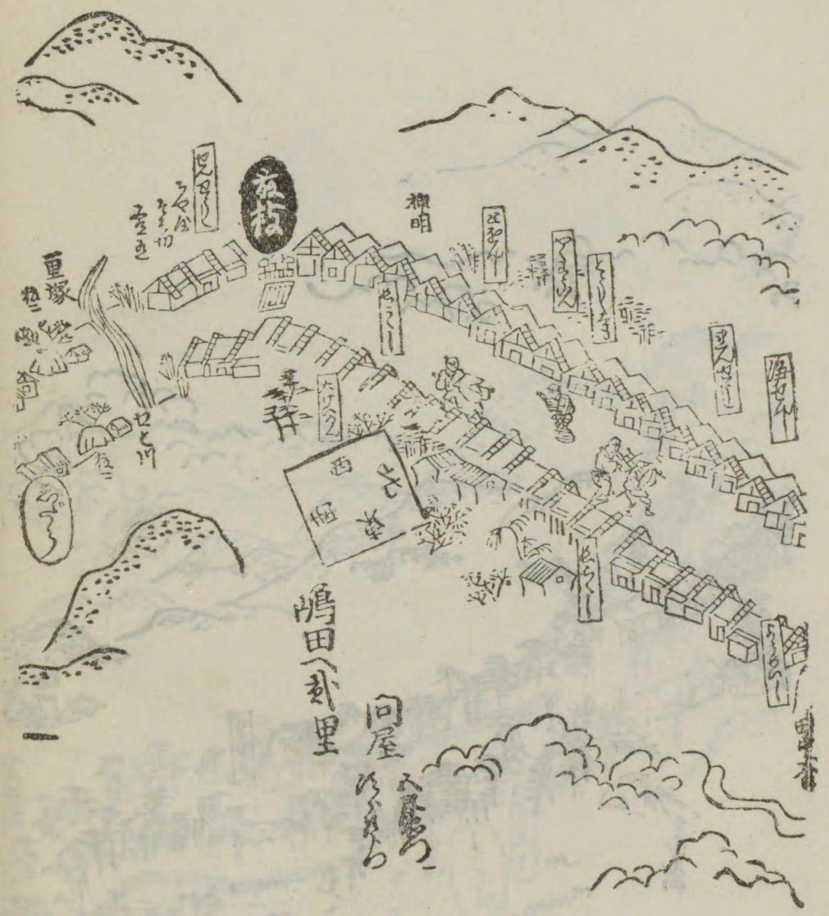
東海道分間繪圖卷之三

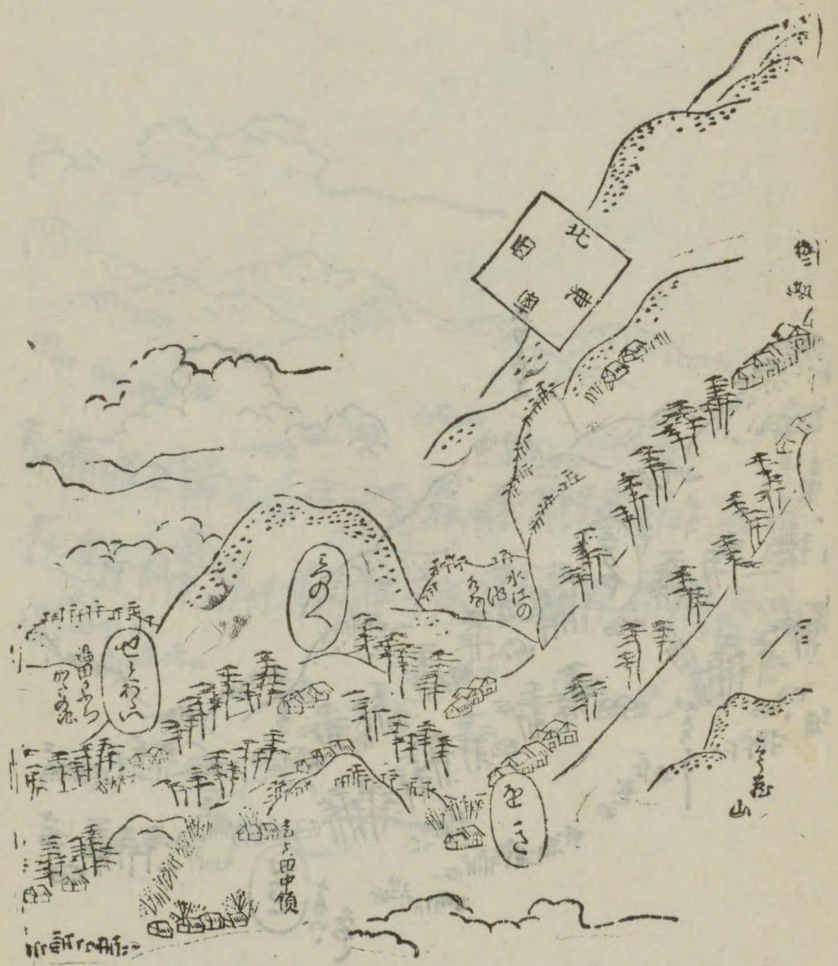


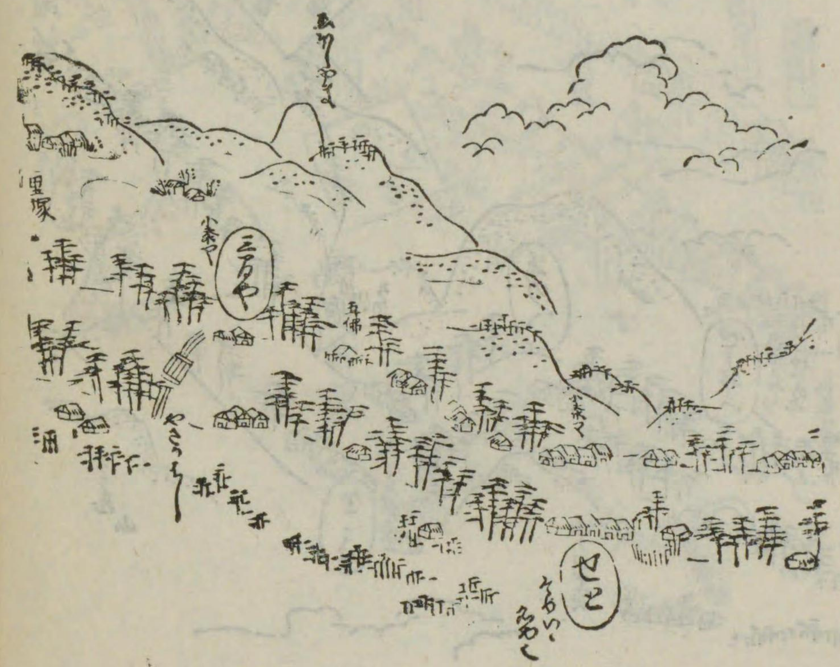


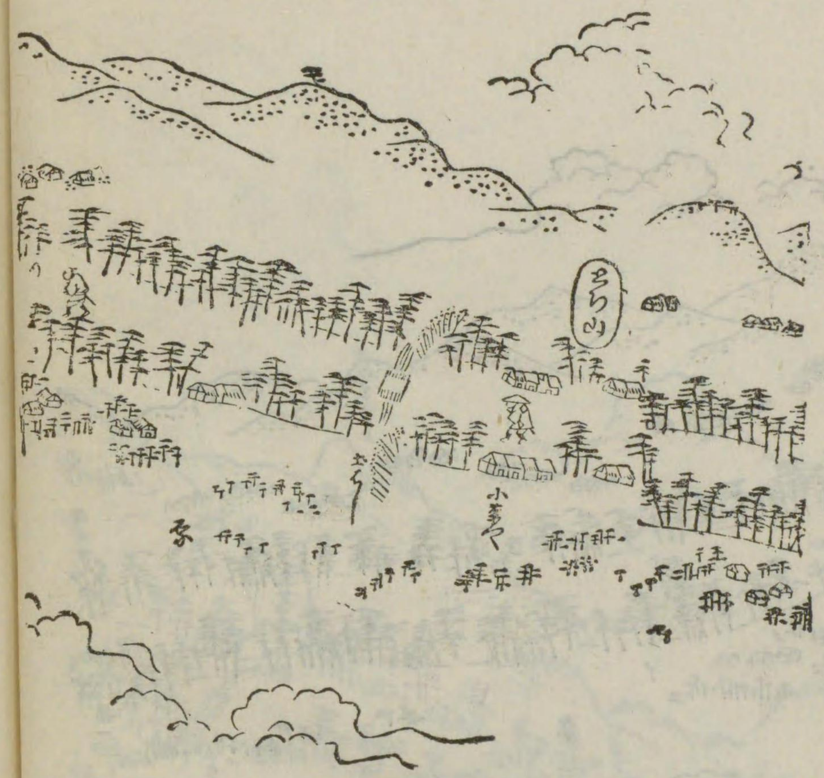
九ノ
二ノ宮
あの川
墨俣
向屋

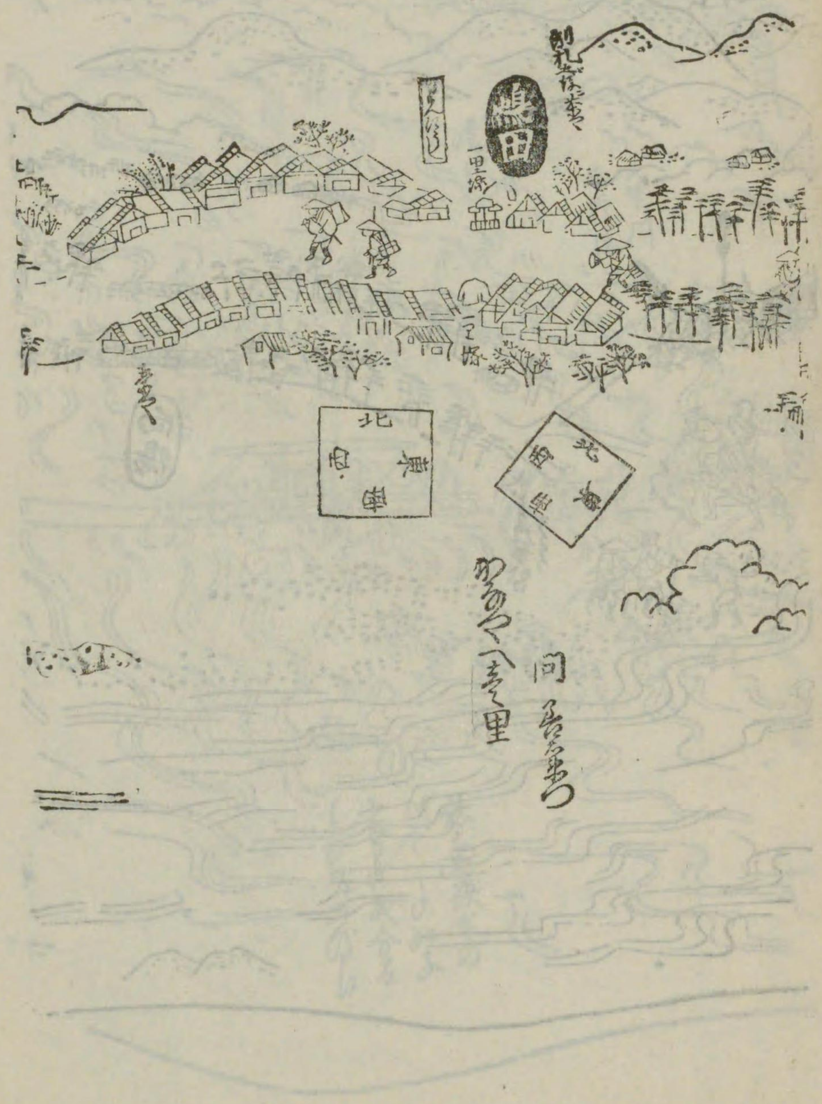

新町
谷
谷

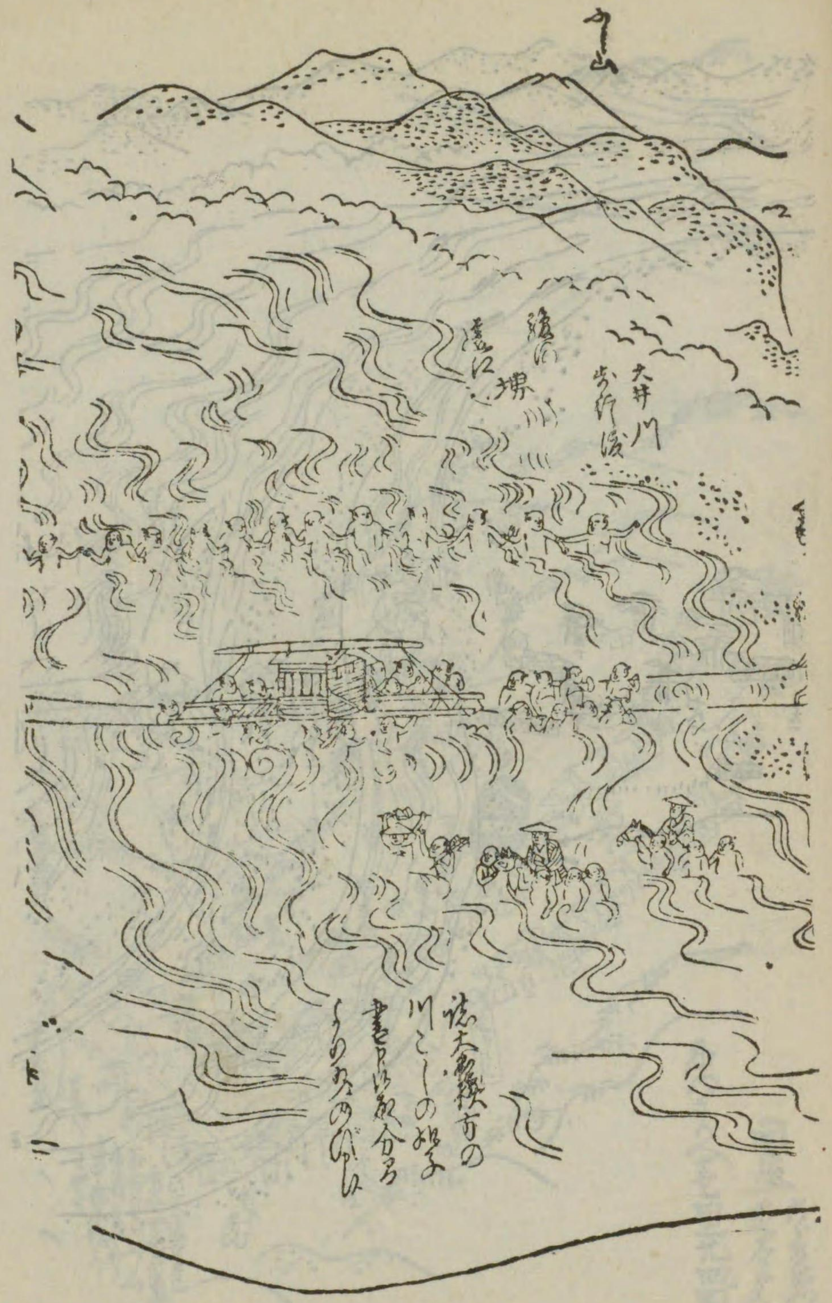

柳明
重塚
鳴田八幡里
問屋

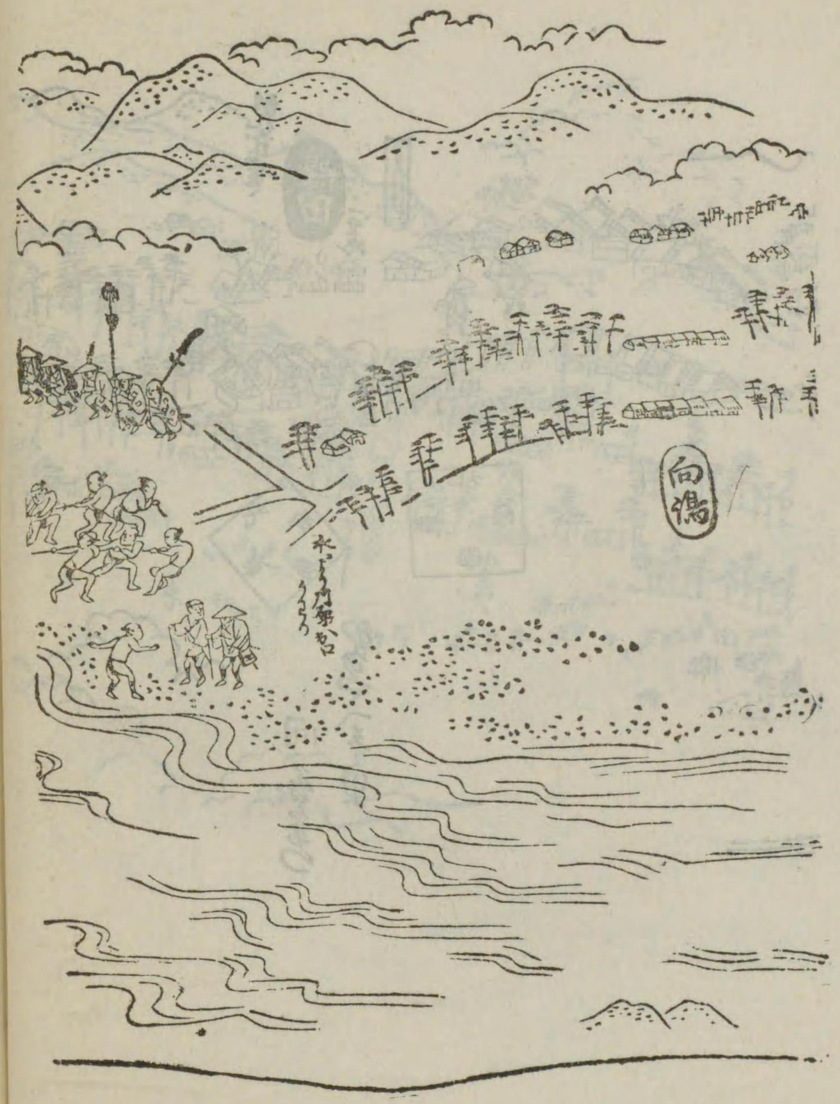

北西
東西
水江の
田中領


三方ヤ
セヒ

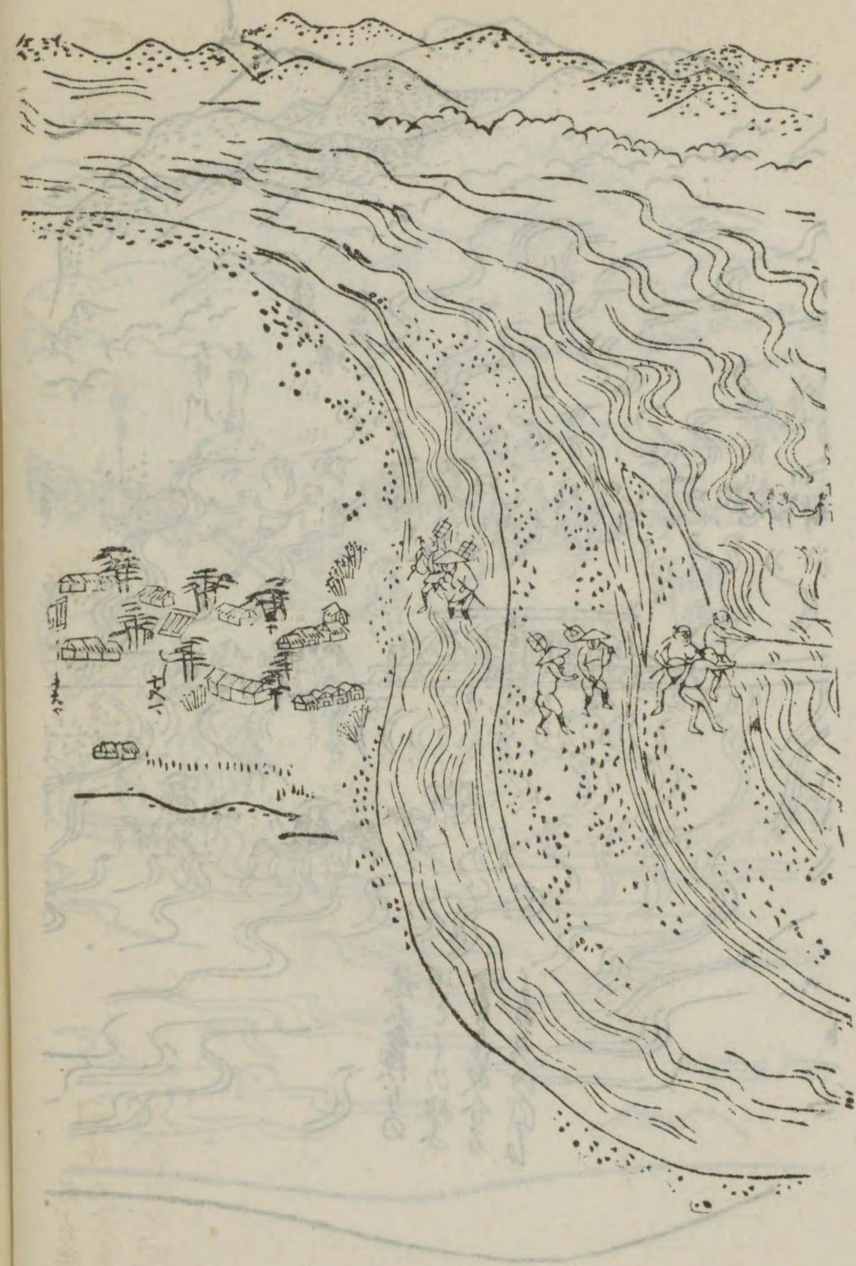


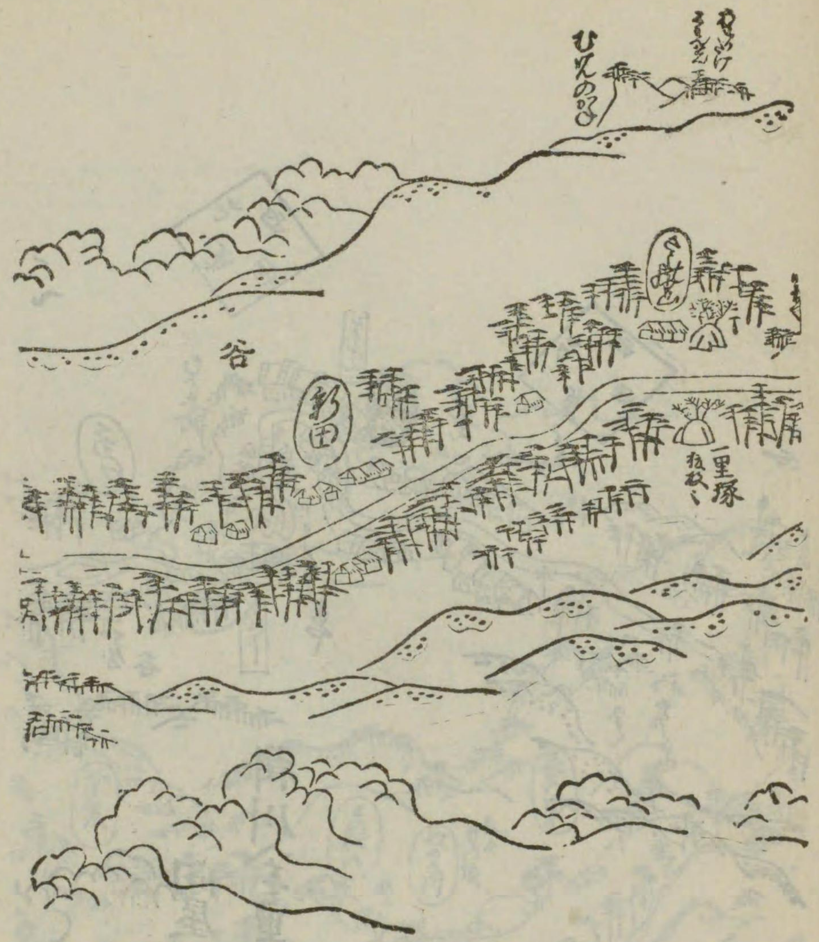


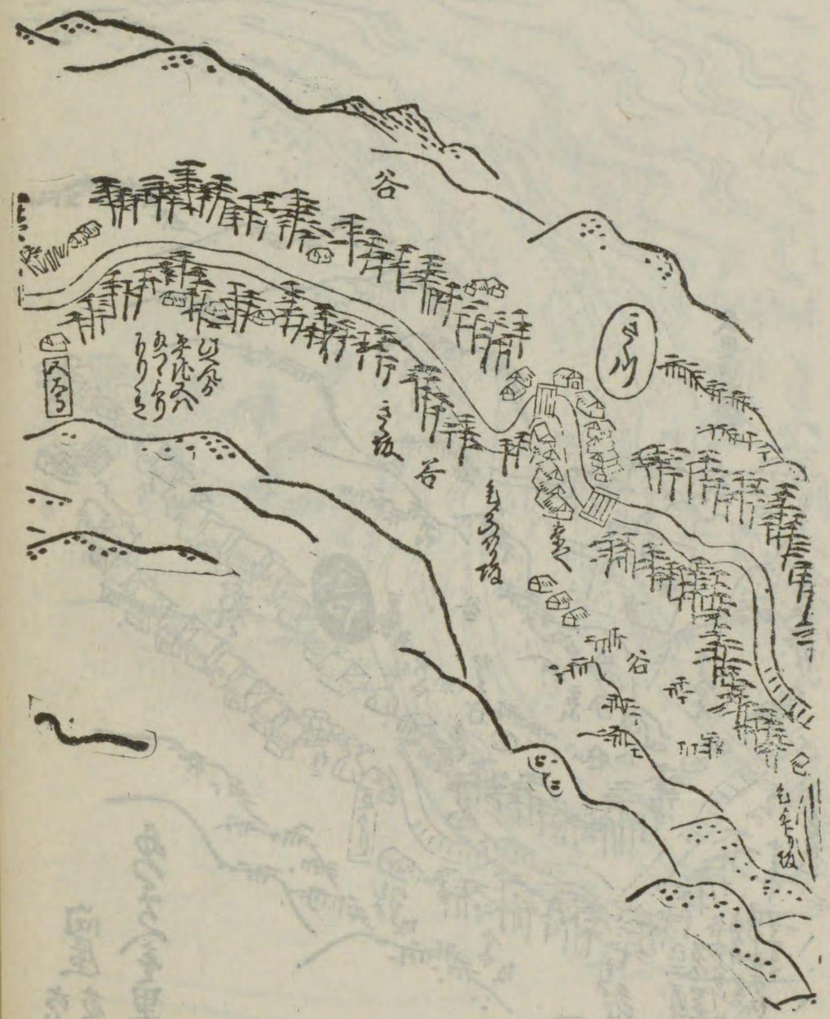

大井川
遠江
駿河


向島

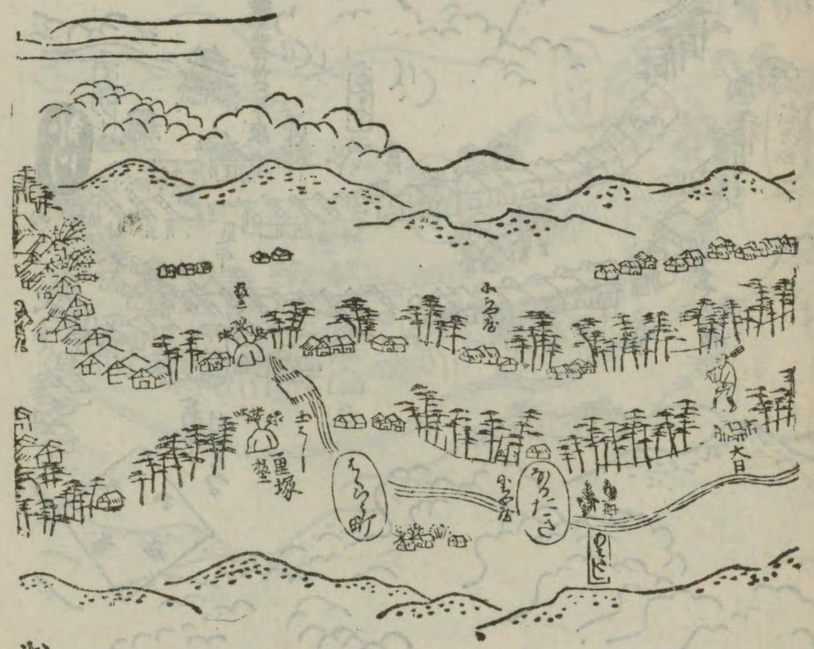
武田信玄殿
谷
向屋

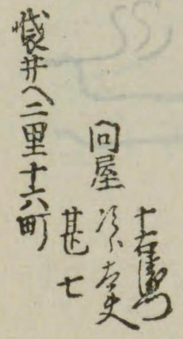


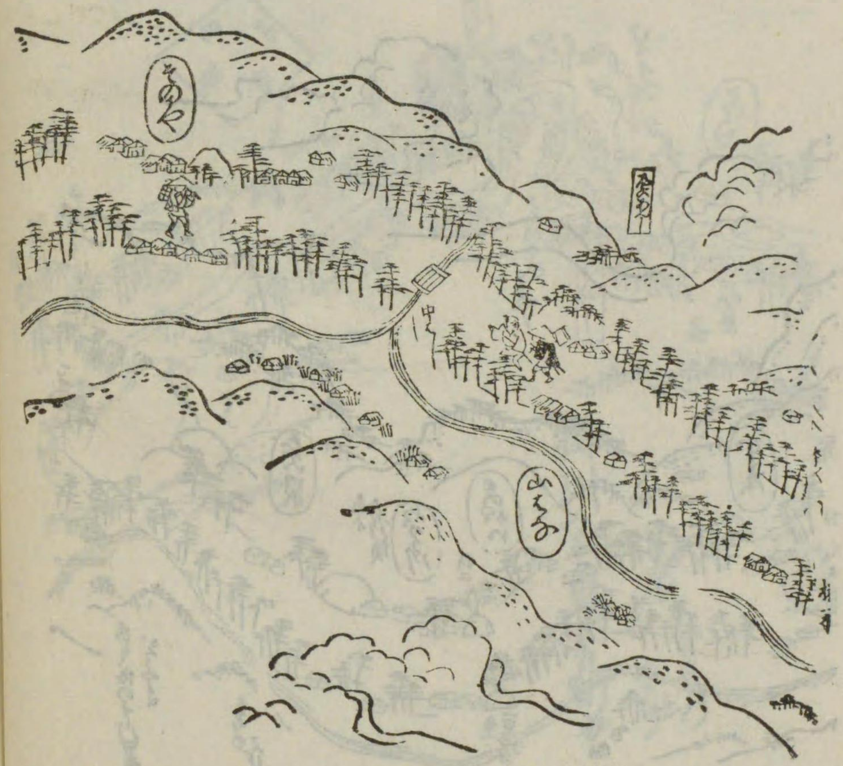

谷
一里塚

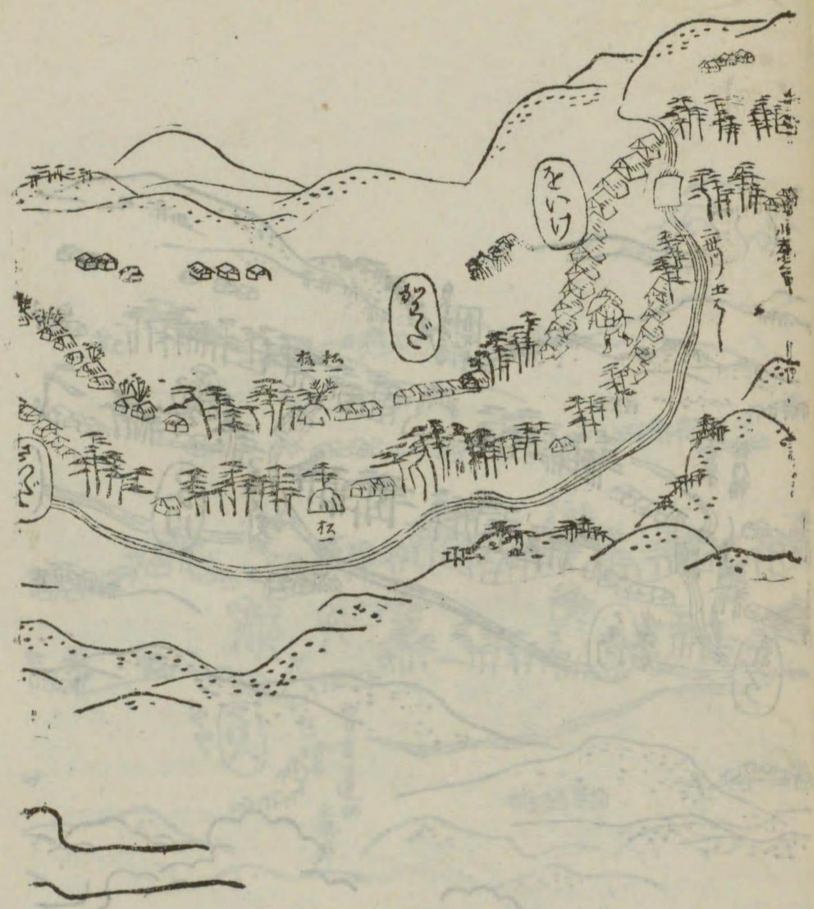

谷
谷
谷

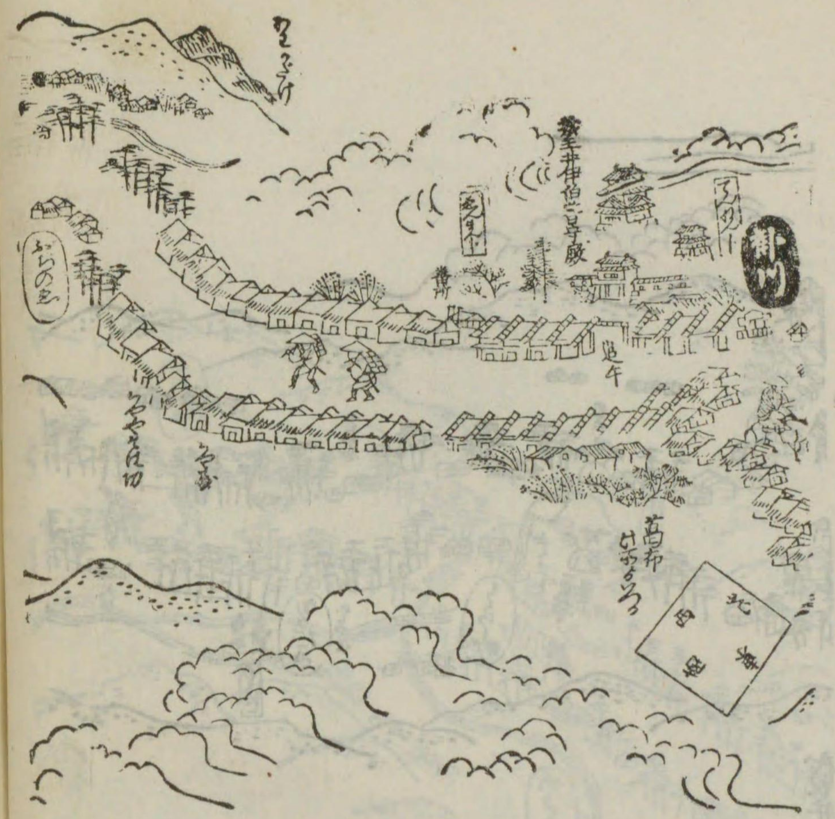
掛川へ壹里九丁
問屋
金左衛門

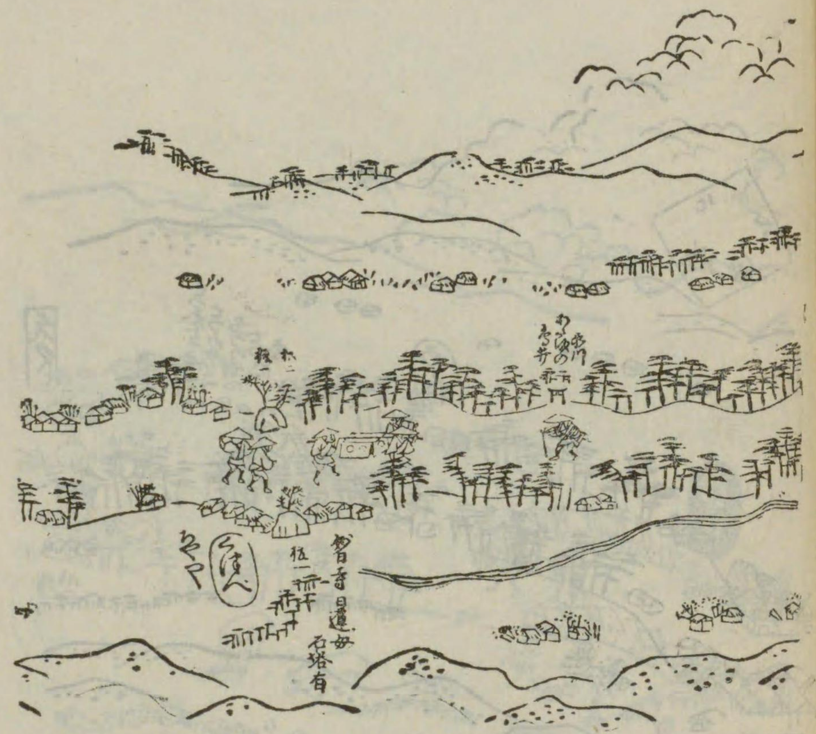


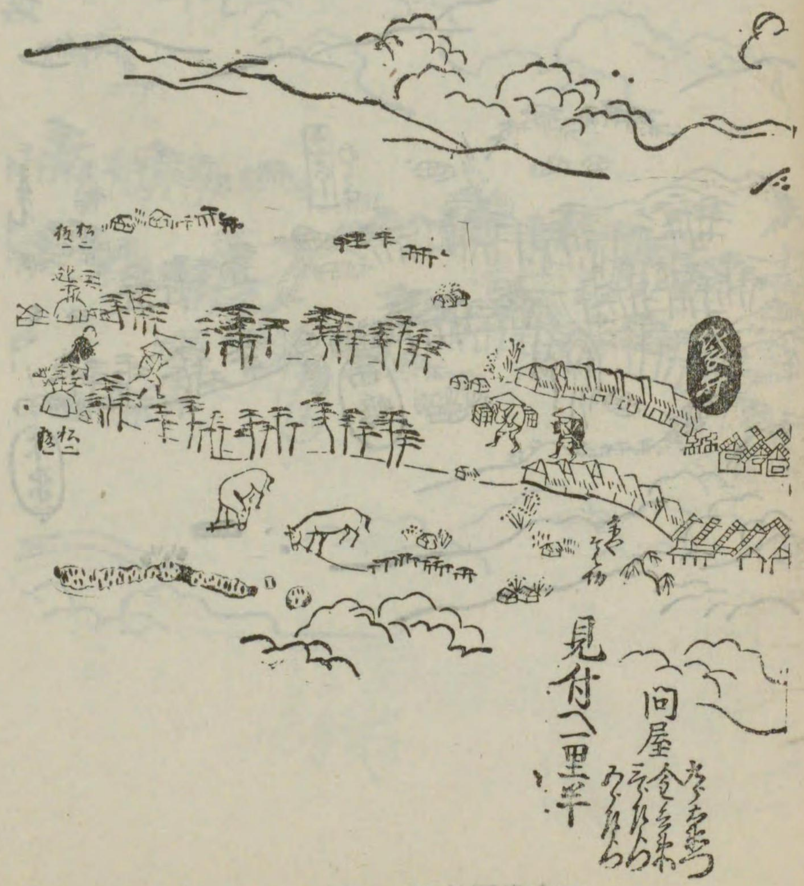

戸井へ二里十六町
問屋
七

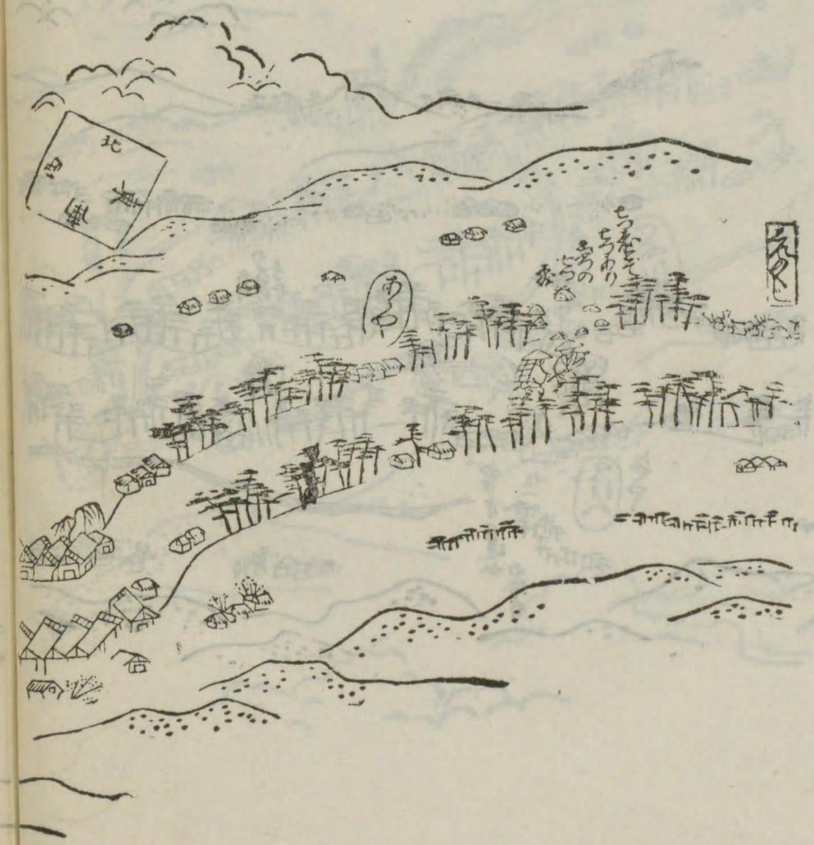


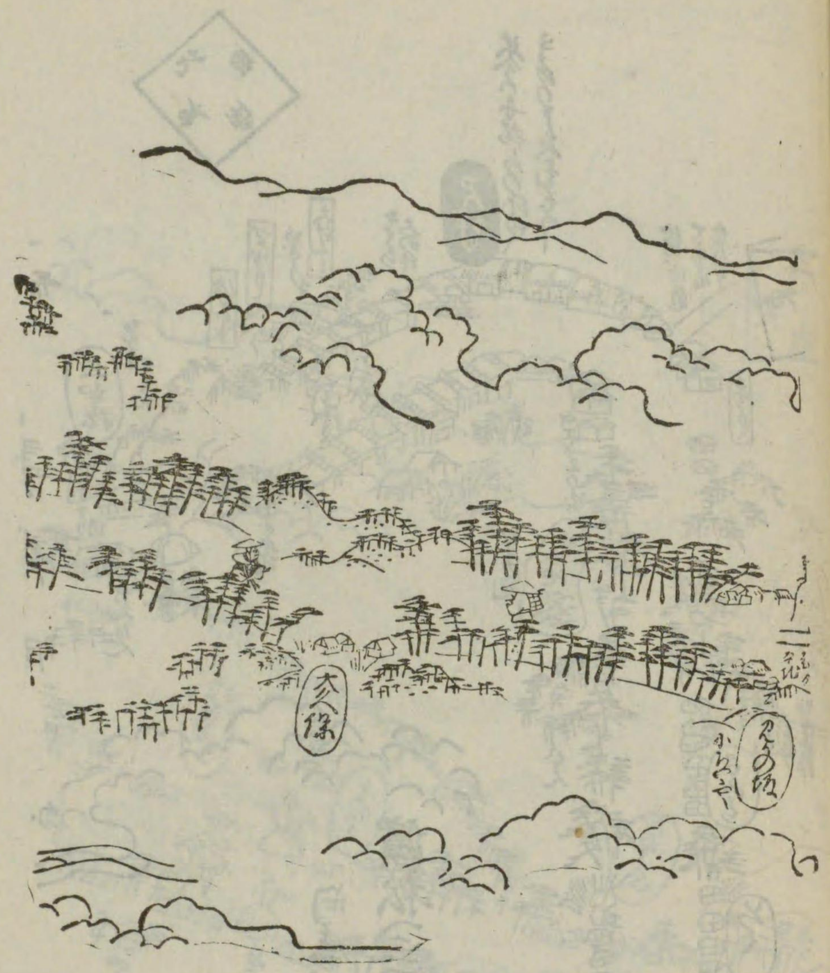


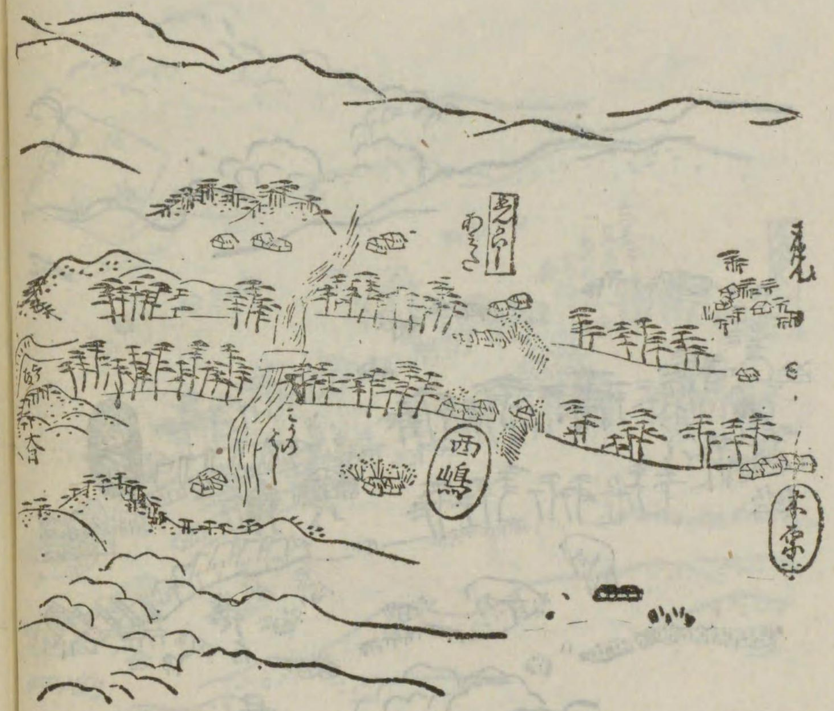


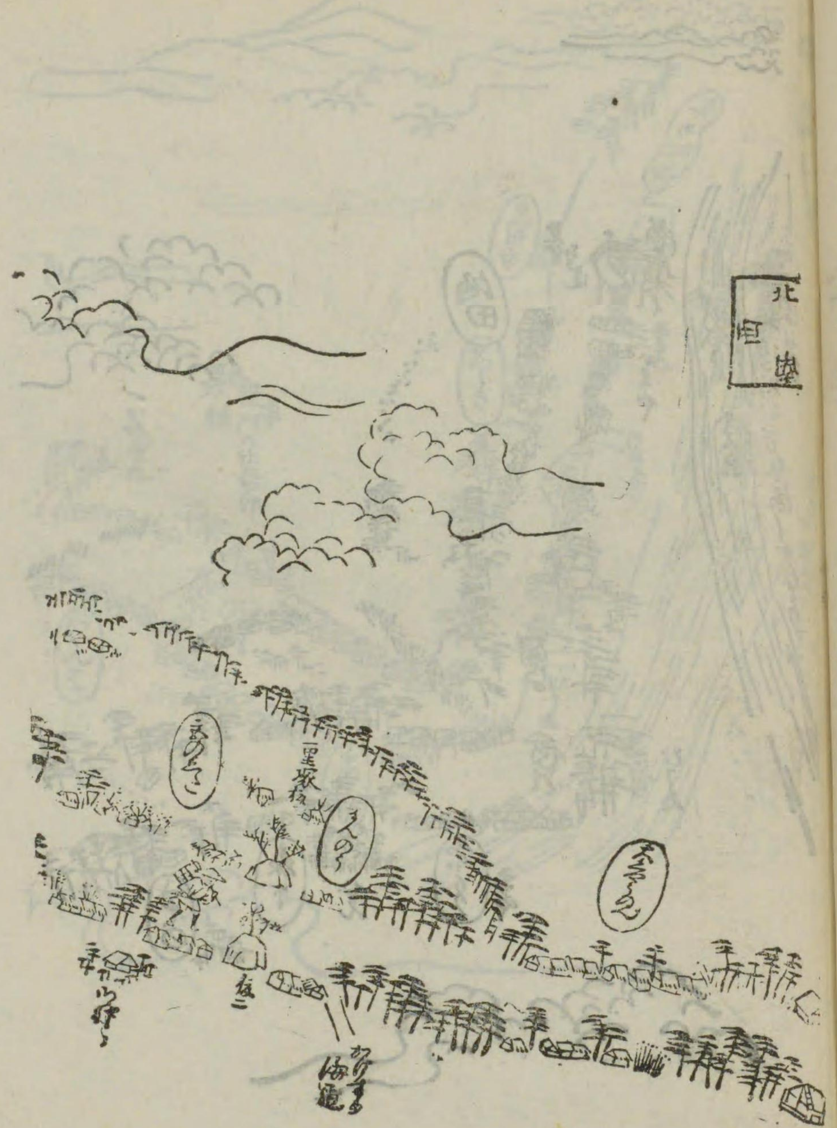


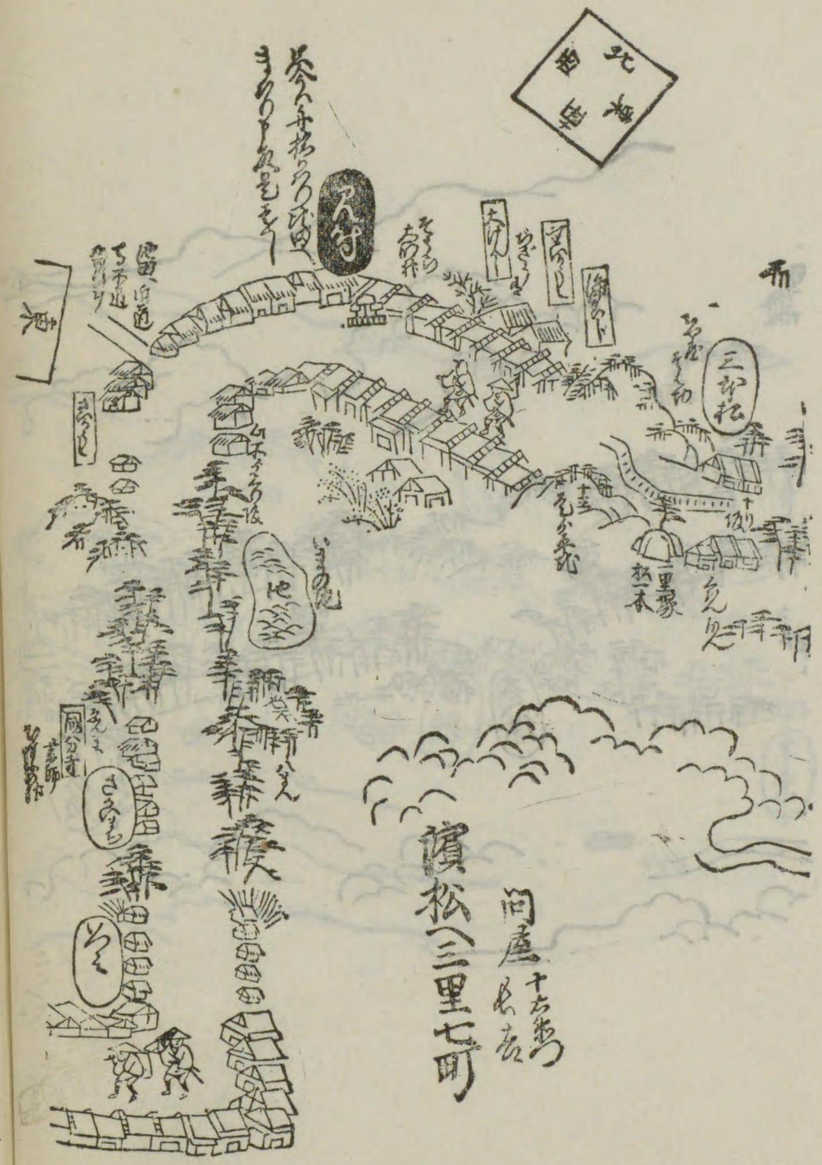

見付へ一里半
問屋

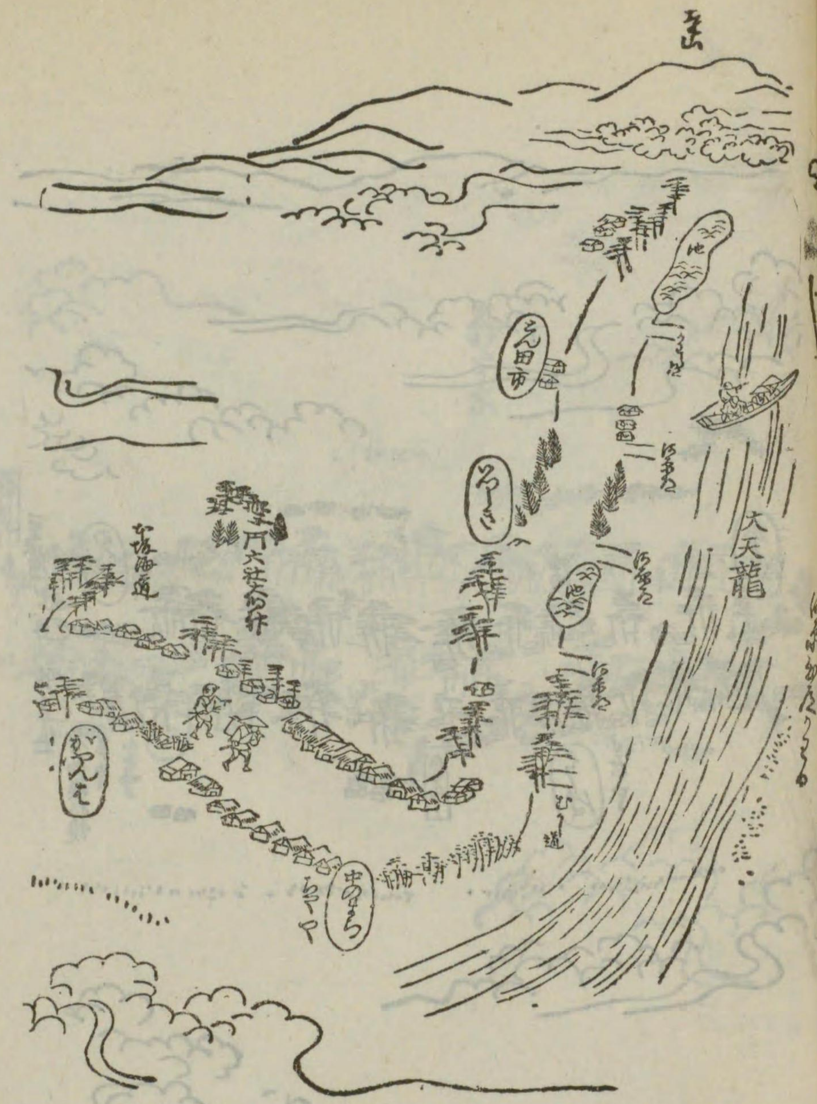

北
南


大久保

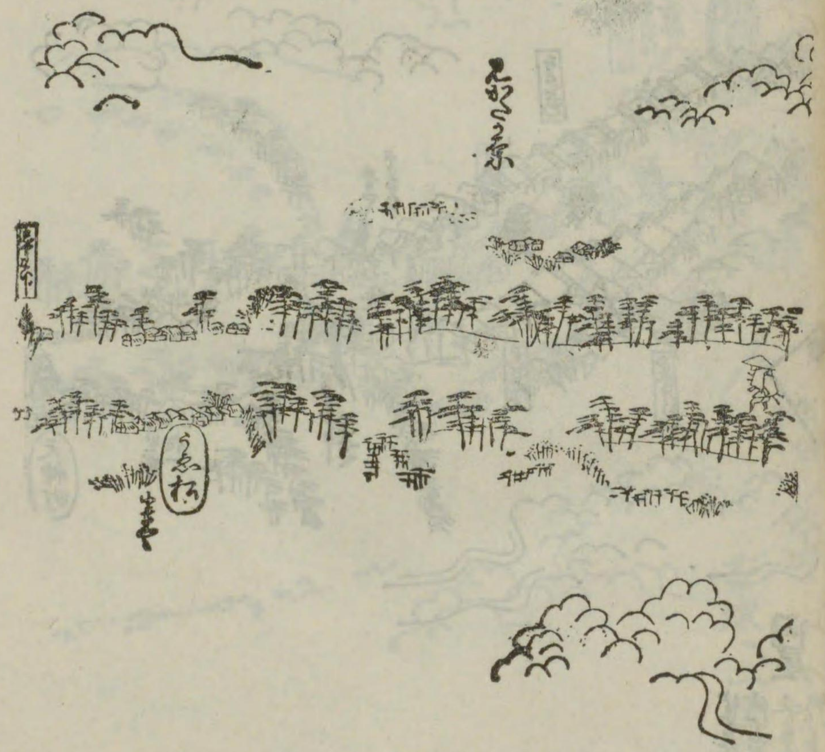

西嶋
本宗

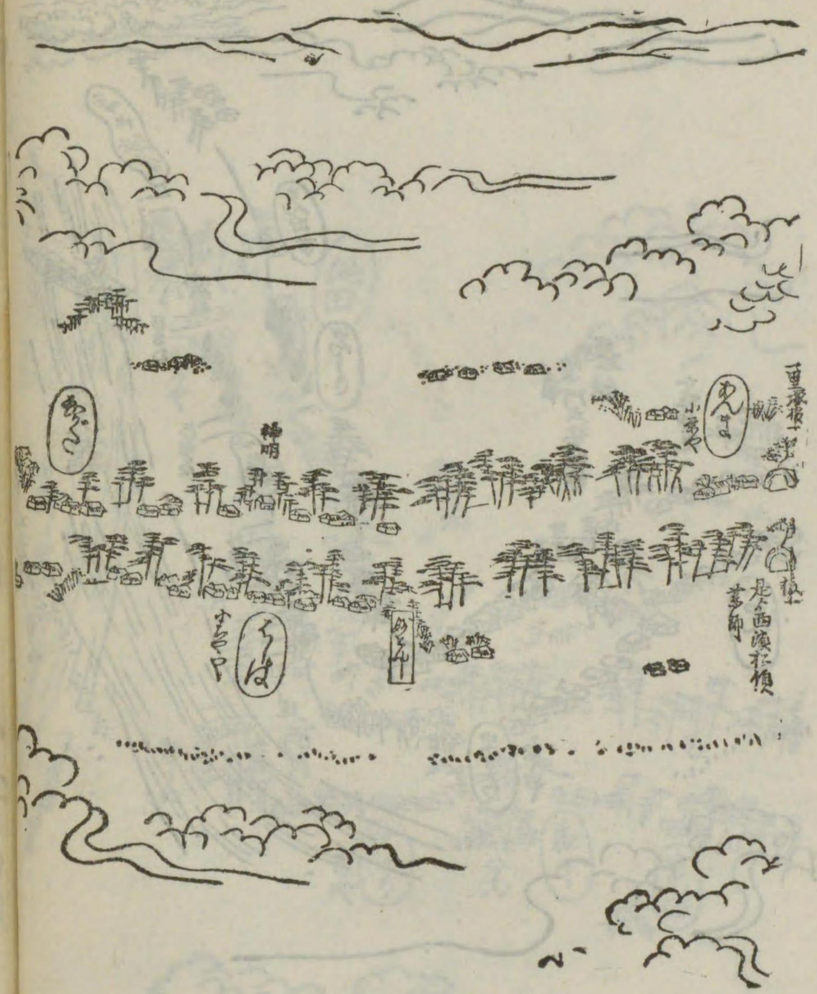


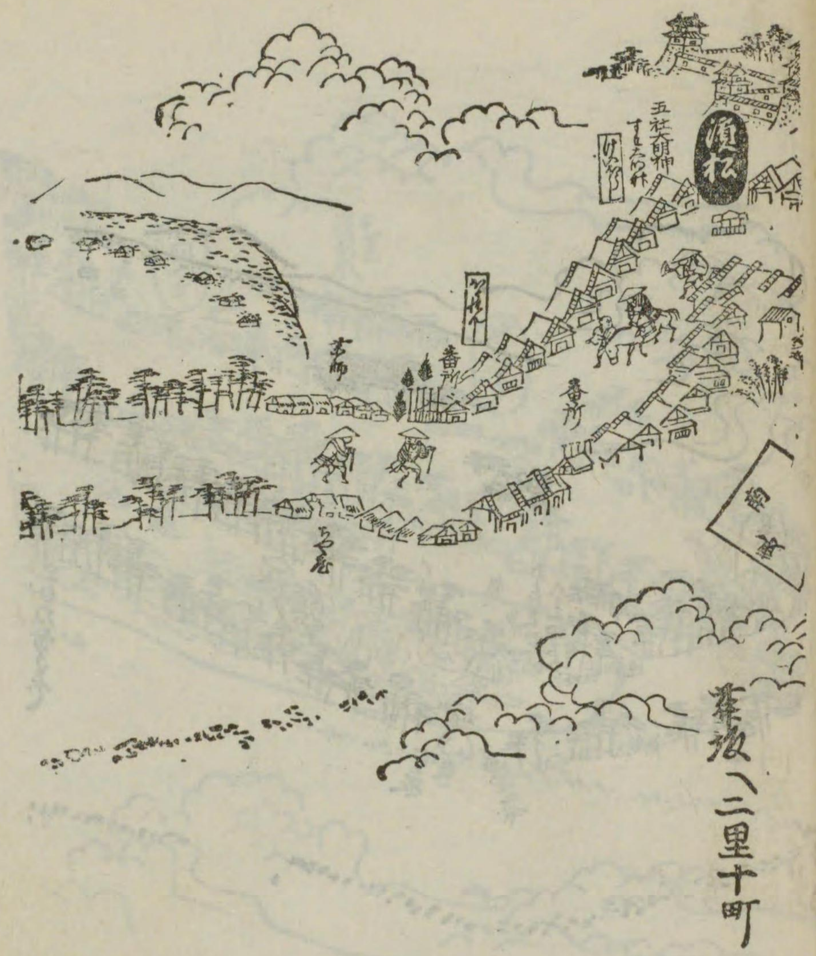

濱松(三里七町

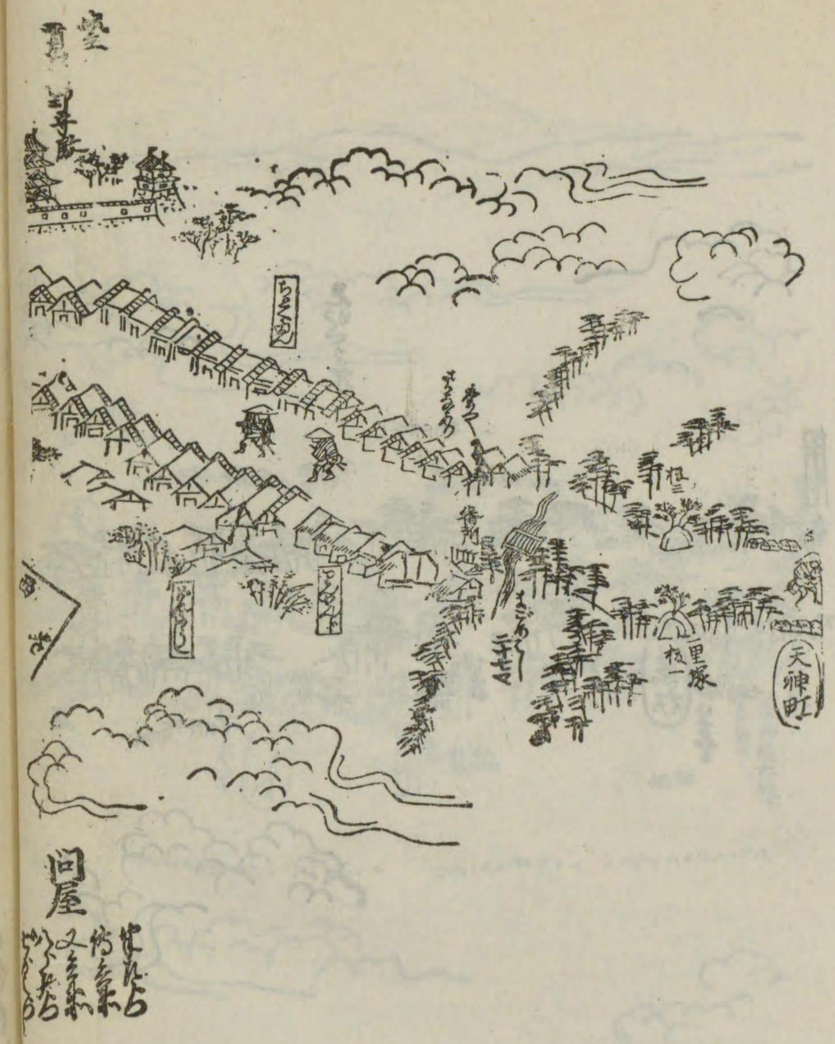

大天龍
池田
こん田市
ひらき
中のまち
かりんと

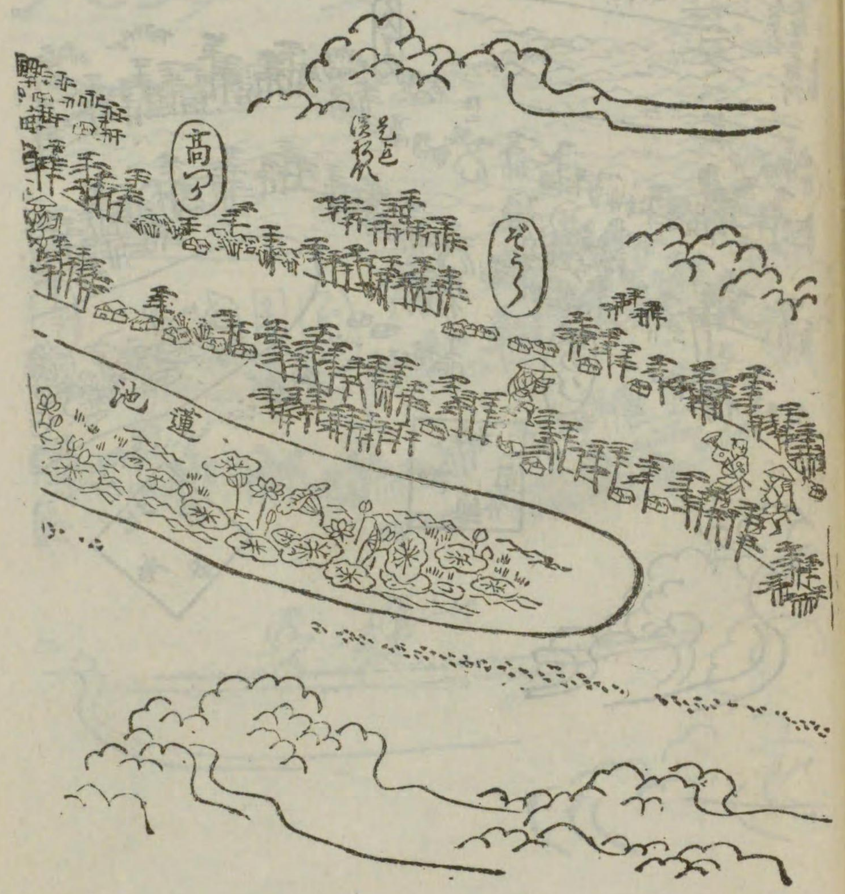
池田
小天龍
舟橋
氷なり
家下
えの

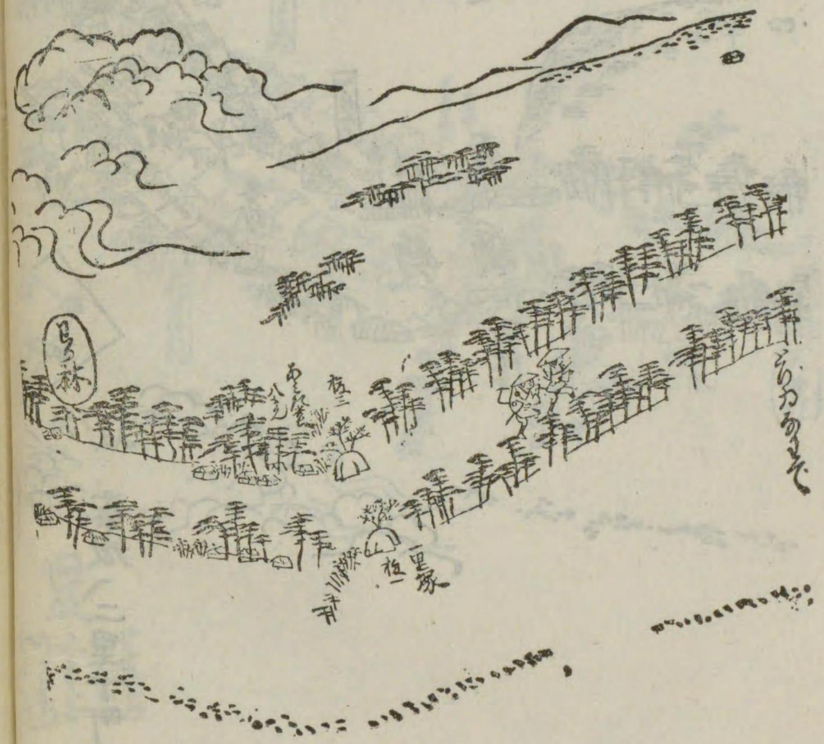


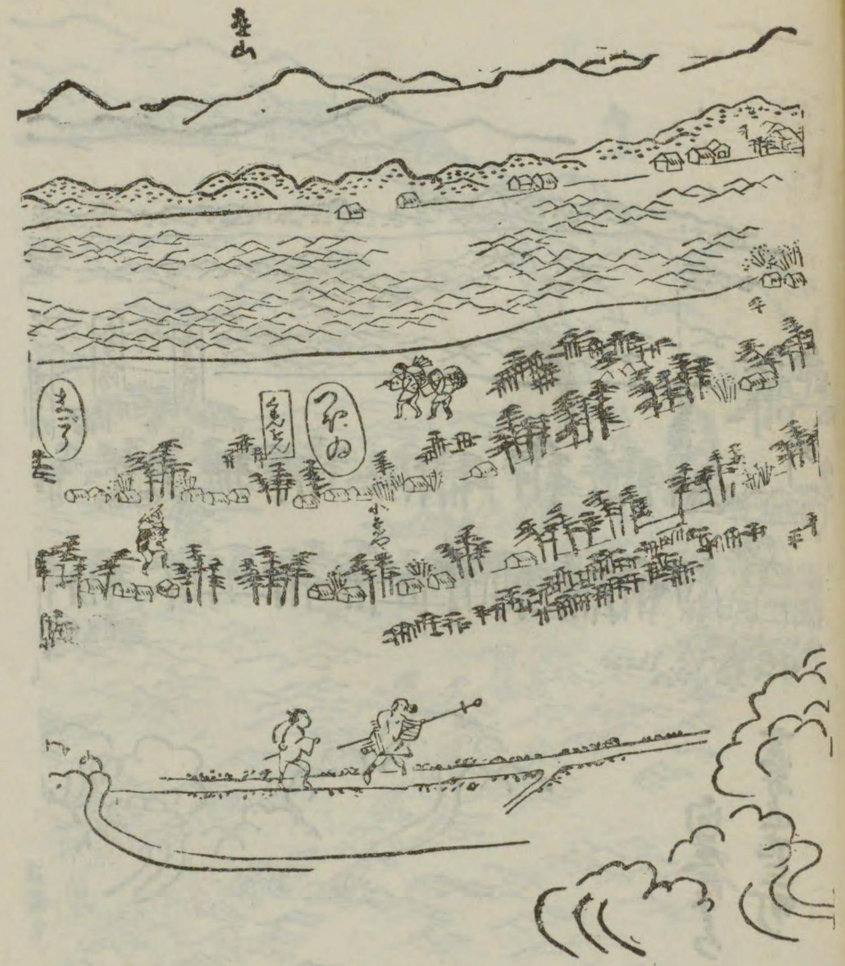


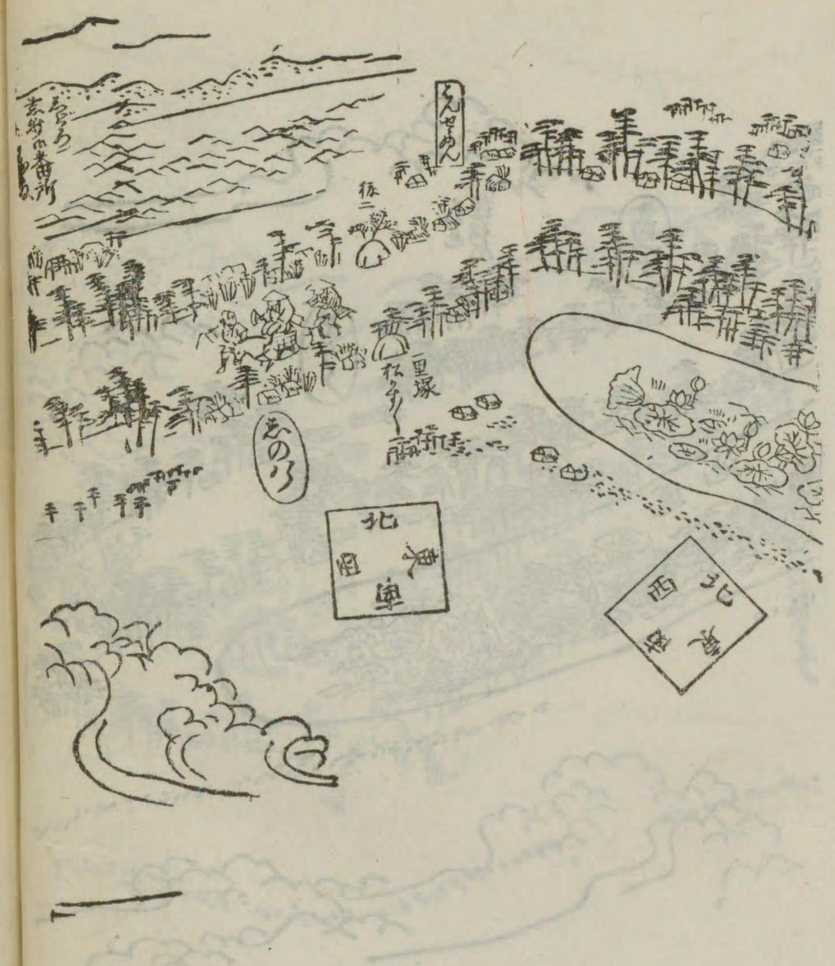

五社大明神
須賀
番所
番所
市場
ちゃや
御茶屋
袋坂
二里十町

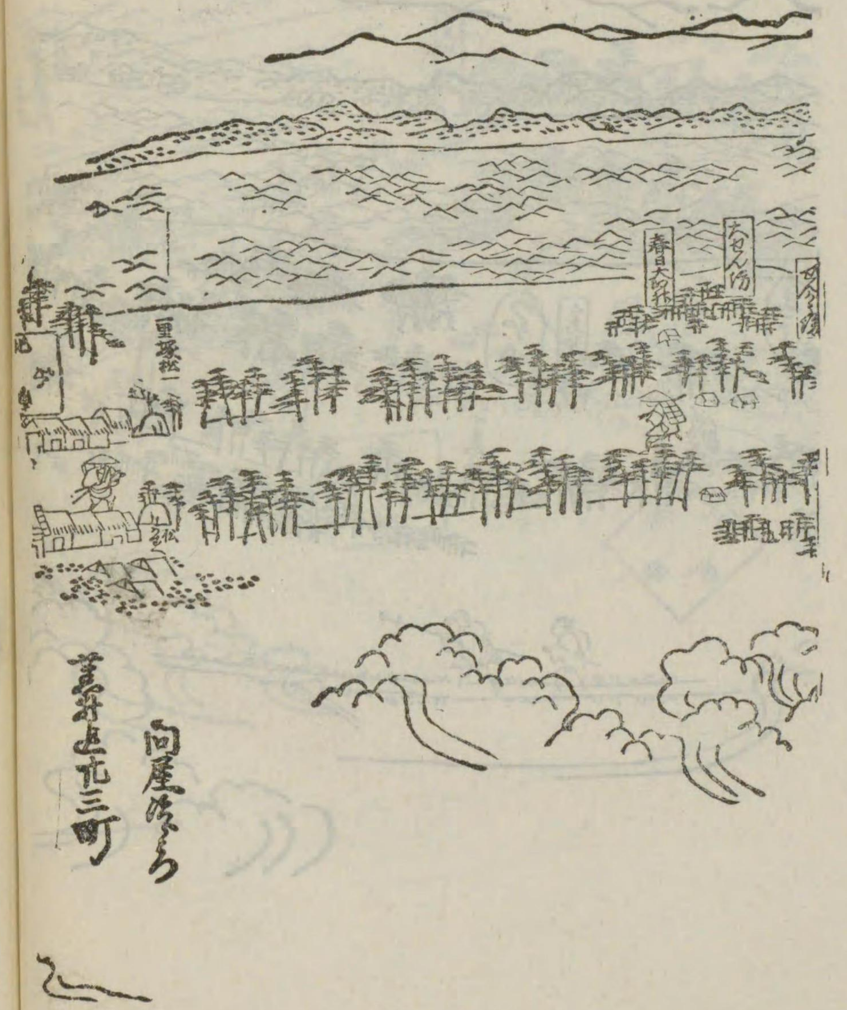

ちゃや
番所
一里塚
天神町
問屋


高野
ぞうり
池蓮

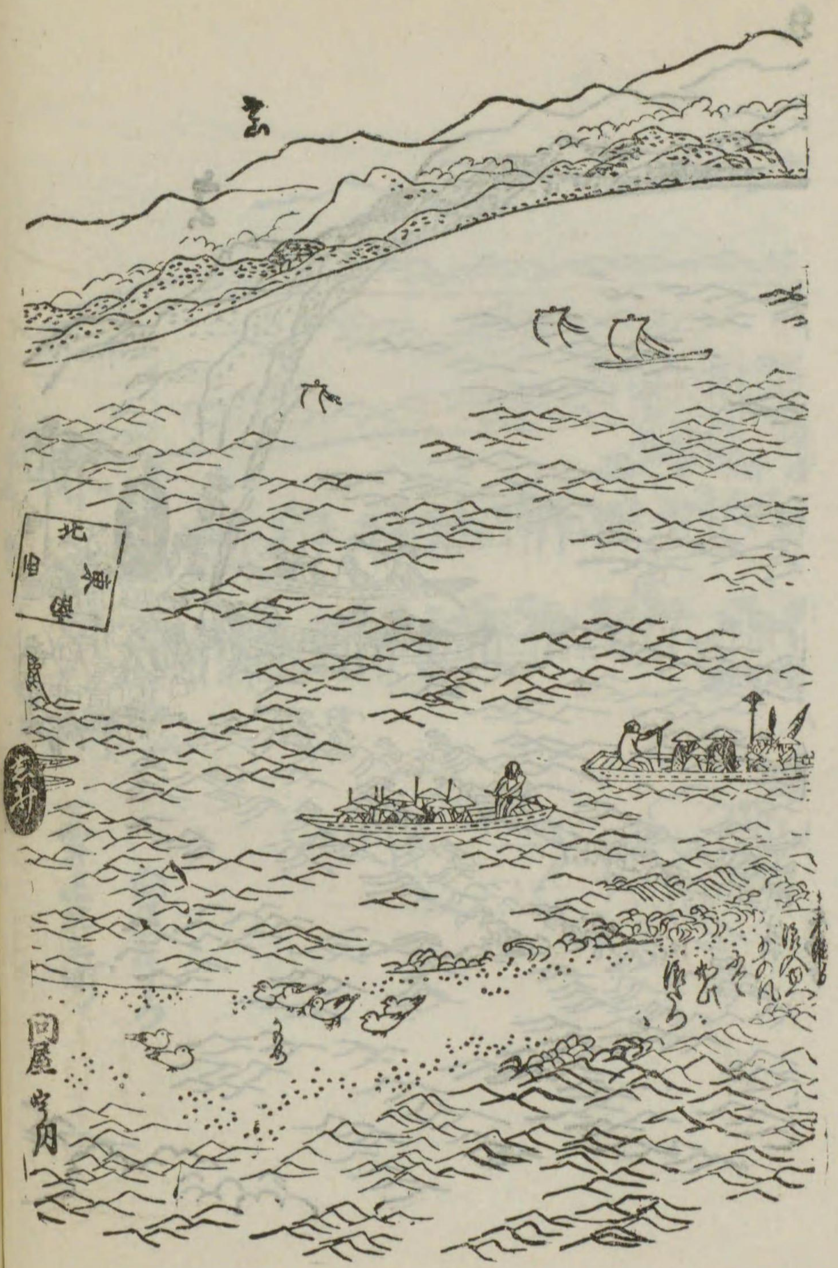

昌の林

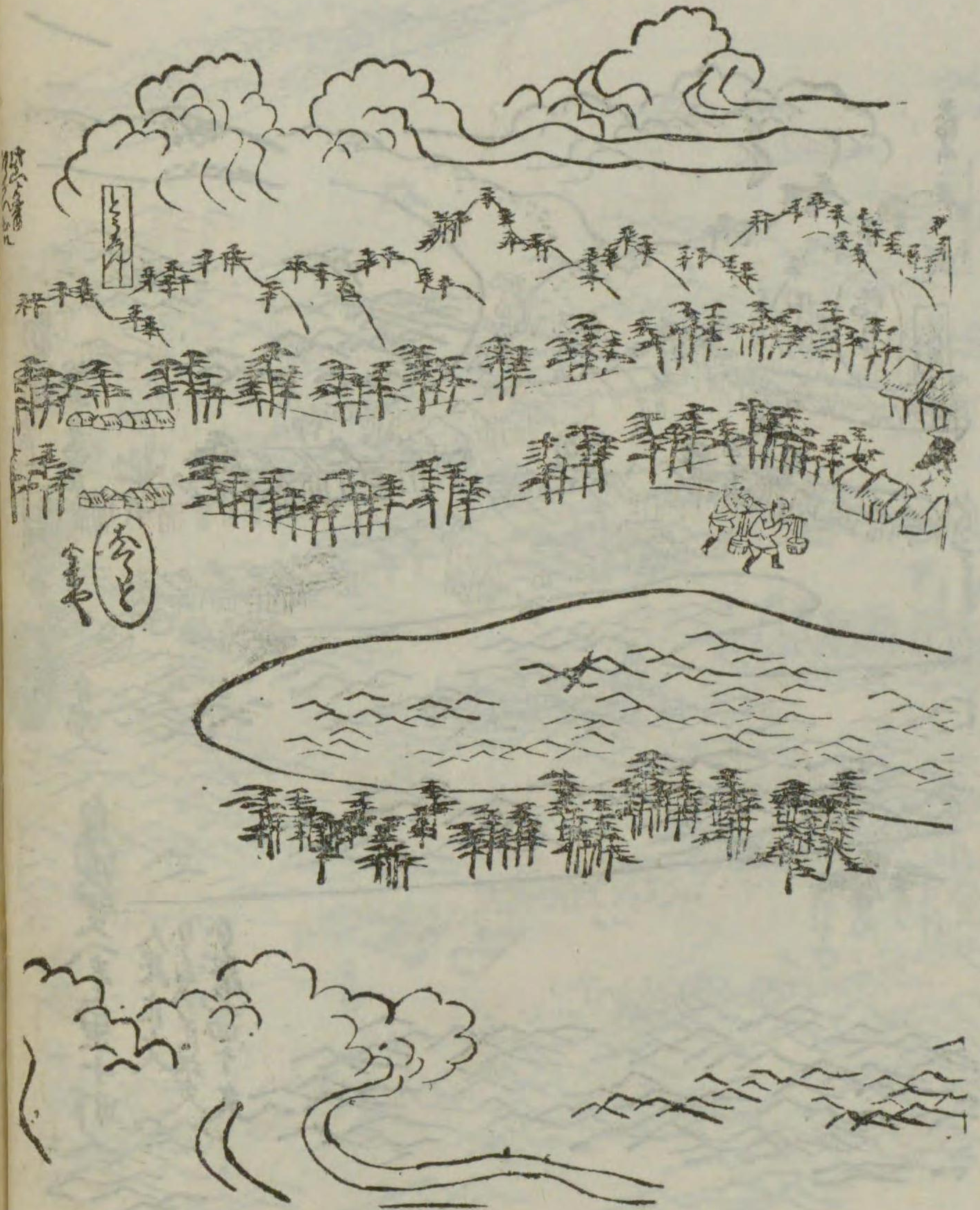


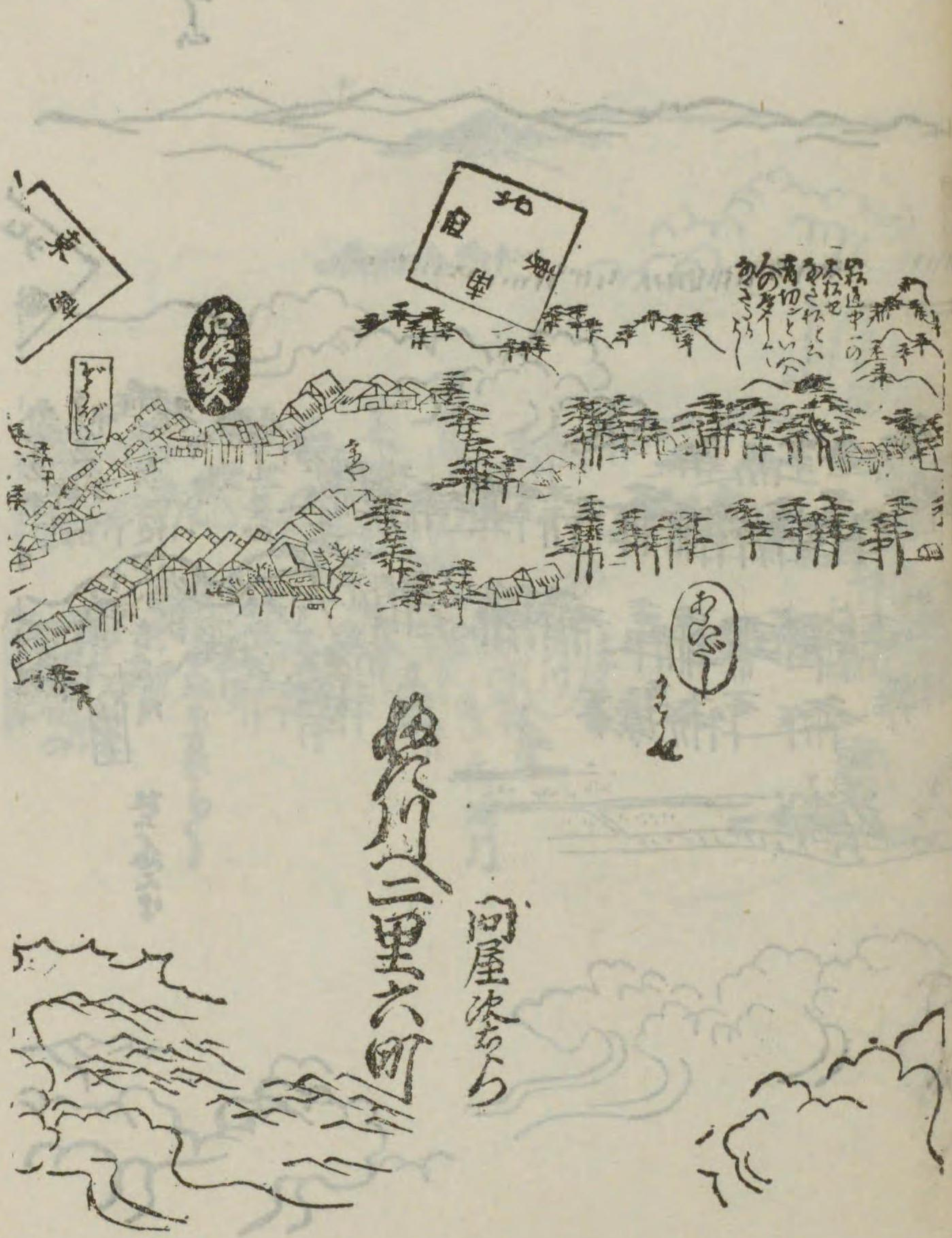

北海道
東海道

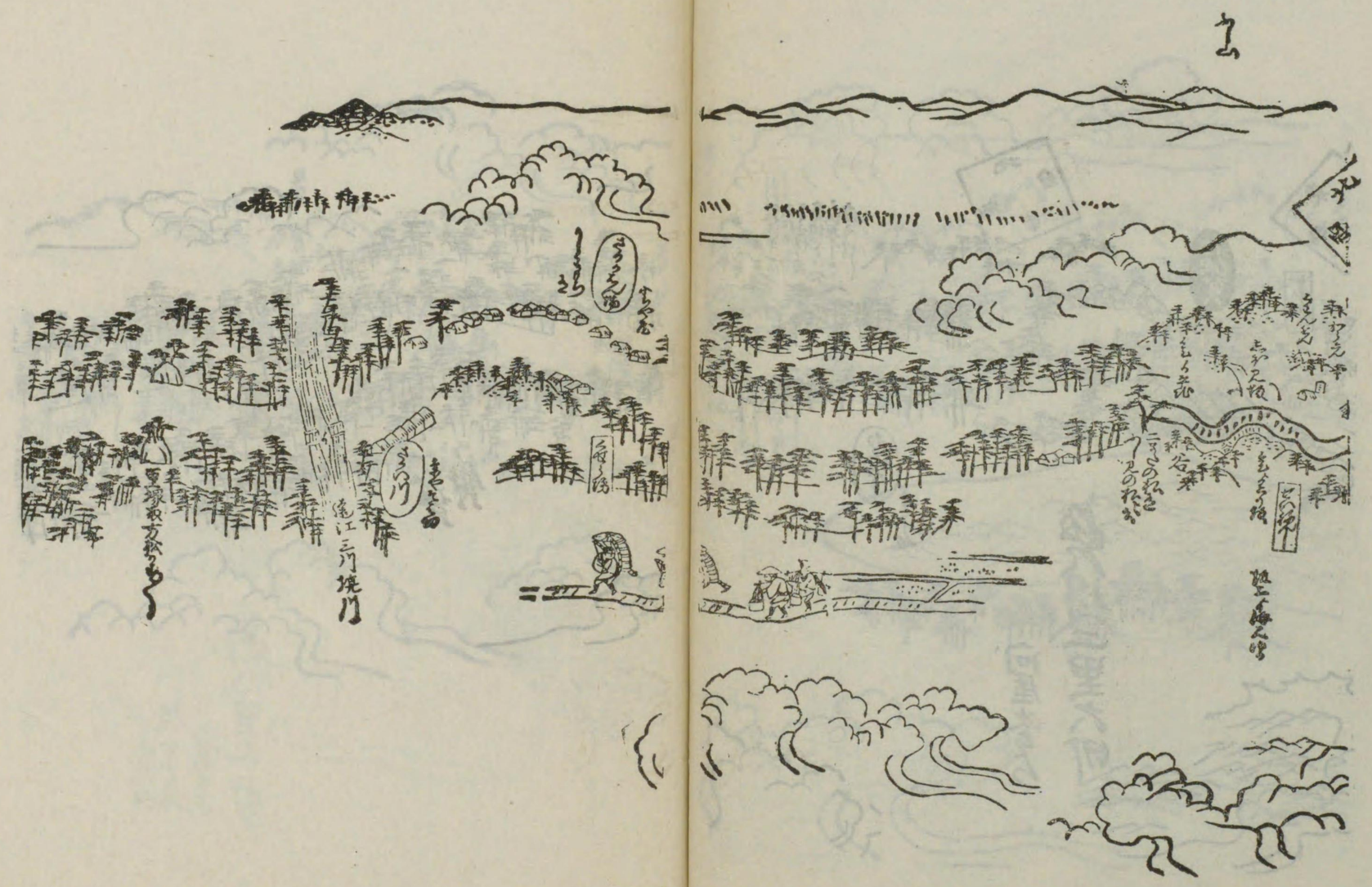


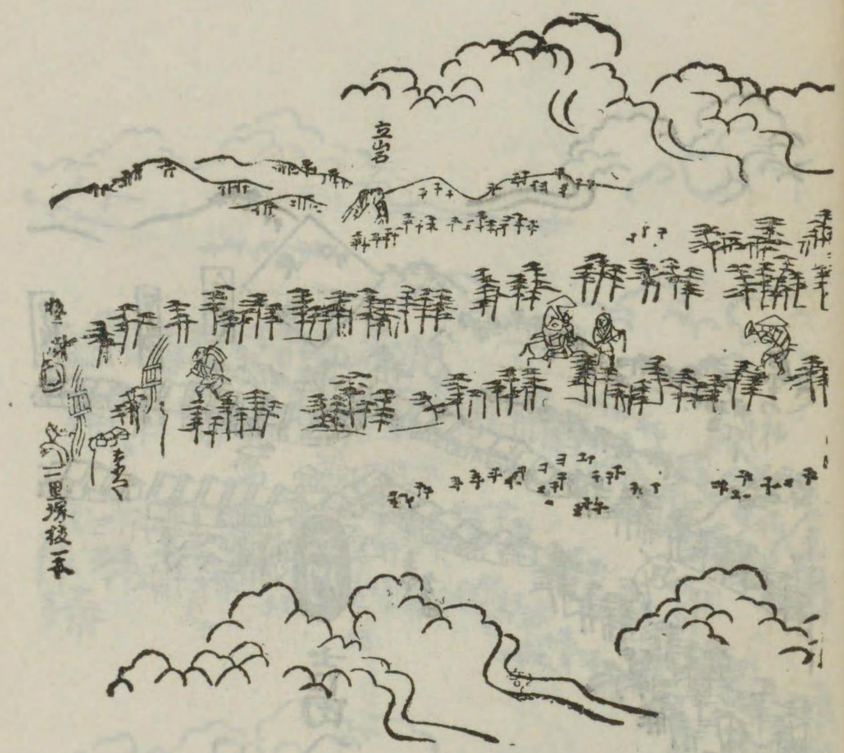
天神山
沢入村
御茶屋
松平長門守
御番所
舟場
自須賀八丁里十町
人足代文
うまの代六文
かごの代四十文

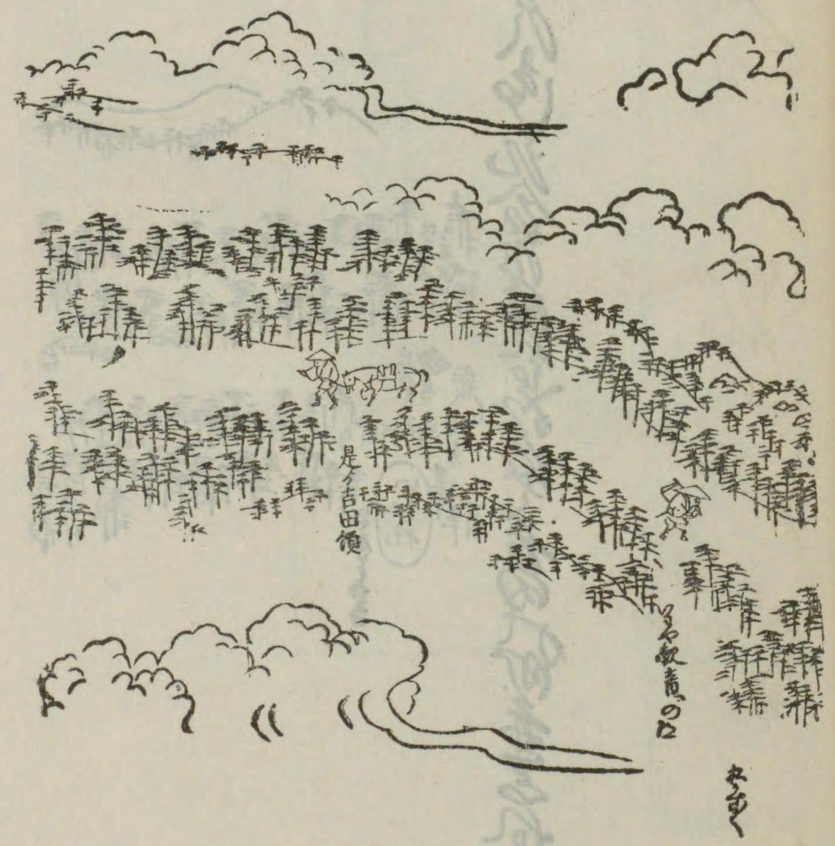

北海道
日本海
同屋宇用

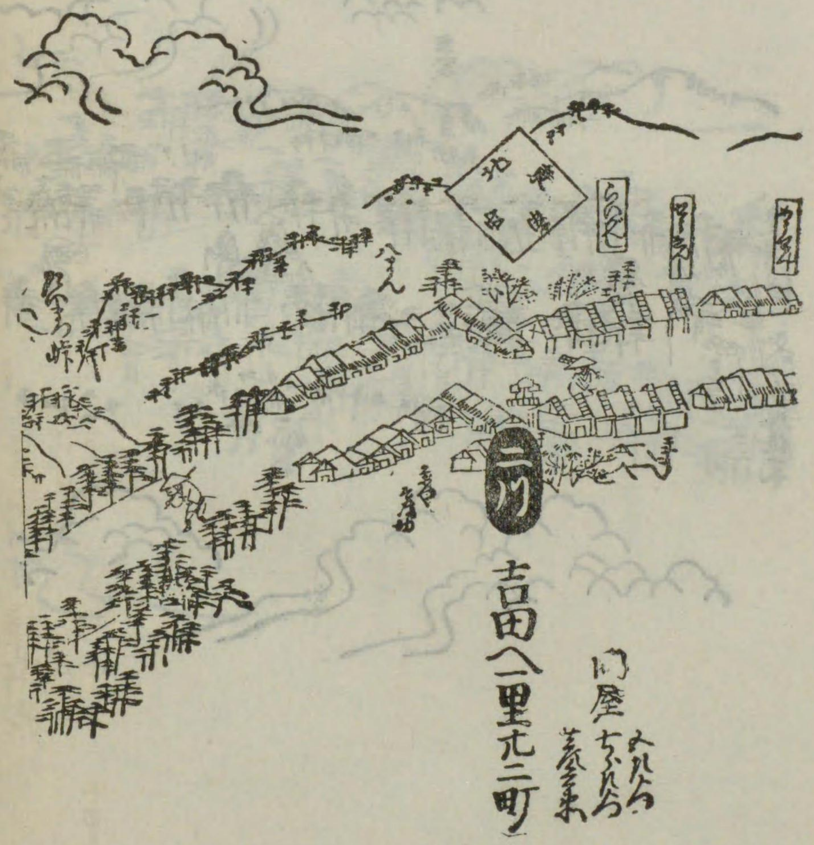


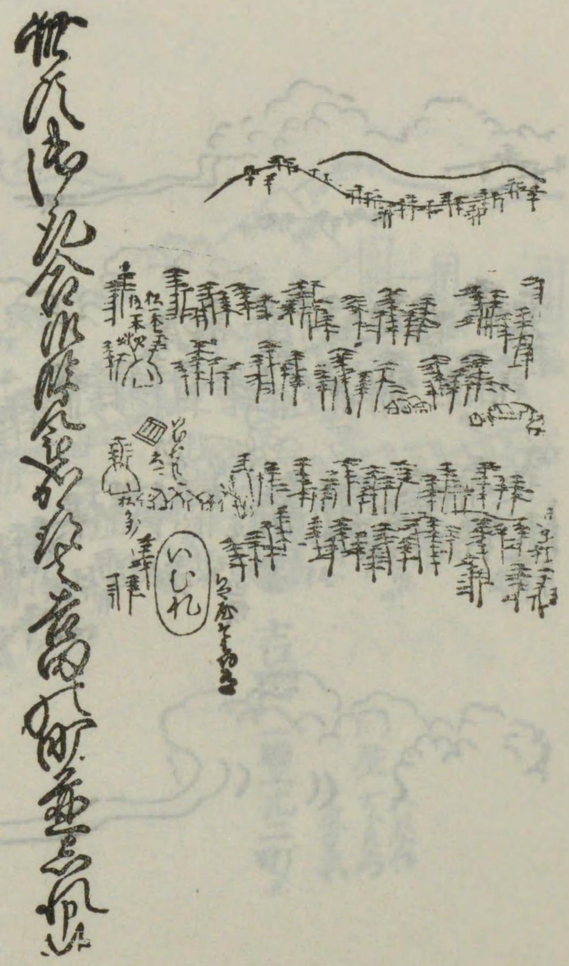

二里六町




立山
二里塚後一本

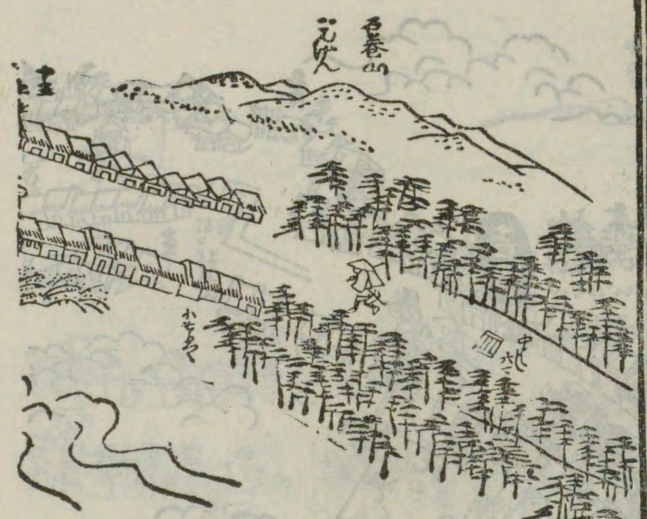


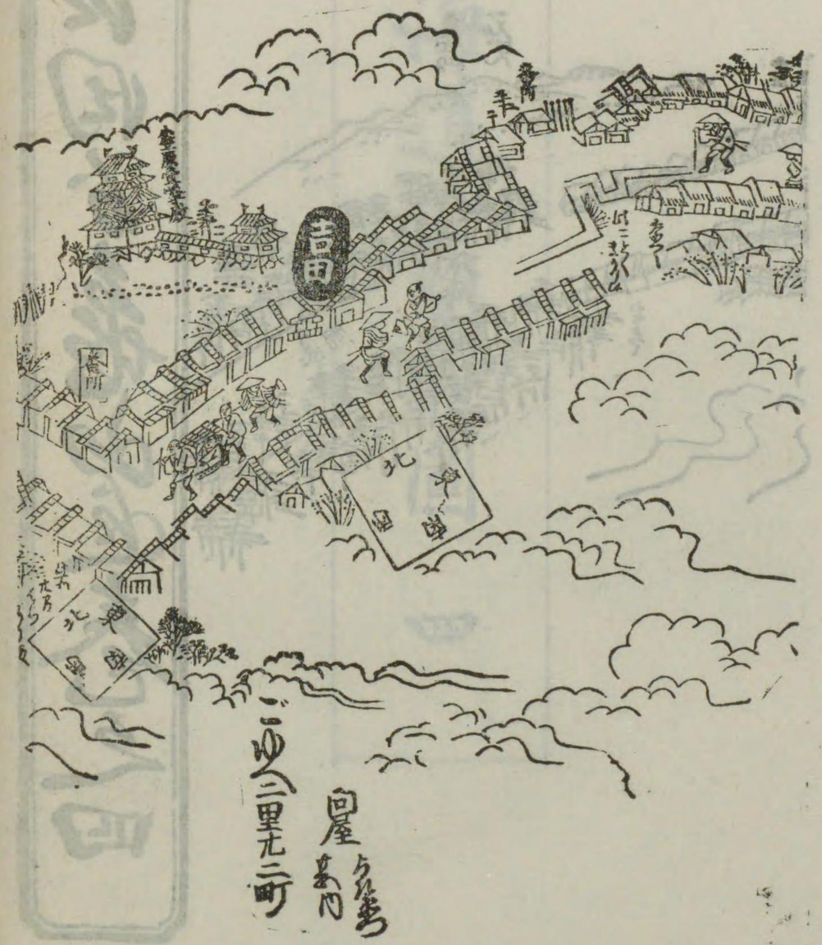

二川
吉田へ一里九二町

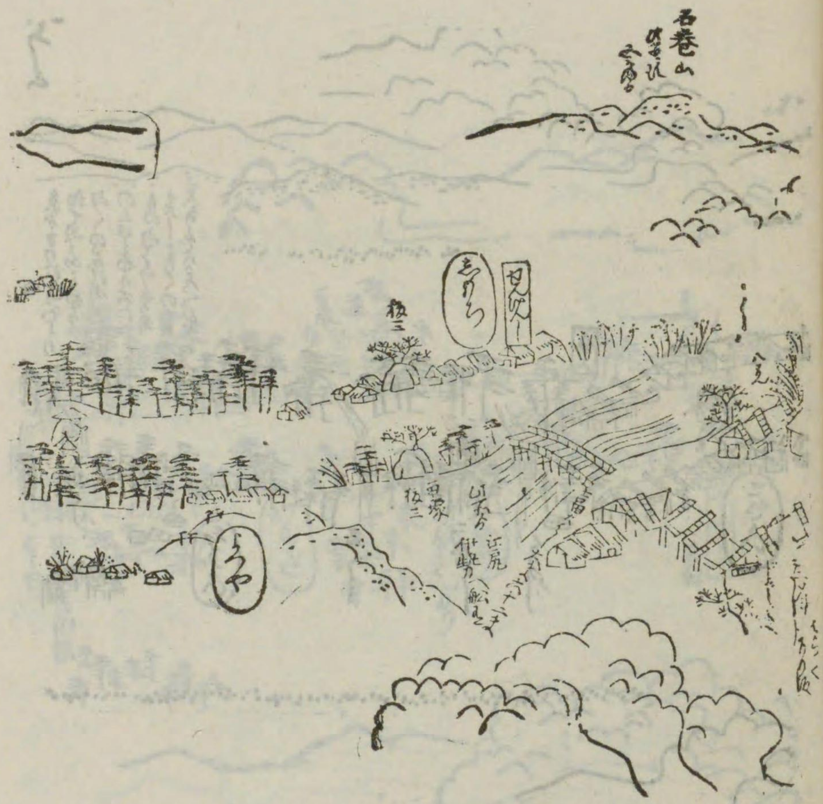

いじれ

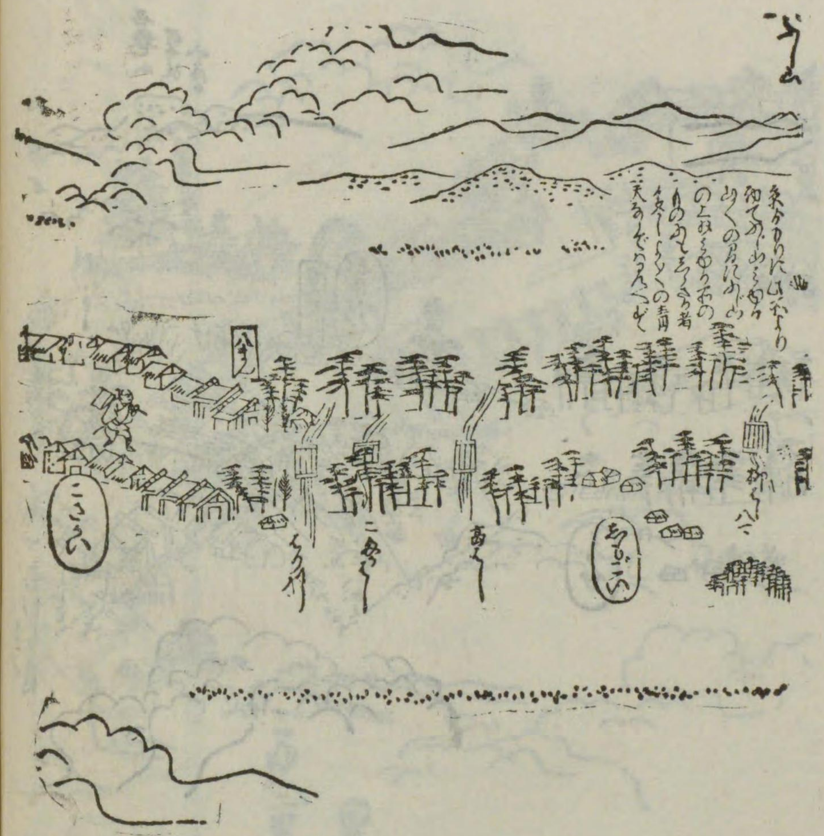
東海道分間繪圖 四

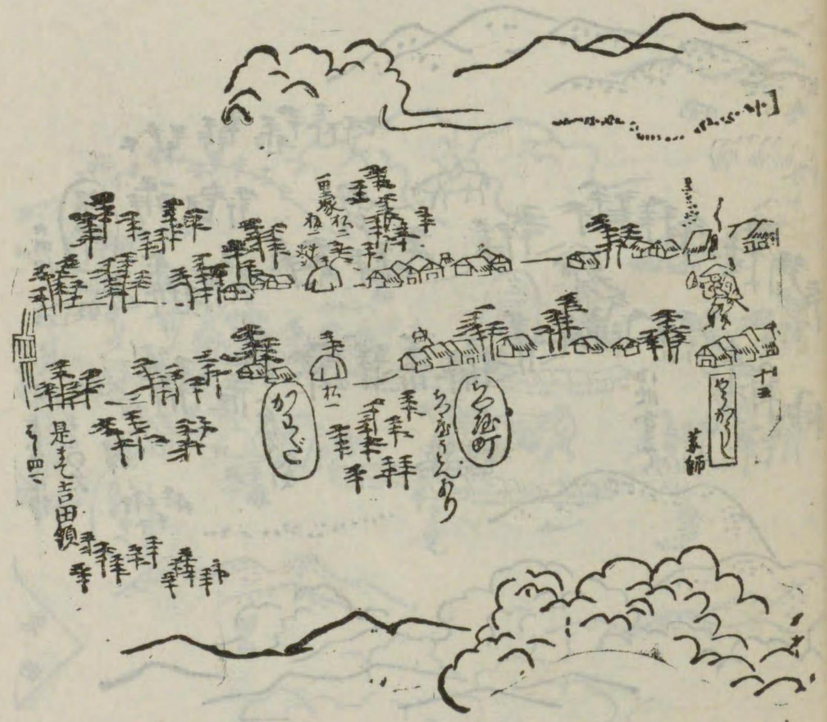
東海道分間繪圖卷之四

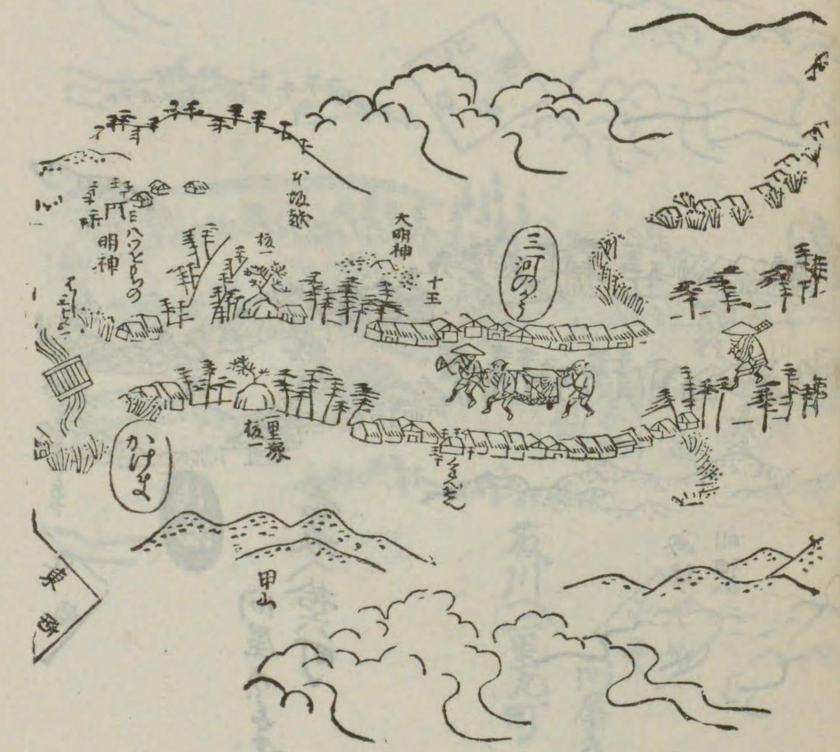


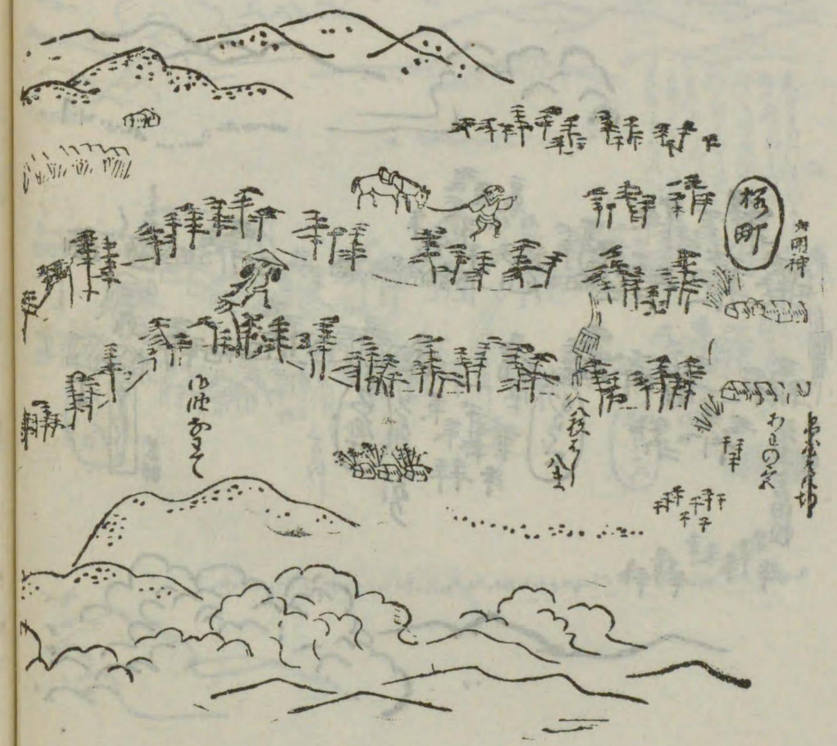

吉田
北
北
ごめ二里九二町

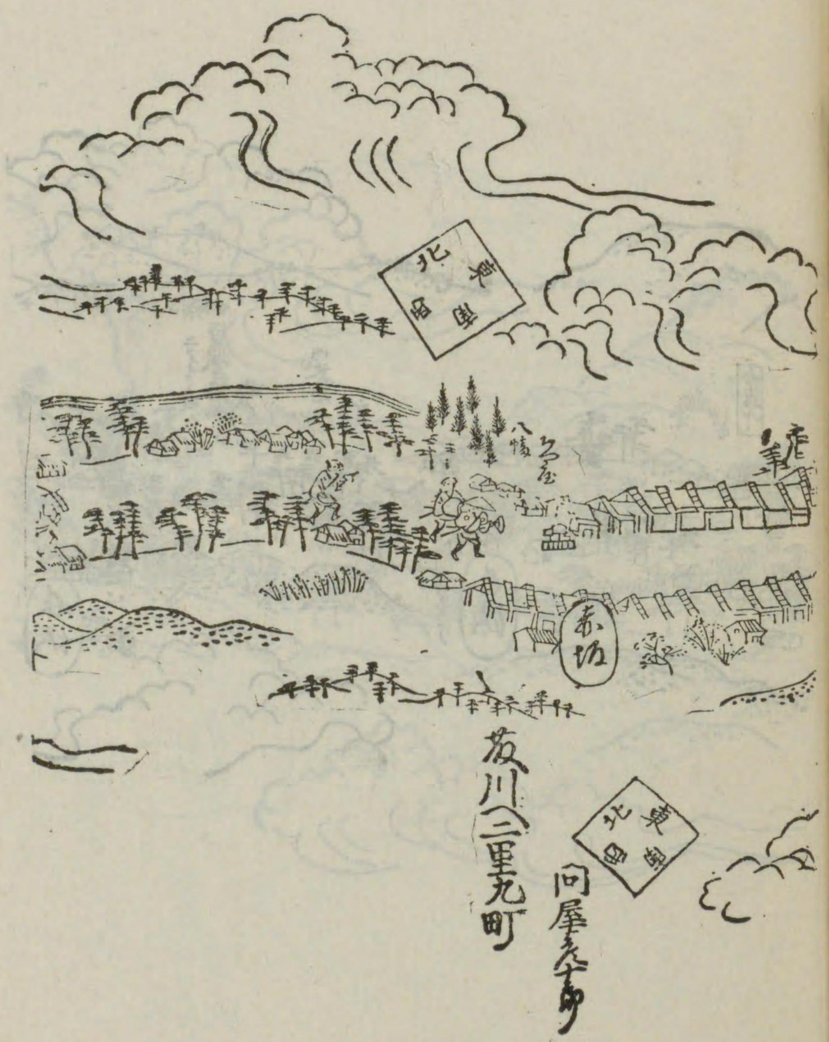

西巻山

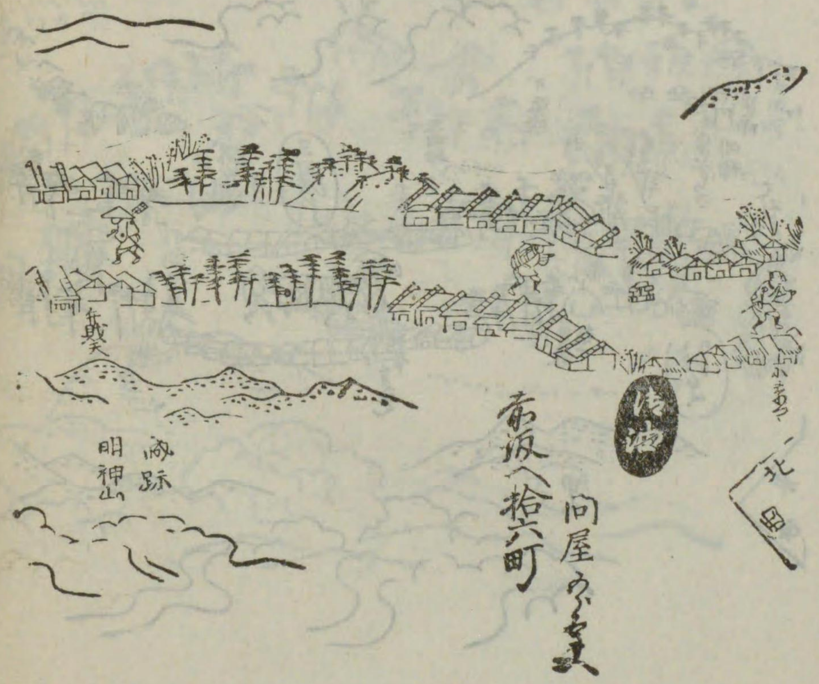


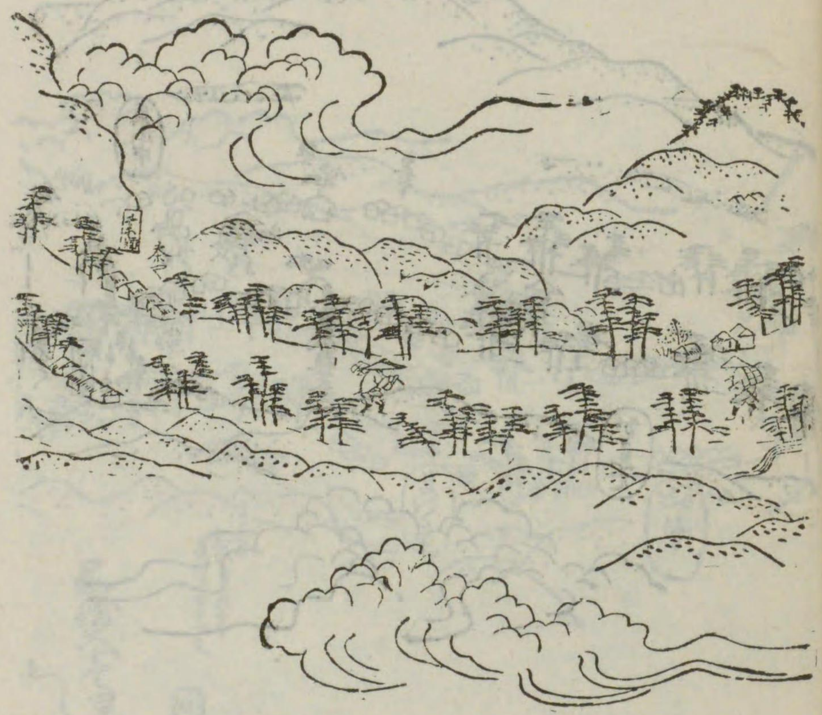


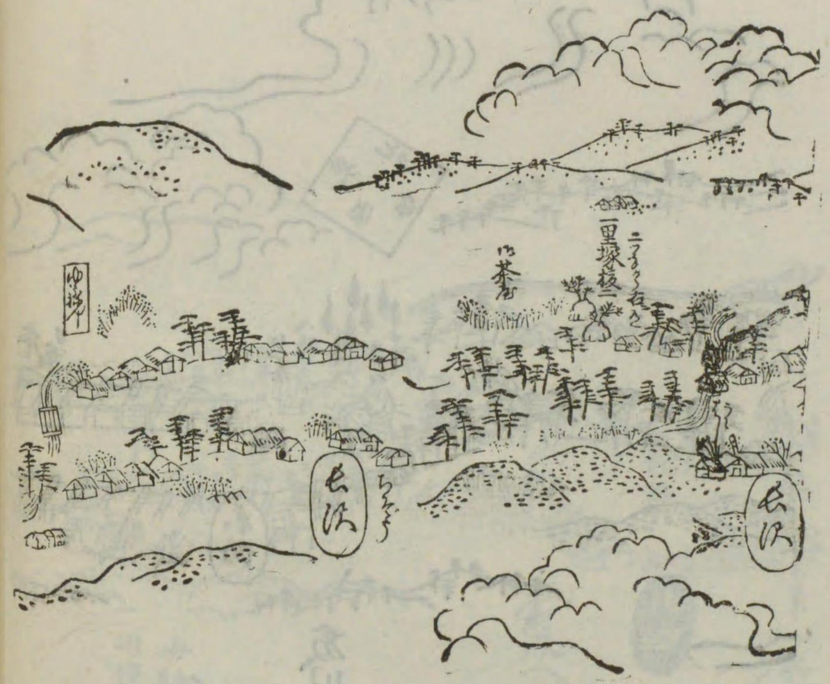

三河
大明神
十王
甲山

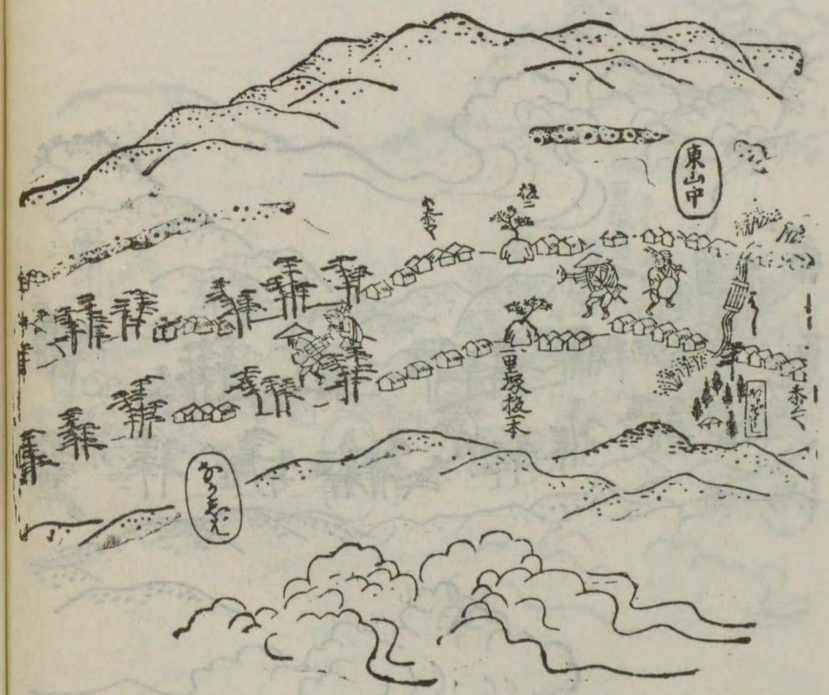

桜町
大明神

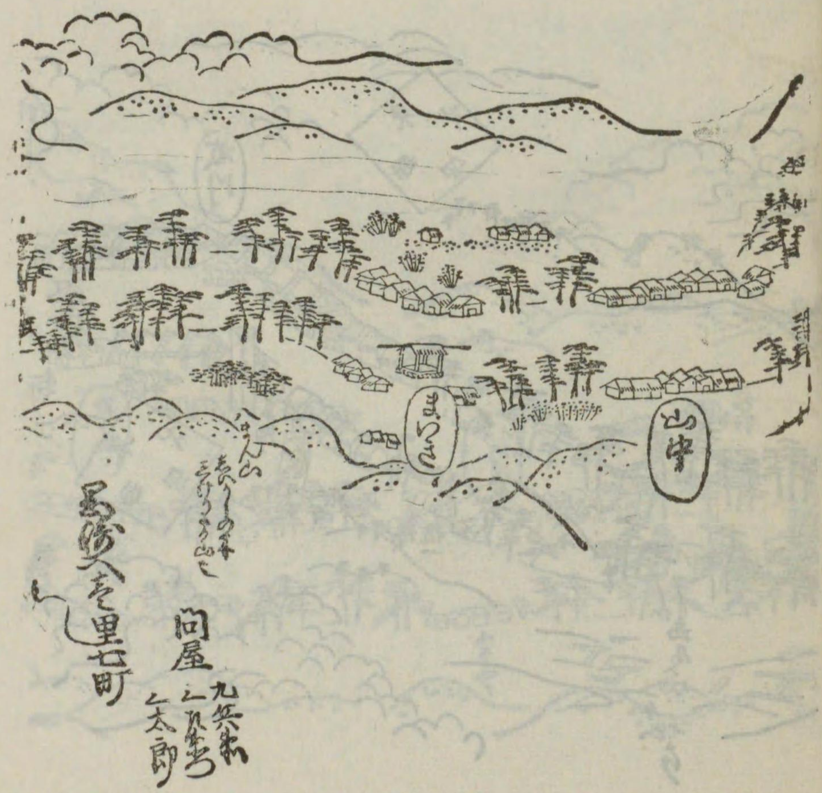

東北
東北
東坂
東北
坂川へ二里九町
問屋

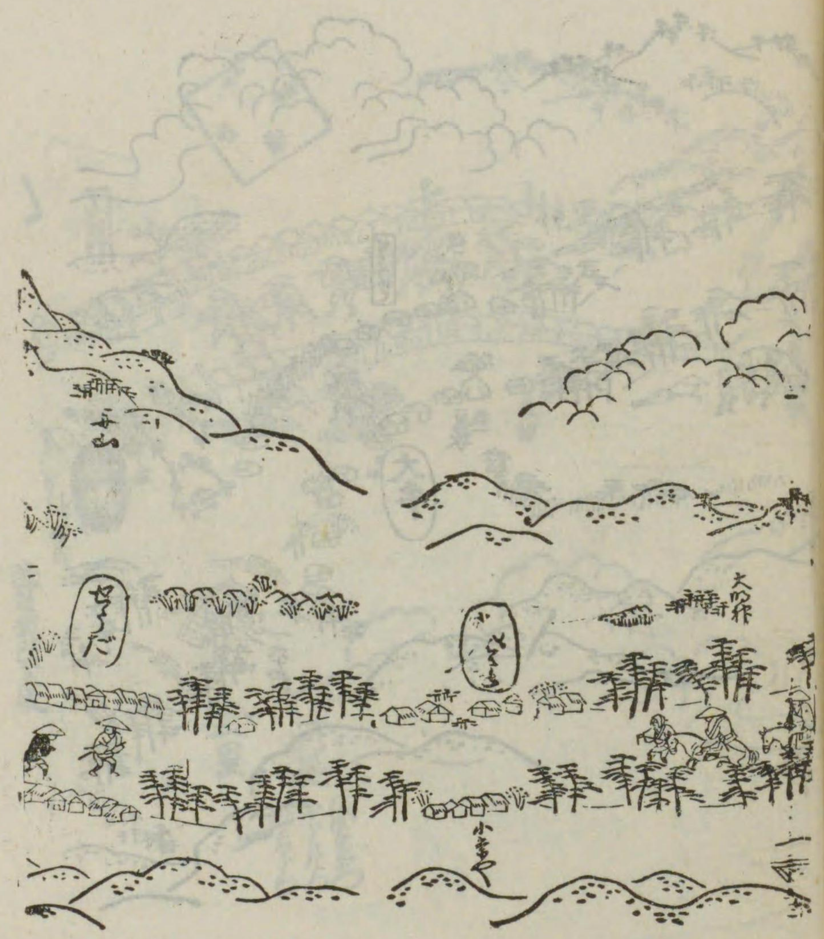

明神山
東坂へ拾八町
問屋
北

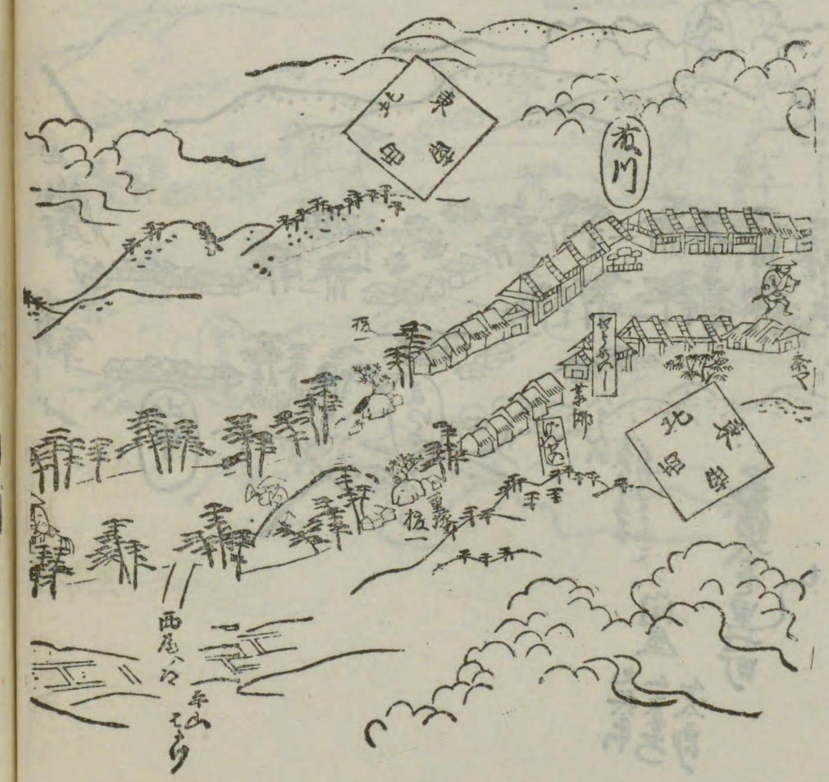


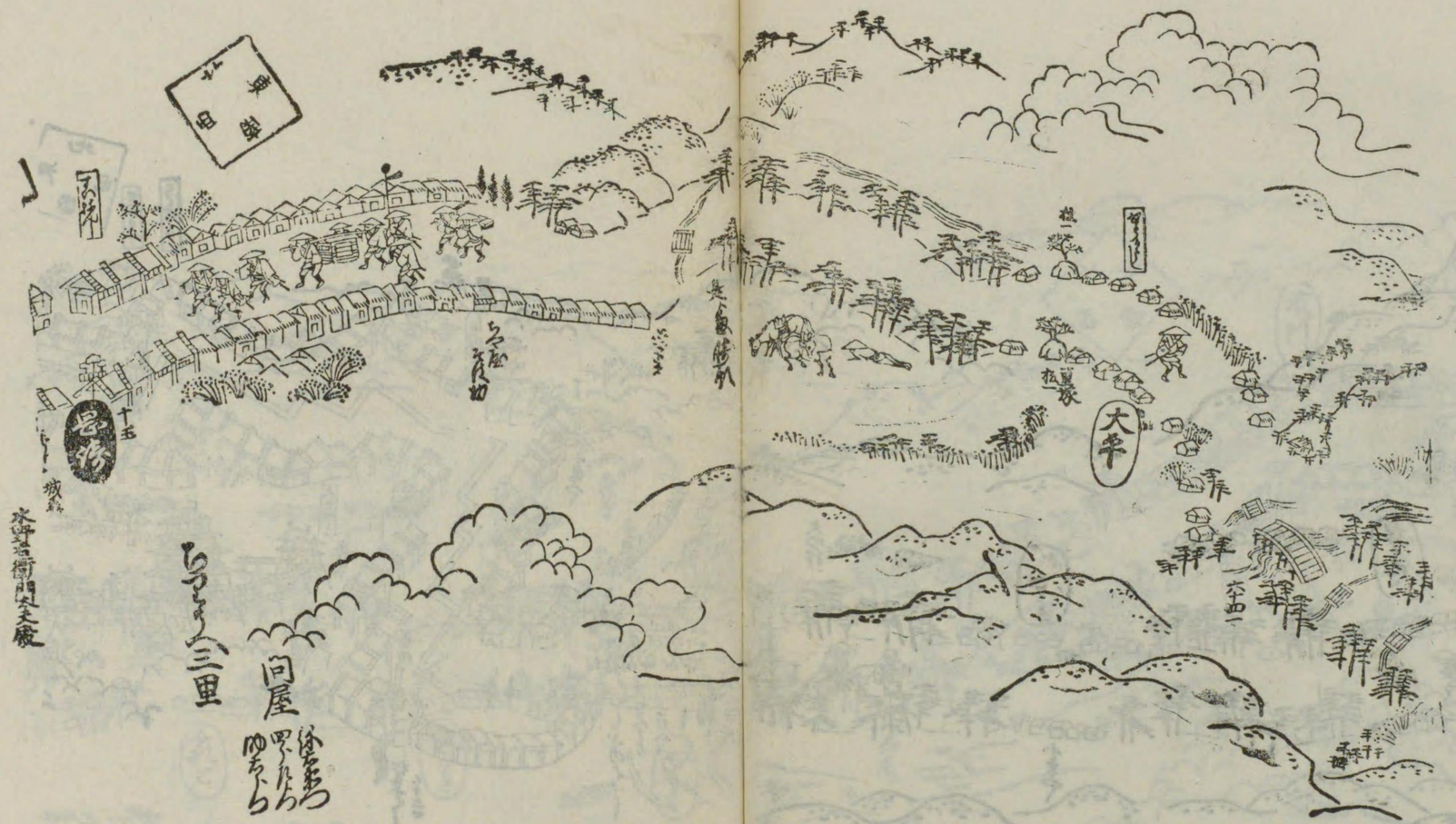

仲坂
一里塚
長沢
長沢

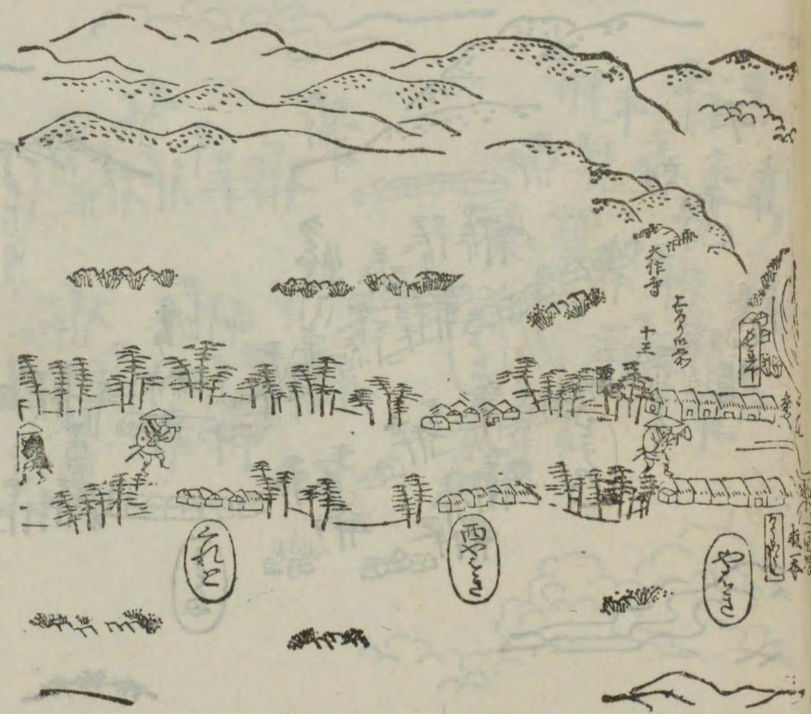

東山中

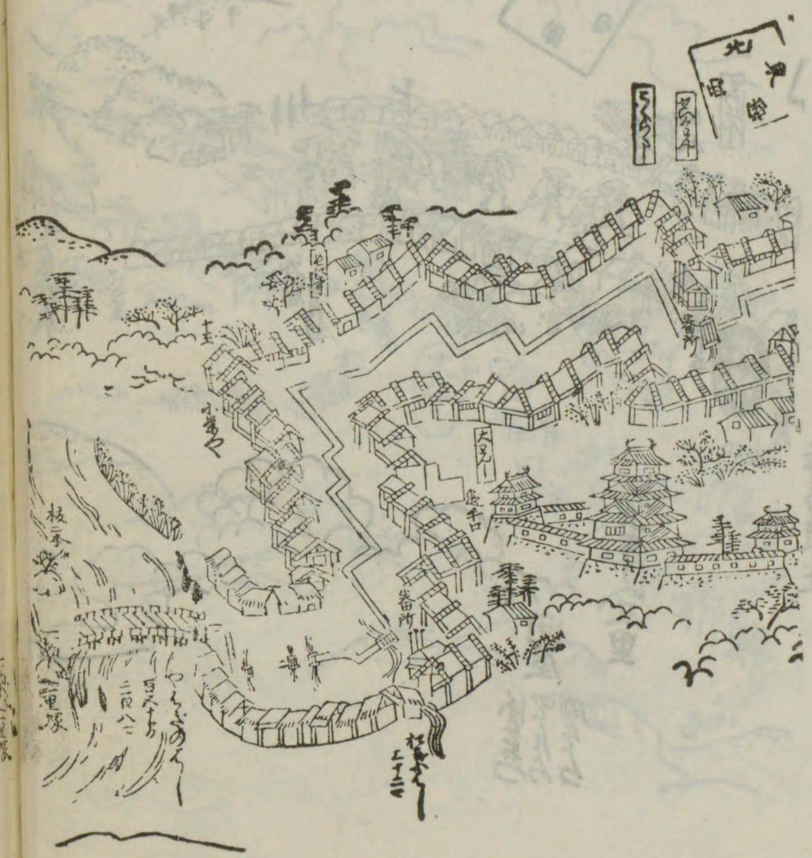

山中

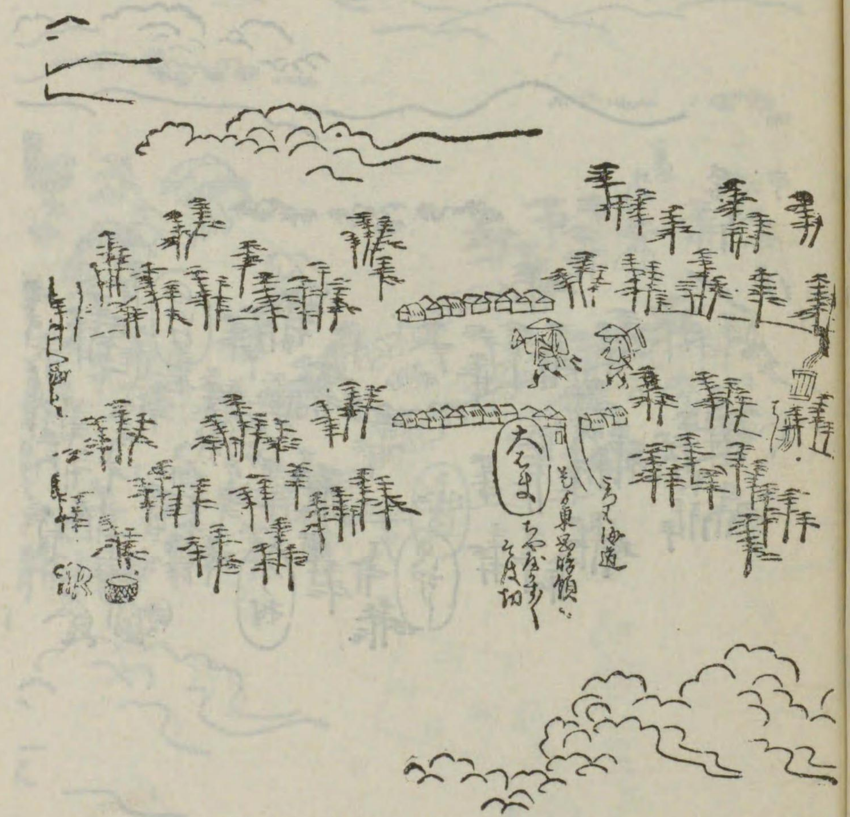


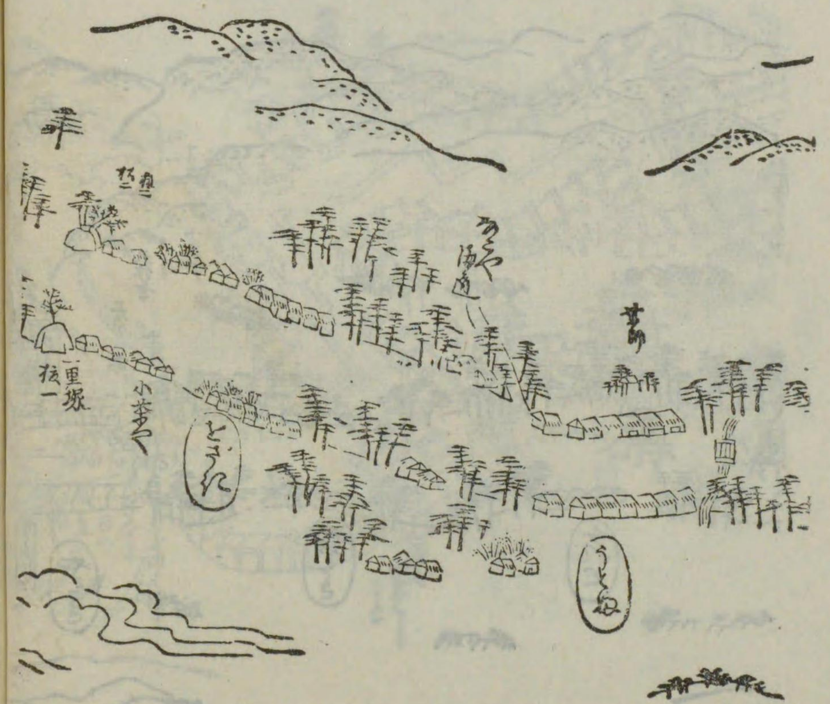


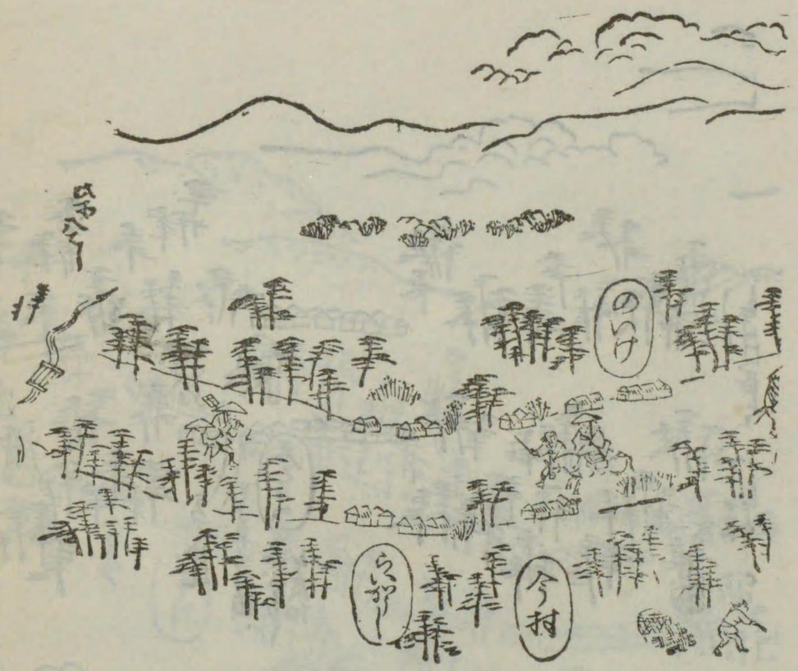

大平
三里
同屋



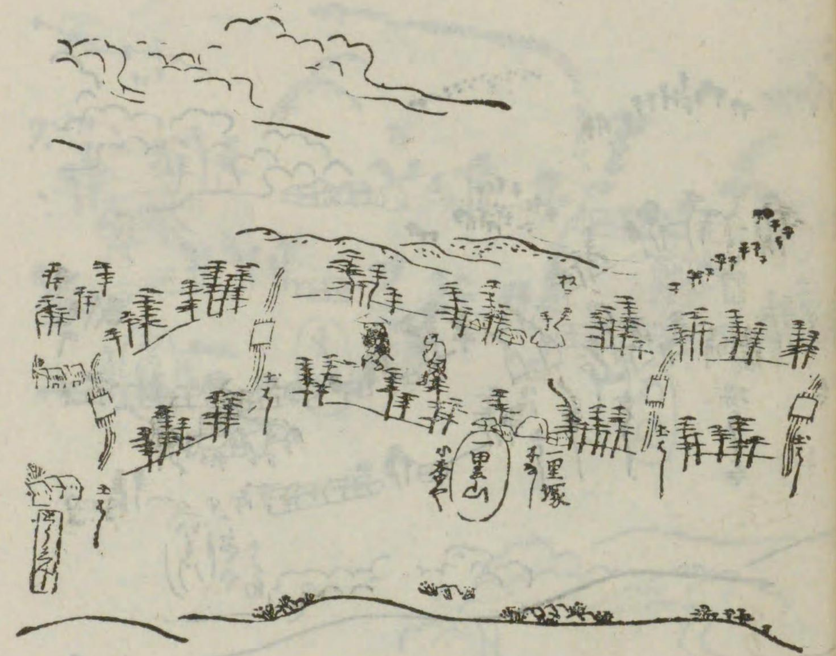


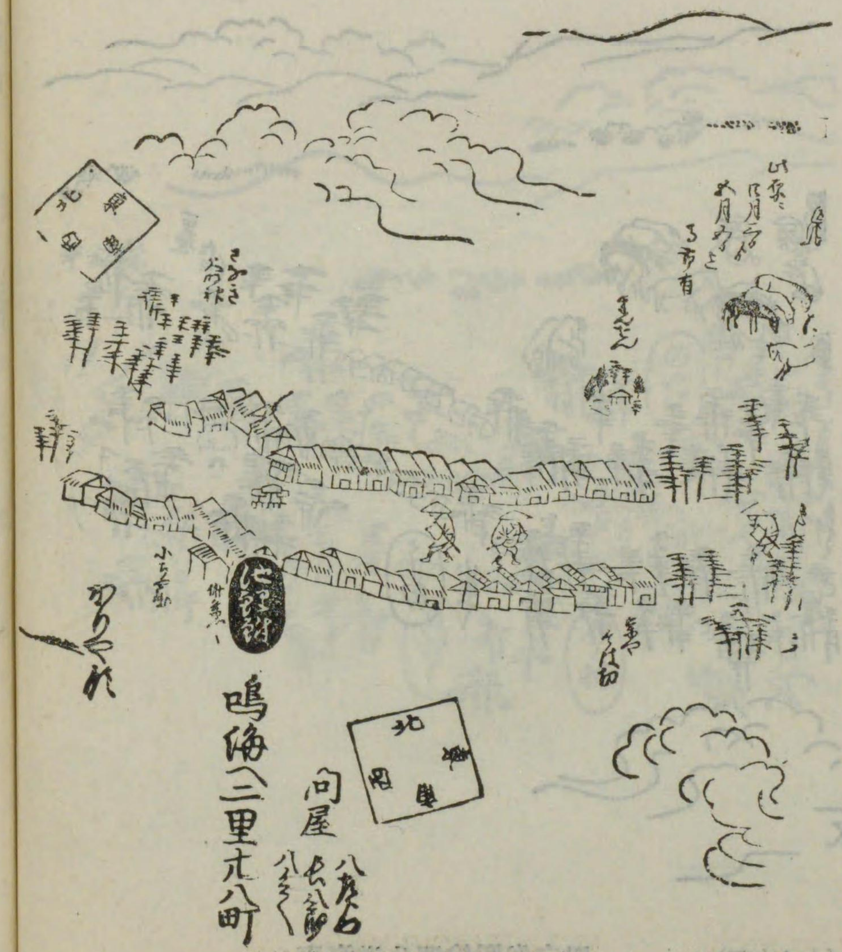


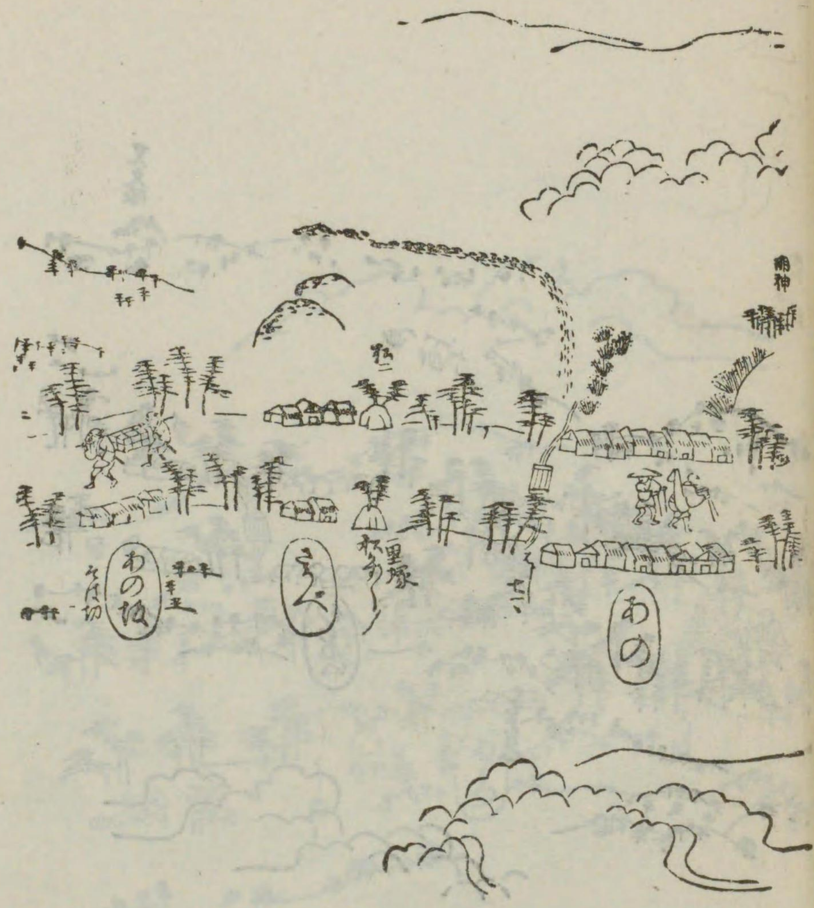


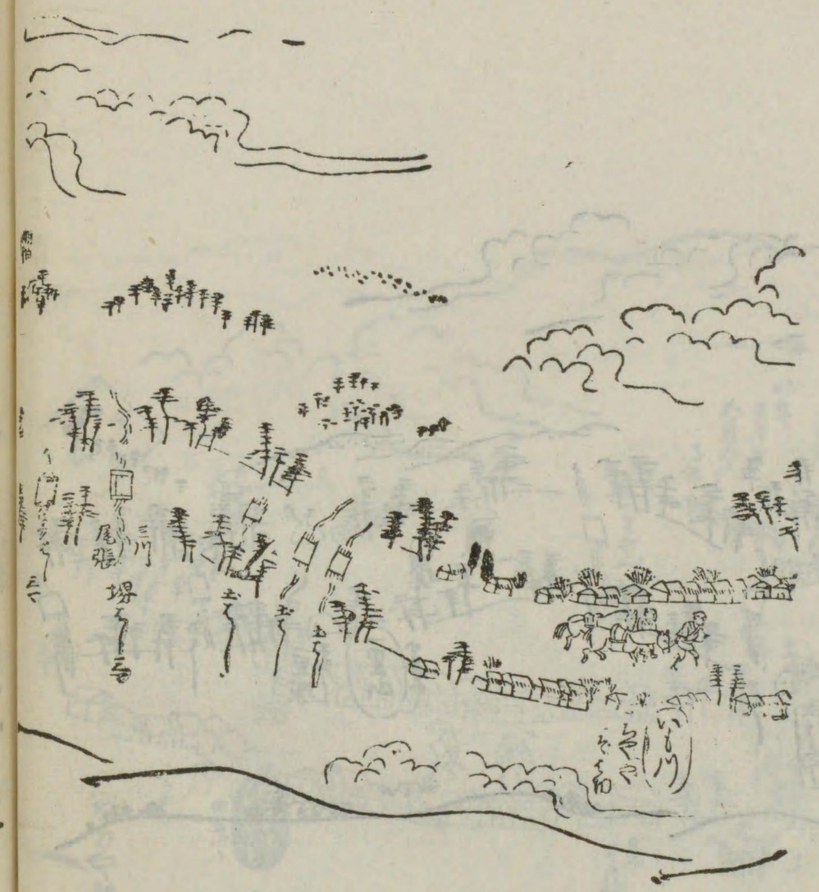

のいけ
今村

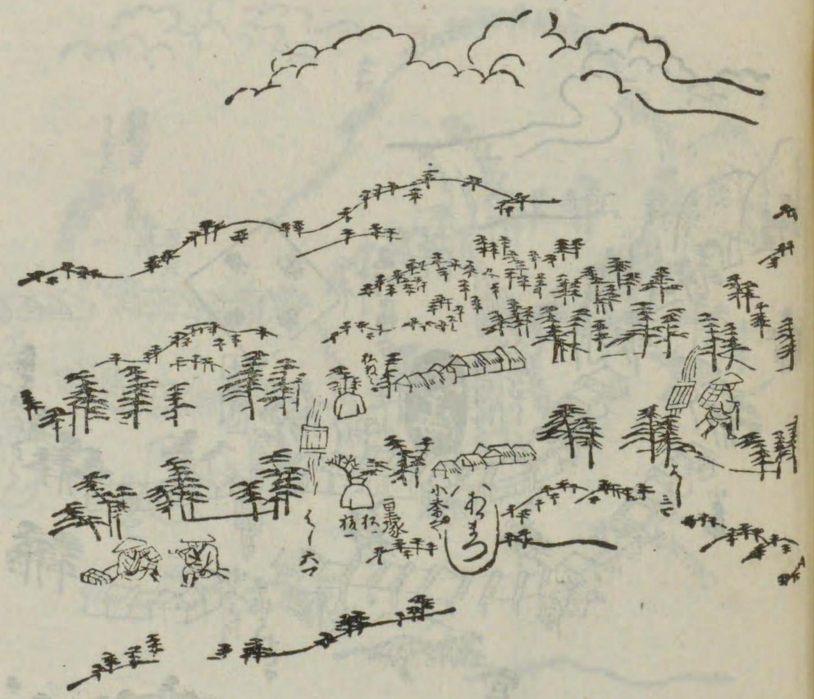
一里塚
小田


一里塚

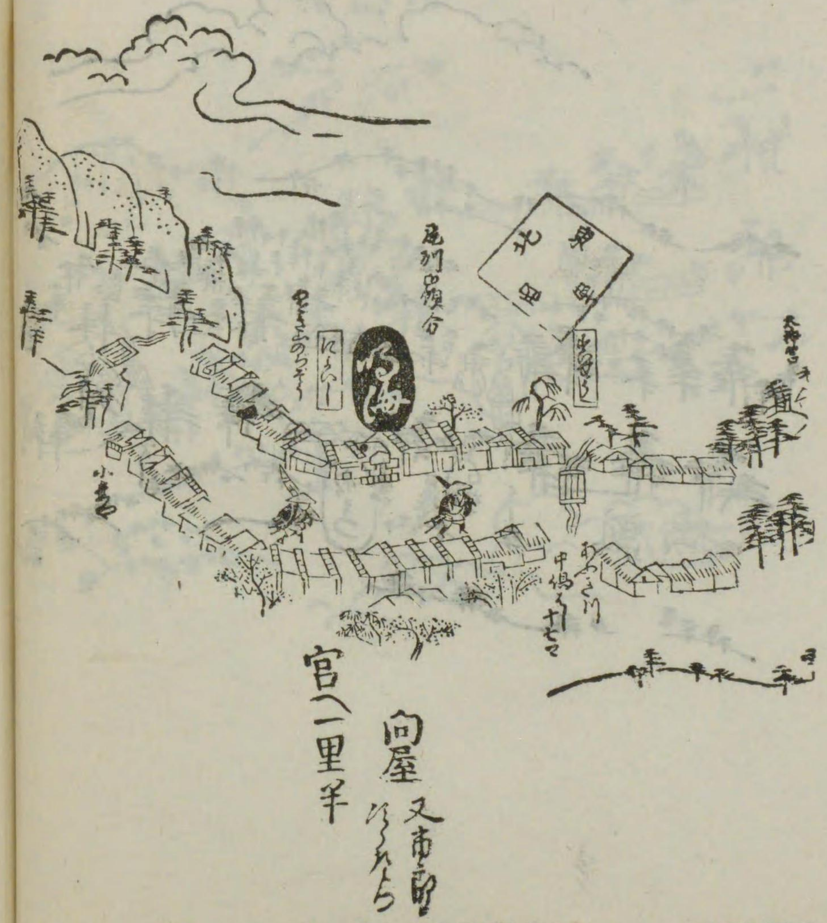

鳴海へ二里九八町
向屋


あの坂
くらべ
あの


尾張
堺
三川
いも川



龍福寺
西のゝ
一里塚
小まや


尾州中嶋分
中嶋
白屋
宮へ一里半